静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第158集

前岡遺跡・今城

井伊谷川流域の遺跡　Ⅰ

平成16年度二級河川井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第158集

前岡遺跡・今城

井伊谷川流域の遺跡　Ⅰ

平成16年度二級河川井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本書は、井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

静岡県の西部に位置する引佐郡引佐町・細江町は、細江町の都田川流域を除くと、発掘調査の件数が決して多いとはいえず、考古学的には不明である部分が多い地域である。それは、開発が少ないことにより消滅する遺跡が少ないという面からは喜ばしいことかもしれない。しかし、不明であるが故に見逃され、人知れず消えていった遺跡が無いとも限らない。

一連の井伊谷川河川改修工事に伴い、平成８年度より当研究所において、都田川との合流地点に存在する細江町井通遺跡の調査が開始された。井通遺跡の調査では、検出された弥生時代中期の大集落、古代には引佐郡衙に関連する遺構と遺物などから、引佐郡における中心地であったことが判明した。その後、平成13年度から井伊谷川の支流である神宮寺川の改修・区画整理事業に伴い引佐町矢畑遺跡の調査も行い、検出された古墳時代前期の祭祀遺構、中世の屋敷などはこの地域の特徴をよく表しているものであろう。本報告書に所収されている引佐町前岡遺跡は、平成16年度の調査、細江町今城は平成14年度の調査である。

平成16年を振り返ると、台風・大雨・地震と自然の猛威に悩まされた１年であった。当事業のきっかけも昭和49年の「七夕豪雨」という大災害である。幸いなことに、当地域では以前のような被害は無かった。それはすでに終了している都田川の改修工事によるものかもしれない。都田川の改修工事によってもいくつかの遺跡の調査がなされ、遺跡の調査終了部分は失われている。今回の遺跡達も、同様に現代人の安全・安心のために犠牲となったのである。それを我々は肝に銘じなくてはならないであろう。

当事業によって井伊谷川という一つの河川の流域において、４遺跡の調査を行った。時代も縄文時代晩期から中近世にかけての遺構・遺物が検出されている。それらを通してみることによって、当地域の遙かな祖先たちの足跡が浮かび上がってくることであろう。そこから学べることは決して少なくないはずである。本書は、その第一歩目であり、今後刊行される報告書と切り離して考えることはできない。そのために書名に「井伊谷川流域の遺跡Ⅰ」と記しているのである。

最後に、今回の調査にあたって多大なるご協力をいただいた、静岡県浜松土木事務所、引佐町教育委員会、細江町教育委員会に感謝するとともに、作業に従事した作業員・調査員の労苦をねぎらいたい。

2005年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　　忠

例　言

1．本書は静岡県引佐郡引佐町井伊谷字前岡に所在する前岡遺跡の報告書である。また、細江町五日市字今城に所在する今城の確認調査における成果も掲載した。

2．調査は井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、引佐町・細江町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3．調査は平成14年度に確認調査を、平成16年度に本調査と整理作業を実施した。

4．調査体制は次のとおりである。

平成14年度

所長	斎藤　忠	副所長	飯田英夫	常務理事兼総務部長　粂田徳幸
総務課長	本杉昭一	総務課副主任	鈴木訓生	
調査研究部長		山本昇平	調査研究部次長	栗野克巳・佐野五十三
調査研究四課長		足立順司	主任調査研究員	小川和彦

平成16年度

所長	斎藤　忠	副所長	飯田英夫	常務理事兼総務部長　平松公夫
総務課長	鎌田英巳	総務課副主任	鈴木訓生	
調査研究部長		山本昇平	調査研究部次長	栗野克巳・佐野五十三
調査研究三課長		足立順司	調査研究員	中村雅之・蔵本俊明

5．基準点測量・空中写真測量・空中写真撮影は大成エンジニアリング株式会社に委託した。遺物実測・実測図のトレースの一部は株式会社フジヤマに委託した。

6．石材の鑑定は愛知県埋蔵文化財センター・堀木真美子氏に行っていただいた。

7．金属製品の保存処理は当研究所保存処理室（室長西尾太加二）が実施した。遺物写真撮影は当研究所写真室担当職員が行った。

8．本書の執筆は主任調査員小川和彦、調査員蔵本俊明、技術員大野勝美、技術作業員松本寿子が行い、分担は目次に示した。

9．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

10．発掘調査の資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　例

1．本書の図・写真において特に遺跡名の記述がないものは前岡遺跡である。

2．本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　竪穴住居跡	ＳＤ　溝	ＳＦ　土坑
ＳＨ　掘立柱建物跡	ＳＰ　ピット	ＳＸ　不定型遺構	ＳＺ　土器棺墓

3．実測図のスクリーントーン等での表現は以下の通りである。

《遺構》

焼土　　炭の分布

《遺物》

被熱

目　次

序
例言
凡例
第Ⅰ章　調査の経過　（小川・蔵本）…… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　　（１）全体の経過 …… 1
　　（２）前岡遺跡の調査経過 …… 2
　　（３）今城の調査経過 …… 2
　第３節　資料整理作業の経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　（小川・蔵本）…… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の方法と成果 …… 9
　第１節　調査の方法　（小川・蔵本）…… 9
　　（１）前岡遺跡 …… 9
　　（２）今城 …… 9
　　（３）資料整理・報告書作成 …… 9
　第２節　層位　（小川・蔵本）…… 11
　　（１）前岡遺跡 …… 11
　　（２）今城 …… 11
　第３節　前岡遺跡の遺構と遺物 …… 12
　　（１）遺構　（大野）…… 12
　　１．縄文時代晩期～弥生時代 …… 12
　　２．古墳時代後期～奈良時代 …… 16
　　３．中世 …… 25
　　４．時期不明 …… 32
　　（２）遺物　（松本）…… 34
　　１．土器・土製品 …… 34
　　２．石器・石製品 …… 43
　　３．金属製品 …… 47
　第４節　今城の遺構と遺物　（小川・蔵本）…… 52
　　（１）遺構 …… 52
　　（２）遺物 …… 52
　　（３）小結 …… 52
　　１．出土弥生土器について …… 52
　　２．今城地区の中世城砦について …… 52
第Ⅳ章　総括　（蔵本）…… 60
　第１節　前岡遺跡の変遷 …… 60
　第２節　竪穴住居内配石について …… 61
参考文献 …… 63
あとがき …… 64
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡周辺地形図 …… 5
第３図　周辺遺跡分布図 …… 7
第４図　下坂田地区出土遺物実測図 …… 8
第５図　前岡遺跡グリッド配置図 …… 10
第６図　基本土層図 …… 11
第７図　前岡遺跡　遺構全体図 …… 13
第８図　SZ01・SF25・SZ02実測図 …… 14
第９図　SF04実測図 …… 15
第10図　縄文時代晩期～弥生時代遺構概略図 …… 17
第11図　古墳時代後期～奈良時代遺構概略図 …… 18
第12図　SB01実測図 …… 19
第13図　SB02実測図 …… 20
第14図　SB03・SB04実測図 …… 22
第15図　SH01実測図 …… 23
第16図　SF05・SF10実測図 …… 24
第17図　SF12実測図 …… 25
第18図　中世の遺構概略図 …… 27
第19図　SH02・SH03・SH05実測図 …… 28
第20図　SH04・SH06実測図 …… 29
第21図　SF14・SF19・SF24・SF20実測図 …… 30
第22図　SF27・SF28実測図 …… 31
第23図　SX01・SF18・SF22実測図 …… 32
第24図　SD06・SD07実測図 …… 33
第25図　土器実測図１（縄文時代～弥生時代）…… 35
第26図　土器実測図２（縄文時代～古墳時代）…… 36
第27図　土器実測図３（古墳時代～奈良時代）…… 38
第28図　土器実測図４（古墳時代～奈良時代）…… 39
第29図　土器実測図５（古墳時代～奈良時代）…… 40
第30図　土器実測図６（古墳時代～奈良時代）…… 41
第31図　土器実測図７（古墳時代～奈良時代）…… 42
第32図　土器実測図８（古墳時代～奈良時代）…… 43
第33図　土器・土製品実測図（中・近世）…… 44
第34図　石器実測図１（石鏃・未成品）…… 46
第35図　石器実測図２（打製石斧）…… 47
第36図　石器実測図３（磨製石斧）…… 48
第37図　石器実測図４（太形蛤刃石斧）…… 49
第38図　石器実測図５（台石）…… 49
第39図　石器・石製品実測図（環状石斧・石剣）…… 50
第40図　鉄鏃実測図 …… 51
第41図　銭貨実測図 …… 51
第42図　今城　トレンチ配置図 …… 53
第43図　今城　土坑実測図 …… 54
第44図　今城　遺物実測図 …… 55
第45図　SB01配石実測図 …… 62

挿表目次

表１　調査工程表 …… 1
表２　遺跡地名表 …… 7
表３　出土遺物観察表１（土器:縄文時代～奈良時代）…… 56
表４　出土遺物観察表２（土器:古墳時代～奈良時代）…… 57
表５　出土遺物観察表３（土器:古墳時代～奈良時代）…… 57
表６　出土遺物観察表４（土器:古墳時代～奈良時代）…… 58
表７　出土遺物観察表５（土器・土製品:中・近世）…… 58
表８　出土遺物観察表６（石器・石製品）…… 59
表９　出土遺物観察表７（金属製品）…… 59
表10　出土遺物観察表８（下坂田地区）…… 59
表11　出土遺物観察表９（今城）…… 59

図版目次

図版１　１　遺跡遠景　２　前岡遺跡　調査区全景
図版２　１　調査区完掘状況　２　調査区完掘状況
図版３　１　SZ01・SF25　遺物出土状況　２　SZ02　遺物出土状況
図版４　１　SF04　遺物出土状況　２　包含層　環状石斧出土状況　３　包含層　石剣出土状況
図版５　１　竪穴住居群　完掘状況　２　SB01　完掘状況
図版６　１　SB01　配石検出状況　２　SB01　遺物出土状況１　３　SB01　遺物出土状況２
図版７　１　SB02　完掘状況　２　SB03　完掘状況
図版８　１　SB04　完掘状況　２　SH01　完掘状況
図版９　１　SF12　遺物出土状況　２　SF10　遺物出土状況
　　３　包含層　須恵器出土状況１　４　包含層　須恵器出土状況２
図版10　１　掘立柱建物跡群　完掘状況　２　SH02　完掘状況
図版11　出土土器１（縄文時代～弥生時代）
図版12　出土土器２（縄文時代～古墳時代）
図版13　出土土器３（古墳時代～奈良時代）
図版14　出土土器４（古墳時代～奈良時代）
図版15　出土土器５（古墳時代～奈良時代）
図版16　出土土器６（古墳時代～奈良時代）
図版17　出土土器７（中・近世）
図版18　出土石器１（石鏃・未成品）
図版19　出土石器２（石斧）
図版20　出土石器３（石斧・台石）
図版21　出土石器・石製品（環状石斧・石剣・不明石製品）
図版22　出土金属製品（鉄鏃・銭貨）
図版23　１　今城　土坑　遺物出土状況　２　今城　出土土器

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査の経過

昭和49年７月７日のいわゆる七夕豪雨は、静岡県全域に甚大な被害を及ぼした。浜名湖北東に注ぐ都田川、およびその支流である井伊谷川でも堤防の決壊等により大きな被害が生じた。

その被害を受け、静岡県土木部は都田川防災計画を立て、都田川の全面改修工事を施工することとなり、昭和51年より着工した。井伊谷川でも河川改修が計画、実施されることとなった。一連の事業の中で、平成８年度より細江町井通遺跡、平成13年度より引佐町矢畑遺跡の調査が行われている。

それらの計画において、引佐町・細江町の町境で大きく蛇行している部分の川幅を広く、直線的にする工事が計画された。その区域において掘削され新たな流路となる部分のうち、細江町・今城は中世の城館として周知の遺跡であることから調査の必要が指摘された。また対岸の引佐町井伊谷字前岡（前岡遺跡）は遺跡としては周知されていなかったが、南斜面の丘陵地という地形および周辺地域から縄文時代を中心とした遺物が採集されていることから、埋蔵文化財包蔵地の可能性が考えられた。

それらの状況を受け、静岡県浜松土木事務所の委託により、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、平成15年２月から３月にかけて、両地区の確認調査を行った。

確認調査の結果、引佐町前岡からは古墳時代から中近世にかけての遺構・遺物が検出された。細江町今城においては果樹園の改植による撹乱が激しく、わずかに土坑を１基検出したのみであった。協議の結果、引佐町前岡（前岡遺跡）は平成16年度に本調査、今城は確認調査の延長で引き続き１基の土坑を調査し、本調査は行わない旨が決定された。

第２節　発掘作業の経過

（１）全体の経過

平成14年度実施確認調査および平成16年度の全体の工程表を表１に示す。

表１　調査工程表

	平成14年度		平成16年度									
月	2月	3月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
前岡遺跡確認調査	―	―										
前岡遺跡本調査			―	―	―	―	―					
下坂田地区確認調査				―	―							
今城確認調査		―										
資料整理								―	―	―	―	―

（２）前岡遺跡の調査経過

平成14年９月より準備工を開始し、平成15年２月第１週より確認調査を行った。調査範囲内に25ヶ所のトレンチを設定し、0.15㎥のバックフォーにより表土を除去した後、人力により掘り下げ、遺構の有無を確認した。その結果、ほぼ半分のトレンチにおいて遺構・遺物が検出されたため、第２週には遺構の範囲を詳細に調べるため９ヶ所のトレンチを追加設定し、同様に調査を行った。実測、記録写真を撮影した後、第４週から埋め戻し３月第１週には調査を終了した。

本調査は平成16年６月より準備工を開始し、バックフォーによる表土除去、プレハブ設置位置等の整備を行い、プレハブ設置・資機材搬入等の後、人力において包含層を掘り下げ、遺構の検出・掘り下げを行った。遺構の実測、写真撮影等を順次行い、７月29日に空中写真撮影・空中写真測量を実施した。８月８日には現地説明会を、その後実測を行い、８月31日に現地調査を終了した。

また前岡遺跡本調査と並行して、対岸の下坂田地区の確認調査を７月第２週から８月第３週まで行った。数点の遺物が見つかったが、現代の堆積層からであり遺構は確認されなかった。

発掘作業と並行してほぼ全期間にわたって現地において基礎整理作業を行った。内容は出土遺物の洗浄・注記等である。

（３）今城の調査経過

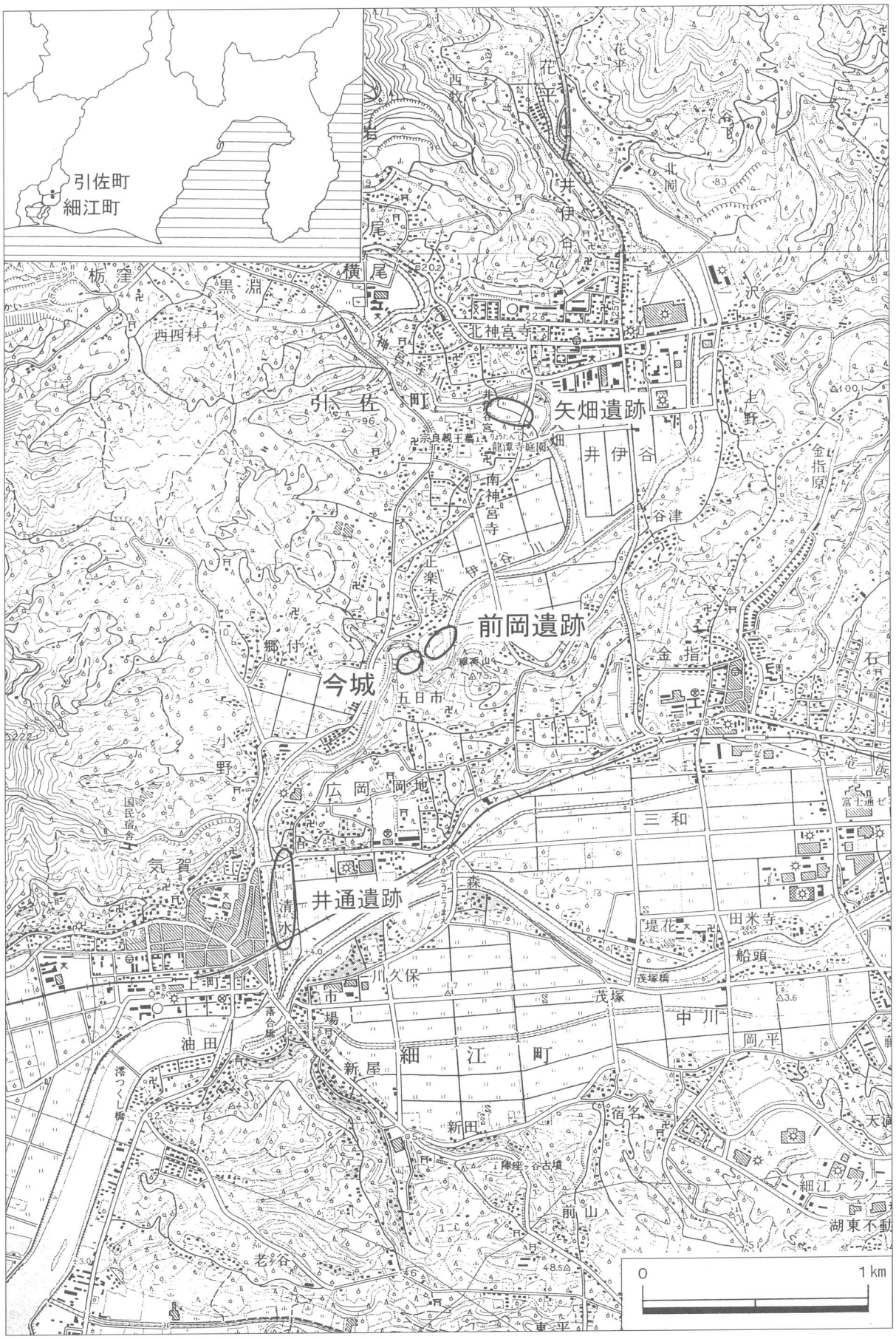
前岡遺跡の確認調査終了の３月第２週より、トレンチ掘削予定箇所付近の果樹等の枝を伐採した後、0.15㎥のバックフォーにてトレンチの表土除去を行った。人力掘削により遺構の有無を確認した。遺構・遺物が検出された１Ｔの遺構の広がりをとらえるために、トレンチの拡張・追加を行ったが他に遺構は検出されなかった。３月第３週に土坑内遺物出土状況等の実測、写真撮影を行った後、バックフォー・人力で埋め戻しを行い、現地作業を終了した。

第３節　資料整理作業の経過

資料整理作業は平成16年11月より平成17年３月まで、森現地事務所において行った。

作業は図面・写真整理、遺物の分類・仕分けを行い、遺物接合、遺構版下原図の作成にかかった。また、出土金属製品保存処理作業も行った。土器・土製品・石器の実測およびトレースの一部は委託した。残りの遺物の実測・拓本採取を行い、版下原図を作成した後、遺構とともにトレースを行った。その後、遺物の観察表作成、遺物写真撮影、写真図版版組、原稿執筆を行った。

最後に遺物・図面・写真等を収納し作業を終了した。



第１図　遺跡位置図　（国土地理院発行1:25,000地形図「気賀」「伊平」を複写して加筆）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

静岡県引佐郡引佐町・細江町は静岡県西部・浜名湖の北東に位置する。引佐町は西から北にかけては愛知県南設楽郡鳳来町と接し、南に細江町、その西に三ヶ日町、東は天竜・浜北・浜松の各市と接している。細江町は西に三ヶ日町、東と南は浜松市に接している。ただし、以上の各市町は平成17年７月に計３市８町１村からなる大合併を行い浜松市となる予定である。

引佐町は赤石山脈の南西端にあり、引佐町北東部に端を発する都田川は細江町をほぼ東西に貫き、浜名湖に注ぐ。引佐町中央部を流れる井伊谷川は南へ進み、細江町中心部で都田川と合流している。

前岡遺跡は引佐町井伊谷字前岡に、今城は細江町五日市字今城に所在する（第２図）。両遺跡は井伊谷川を挟んで向かい合わせに位置している。井伊谷川は引佐町の中心である井伊谷の盆地を形成するが、南端では東西よりのびる丘陵により狭窄部ができ、井伊谷川は大きく蛇行している。その南に張り出した丘陵上に位置するのが前岡遺跡であり、北側に張り出した丘陵上に位置するのが今城である。ここでは井伊谷川が細江町と引佐町の町境となっている。

前岡遺跡は標高約10ｍの緩やかに傾斜した丘陵上で、平野部との比高差は約３ｍである。調査区は果樹園・畑として利用されていた。

今城は標高約20ｍの舌状台地上で、西、北、東の三方を蛇行する井伊谷川に削られ、急な深い崖によって画されている。今城の位置する丘陵の南側は都田川に向かい、やや緩やかな傾斜となっている。調査範囲は比較的平坦な果樹園となっていた。

第２節　歴史的環境

井伊谷川流域においては発掘調査例が少なく、不明な部分が多いが、都田川流域も含め周辺遺跡の縄文時代以降の様相を見てみる（第３図）。また一連の事業で調査した遺跡の成果も盛り込むが、整理途中であるため詳細については今後の変更があり得る。

・縄文～弥生時代

井伊谷川とその支流である神宮寺川流域ではこの時期の調査例が少ないが、故月岡準三氏による精力的な踏査・資料収集によって概要を知ることができ、栃窪南遺跡・井伊谷遺跡・正楽寺南遺跡等々の縄文遺跡が散在する。栃窪南遺跡は樫王式の土器と石器、井伊谷遺跡は五貫森式～水神平式の土器が石器類とともに発見されている。今城周辺においても縄文時代晩期以降の遺跡が比較的よく知られている。

神宮寺川右岸に位置する矢畑遺跡は、西から東へと延びる丘陵の北側に位置しているが、調査により条痕文土器と弥生時代中期の土器がわずかに出土しているが遺構は検出されていない。

都田川上流河岸段丘上に位置する川山遺跡は全体像が判明していないが、縄文時代中期から弥生時代にかけての土器が出土している。注目されるのは縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけて石器の製作が行われていたことであり、打製石斧・磨製石斧が多くの未成品とともに多量に採集されている。

都田川中流域では、左岸の三方原台地上に立地する前平Ⅲ・前原Ⅳ・前原Ⅶ遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡が確認されている。また、前原Ⅷ遺跡・沢上Ⅵ遺跡において縄文時代晩期から弥生時代前期、条痕文系の土器棺が発見されている。

第２図　遺跡周辺地形図　（細江町都市計画基本図・引佐町都市計画基本図を複写して加筆）

都田川中下流域の低地部をみると、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて自然堤防上に集落・墓域が営まれている。椿野遺跡・祝田遺跡・川久保船渡遺跡・茂塚遺跡等である。その中でも岡の平遺跡は縄文時代晩期から古墳・奈良時代へ続き、遠賀川式系土器が採集されているなど注目される。ただし猿平遺跡のように丘陵上の遺跡も存在する。

井伊谷川と都田川が合流する地点に位置する井通遺跡では、弥生時代中期の集落が見つかっており竪穴住居跡40軒以上、土器棺、溝等を検出している。

縄文時代晩期になると、それまでは台地上など比較的高所に集落を築いていたものが、弥生時代中期にかけて低位の段丘、自然堤防上に進出していった様子が見られる。特に都田川流域では上流域を含め銅鐸が10個発見されているように、弥生時代中期から多くの集落が進出・発展していったと想像できる。反対に井伊谷川流域では銅鐸も見られず、遺跡も減少傾向にある。

・古墳時代

古墳時代になると井伊谷川流域で、東側丘陵上に北岡大塚古墳（前方後方墳）・馬場平古墳（前方後円墳）・馬場平３号墳（前方後円墳）・谷津古墳（円墳）等の首長墓が４世紀から５世紀にかけて連続して築造される。５世紀後半になると井伊谷では首長墓クラスの古墳は見られなくなり、都田川左岸の三方原台地の北辺に陣座ヶ谷古墳（前方後円墳）が築造されている。

井伊谷盆地縁辺部では後期に群集墳が現れ、一ノ沢古墳群・北岡古墳群・城山古墳群・白山古墳群・高辺（正楽寺南）古墳群等が知られている。

一方低地部の矢畑遺跡では古墳前期の竪穴住居跡１軒、方形周溝墓１基等とともに祭祀に関わると考えられる土坑・土器群が検出されている。

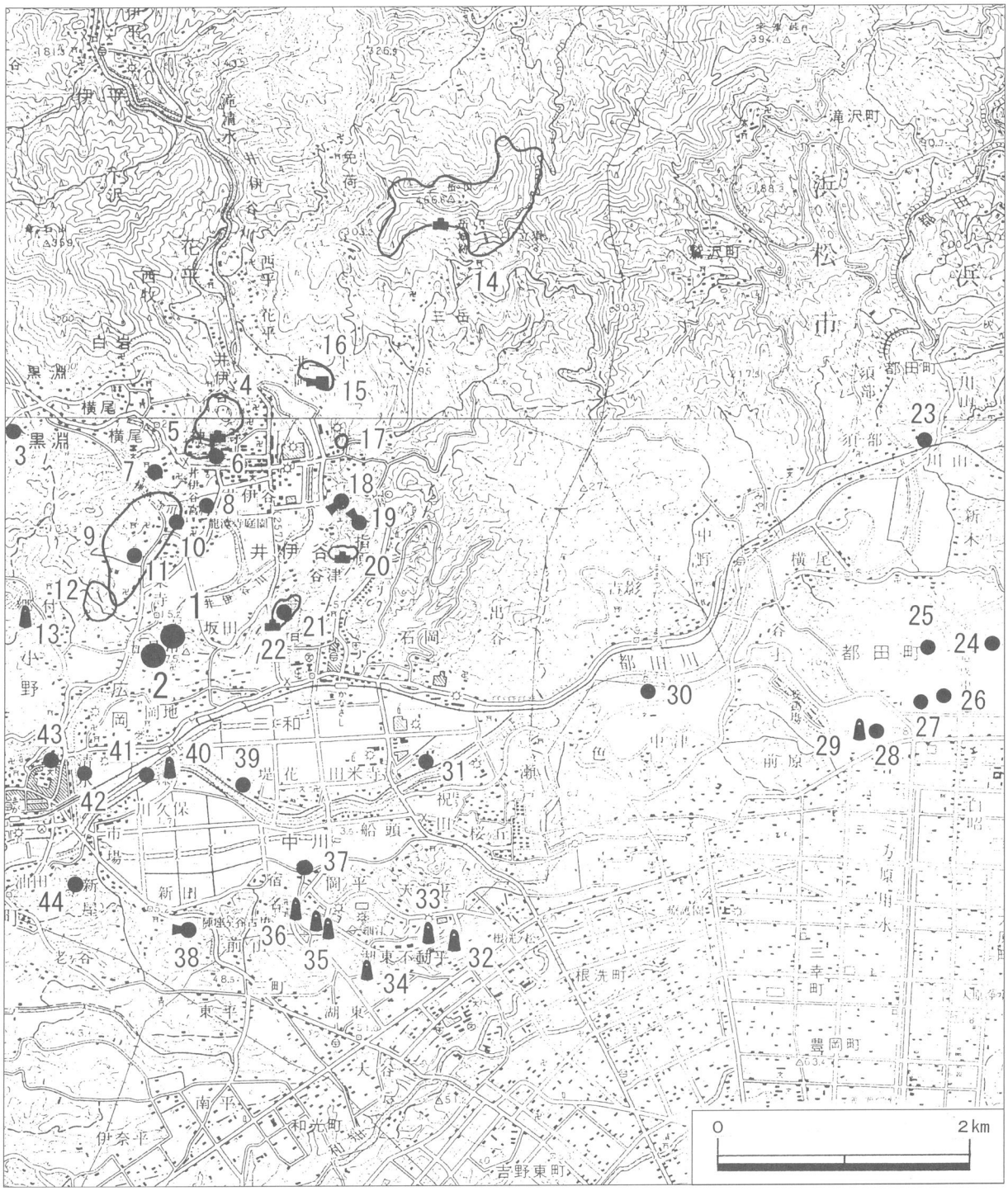
この地域で特筆される遺跡として天白遺跡（天白磐座遺跡）があげられる。『延喜式』に名が載る渭伊神社の裏、小丘陵頂部一帯に位置し、神宮寺川の左岸にあたる。遺跡内には巨岩群が存在し、それら巨岩を神の磐座として祭祀が行われていた。天白遺跡は神宮寺川が井伊谷の沖積地へと出る位置にあたることから、東側丘陵に築かれた古墳に葬られたこの地域の首長によって水源の祭祀が執り行われたと考えられる（辰巳他1992）。

都田川流域周辺の低地では弥生時代と同様自然堤防上に集落が営まれ、井通遺跡では５世紀後半以降の集落が検出されている。川久保船渡遺跡でも５世紀代の竪穴住居跡が検出されている。

・古代

矢畑遺跡ではこの時期の遺構が検出されていないが、須恵器などの他にそれぞれ１・２点ではあるが円面硯・土製人形・土馬・製塩土器などが出土している。矢畑遺跡と丘陵を挟んだ南に存在する龍潭寺の境内からは陶馬、周辺からは土馬が採集されており、この丘陵周辺で土製馬形を用いた祭祀を行っていたことがわかる。これらは丘陵上に位置する正楽寺遺跡と一連のものと考えてよいかもしれない。

井通遺跡の調査では、陶硯・墨書土器（「引佐一」・「引佐大」等）・分銅・升等度量衡に関する遺物、銙帯金具等々の遺物から官衙関連遺跡であることは明白であり、遺構では整然と並んだ掘立柱建物群・運河と考えられる大溝や「川戸」と記された墨書土器から、引佐郡衙に付随する津の機能をもった範囲が確認されている。



第３図　周辺遺跡分布図　（国土地理院発行1:50,000地形図「浜松」「三河大野」を複写して加筆）

表２　遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	前岡遺跡	10	正楽寺遺跡	19	馬場平3号墳	28	前原Ⅷ遺跡	37	岡の平遺跡
2	今城	11	正楽寺南遺跡	20	上野砦	29	前原銅鐸出土地	38	陣座ヶ谷古墳
3	栃窪南遺跡	12	高辺古墳群	21	谷津古墳	30	椿野遺跡	39	茂塚遺跡
4	井伊谷城	13	小野銅鐸出土地	22	谷津砦	31	祝田遺跡	40	川久保銅鐸出土地
5	城山古墳群	14	三岳城	23	川山遺跡	32	滝峯才四郎谷銅鐸出土地	41	川久保船渡遺跡
6	井伊谷遺跡	15	北岡大塚古墳	24	沢上Ⅵ遺跡	33	穴ノ谷銅鐸出土地	42	井通遺跡
7	天白遺跡	16	北岡古墳群	25	前平Ⅲ遺跡	34	不動平銅鐸出土地	43	上平遺跡
8	矢畑遺跡	17	一ノ沢古墳群	26	前原Ⅳ遺跡	35	七曲り銅鐸出土地	44	猿平遺跡
9	白山古墳群	18	馬場平古墳	27	前原Ⅶ遺跡	36	悪ヶ谷銅鐸出土地		

（4）中世以降

中世以降は井伊氏に関する文献等からこの地域の動向が判明する。

鎌倉時代末期になると井伊氏は西遠地域で卓越した経済・武力をもつ勢力であったことが分かっている。南北朝期、井伊氏は西の千頭ヶ峯城（三ヶ日町）、南の鴨江城（浜松市）、北の田沢城（引佐町）、東の大平城（浜北市）などの他に、三岳城を本拠とした各城砦を配し、宗良親王とともに南朝方に属して足利尊氏方と戦っている。

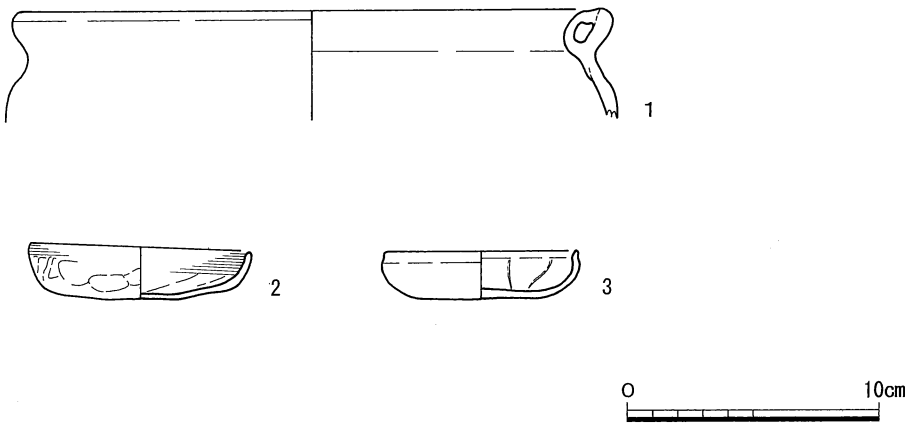
今城は三岳城を本城とする井伊氏一族の砦群のひとつで、『引佐郡史』には井伊谷三人衆の一人、鈴木三郎兵衛盛房の築城とある。また、『中川村郷土誌』によれば、井伊谷城の斥候城として築かれ、井伊氏一族の岡弥次郎直藤、子美濃守直春、孫近将良藤らが在住したと言われる。岡氏は平時、対岸の引佐町岡地区付近に居住していたと言われており、その岡氏が居住したことで地名がついたという伝承も残っている。興国元（暦応三・1340）年三岳城落城のころ今城の砦も墜ちたといわれる。

なお、井伊氏に関連する城砦として、今城の北方約２㎞には井伊谷城、東北方約１～２㎞には上野・谷津の砦が存在する。これらの砦は都田川・井伊谷川流域の平野と諸街道等々、四方を一望できる位置にある。三岳・上野・谷津・今城と尾根に結んだ弧の中心に井伊谷城が存在することから考えて、今城は南側から井伊谷の井伊氏本拠へ迫る入口に築かれた砦と言えよう（引佐町1992・静岡県教委1981）。

矢畑遺跡では15世紀代と考えられる２棟の総柱建物と長さ約100ｍ・幅約２ｍの溝をもった屋敷が検出されている。

前岡遺跡の調査と並行して行った対岸の確認調査（引佐町井伊谷下坂田）において、現代の河川堆積層から、かわらけ・内耳鍋（第４図）が出土した。いずれも15世紀後半から16世紀初頭と考えられ、上流部付近にその時期の遺跡が存在する可能性が考えられる。

近世には井伊谷川と都田川が合流し浜名湖に注ぐこの地域には、愛知県豊川市御油から奥浜名湖を通り磐田市見附（見付）に至る本坂道（姫街道）や秋葉信仰と関わりの深い秋葉街道があり、三河、信州に通じる奥山道等もある。これら陸上交通だけでなく、都田川水系や浜名湖を利用した水運も発達していたことから浜名湖北岸の交通の要衝と言える土地である。そのことは合流点右岸の気賀に関所が置かれたことが物語っている。



第４図　下坂田地区出土遺物実測図

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

（１）前岡遺跡

確認調査の結果、丘陵の中心に設定したトレンチからは遺構・遺物が検出されなかったため、調査対象範囲からは除外され調査対象面積は1,600㎡と決められた。だが、本調査に際しては遺構が除外範囲へも続いていた場合の作業効率等を考え、その部分も含めて0.7㎥のバックフォーにより表土を除去し、遺構の有無を確認しながら調査を進めることとした。その結果、除外された部分にも遺構が続いていることが確認され、最終的に調査面積は2,860㎡となった。

表土除去の後、人力により包含層を掘り下げ、記録を取りながら遺構を検出・掘削した。

調査区のグリッド設定は井伊谷川関連の他遺跡の調査との比較を容易にするため、旧日本測地系を用い、国土座標の軸線を基準に北西を原点、Ａ１（X=-130810,Y=-76140）とした。そして西から東に１・２・３･･･、北から南にＡ・Ｂ・Ｃ･･･と10m間隔で設定し、数字とアルファベットを組み合わせてグリッド名とした（Ａの北はＺとした）（第５図）。

図面については、遺構平面図・土層図は1/10を基本とし、遺物出土状況図などは必要に応じて縮尺を変えて作成した。遺構平面図は一部、空中写真測量を利用した。

現地調査での記録写真については、６×７判（白黒）、35㎜判（カラーリバーサル・カラーネガ）を使用し、一部ローリングタワーにより撮影した。空中写真を６×６判（白黒・カラーリバーサル）を用いラジコンヘリコプターにて撮影した。

基準点測量・空中写真測量・空中写真撮影は委託した。

（２）今城

平成14年度に確認調査を実施した。調査区内に幅１ｍほどのトレンチを19本設定し、そのトレンチの表土を0.15㎥のバックフォーを使用して表土を除去した後、人力により掘削・調査を実施した。

トレンチより土坑を１基検出しトレンチを拡張したが、他に遺構は検出されなかった。協議の結果引き続きその遺構を調査し、本調査は行わないことが決まった。

平面図・断面図は縮尺1/10、土層柱状図は1/20で作成した。

記録写真は、６×７判（白黒）、35㎜判（カラーリバーサル・カラーネガ）を使用して撮影した。

（３）資料整理・報告書作成

資料整理は遺構図面の整理・修正を行った後、報告書用版下原図作成・トレース・文字の貼り込み等を行った。

遺物は現地で洗浄・注記・台帳作成を済ませ、出土遺構ごとの分類を行った後、土器の接合を行った。遺物を選別し、一部は実測・トレースを委託に出した。残った遺物を実測・拓本採取・トレースした。復原・観察表の作成を行いながら、遺物図版版下を作成した。遺物写真を撮影した後、遺構写真を含め写真図版版下作成を行った。

それらの作業と並行し、文章作成、報告書編集を行い、入稿、刊行した。

遺物・図面・写真等を収納し静岡県教育委員会文化課へ引き渡した。

遺物写真は６×７判（白黒・カラーリバーサル）、35㎜判（カラーリバーサル）を用いて撮影した。

第５図　前岡遺跡グリッド配置図　（細江町都市計画基本図を複写して加筆）

第2節　層位

前岡遺跡・今城の基本層序を第6図に示す。
各層の特徴は以下のようである。

（1）前岡遺跡

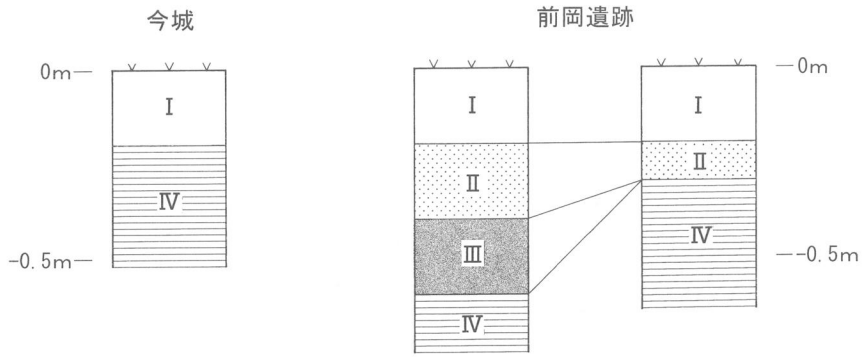
第Ⅰ層　耕作土（表土）
第Ⅱ層　にぶい黄褐色粘質土　小礫を含む。遺物包含層。
第Ⅲ層　暗褐色粘質土　20cmほどまでの角礫を多く含む。遺物包含層（古墳時代後期～奈良時代）。
第Ⅳ層　明赤褐色粘質土（基盤層）　人頭大までの礫を含む。一部岩盤。

第Ⅰ層は耕作土であり、20cmほどの厚さである。
第Ⅱ層は果樹園の造成など、後世の撹乱を受けているため、縄文晩期から中近世の遺物を含む。調査区中央部では薄く、緩斜面部分ではやや厚く堆積している。厚さは10～20cmほどである。
第Ⅲ層は古墳後期から奈良時代にかけての遺物を多く含む。調査区西端のごく一部にのみ存在し、小さな谷を埋めている。Ⅲ層上面では遺構は検出できなかった。
第Ⅳ層は基盤層であり、上面において遺構を検出した。
遺構覆土は遺構により多少異なるが、時期による違いは認められなかった。

（2）今城

第Ⅰ層　耕作土（表土）
第Ⅳ層　明褐色粘質土（基盤層）　礫を含む。一部岩盤。

調査区はほぼ全面が果樹園の改植時に重機により撹乱を受けていた。第Ⅰ層が20～60cm存在し、その下は基盤層である第Ⅳ層である。



第6図　基本土層図

第３節　前岡遺跡の遺構と遺物

（１）遺構

調査区の地形は大きく分けて、中央部の北側に広がる平坦面、その東側と南側および西側に続く緩傾斜面、さらにその外側の調査区境付近にある急傾斜面、以上の三者で構成されている（ただし平坦面と言ってもわずかであるが傾斜があり、また急傾斜面と言ってもそれほど急な傾斜ではない）。また、調査区の西端には西に開口する10ｍほどの小さな谷が形成されている（第７図）。以後、説明を容易にするために、それぞれを平坦面、緩斜面、急斜面、谷面と呼ぶことにする。

遺構は平坦面と緩斜面で多数検出したが、急斜面は皆無であった。縄文時代晩期～弥生時代の墓と推定する複数の土坑を調査区西部の緩斜面で検出した。また同じ場所で古墳時代後期～奈良時代の居住域を検出した。中世の遺構は墓域を調査区東部の緩斜面で検出し、居住域を平坦面および緩斜面の全域で検出した。

遺構の残存状況は非常に悪く、遺構の底部が基盤層にわずかに残る程度であった。調査区周辺は過去に幾度となく基盤層の深部に及ぶ耕作と削平が行われ、奈良時代から中世にかけてのある時期と近世に大規模な開発が行われている。また現代の畑および果樹園に伴う区画溝、排水路、配管設備、果樹の改植等による撹乱が数多く認められる。遺構の覆土はその多くが薄く単層であり、かつ色調も類似している。加えて、覆土が薄いために遺構に伴う遺物が非常に少なく、遺構の時代判定が難しい状況である。

１．縄文時代晩期～弥生時代

概要

縄文時代晩期～弥生時代の遺構は調査区西部の緩斜面に集中する。縄文時代晩期と推定する集石土坑１基（SF25）、縄文時代から弥生時代への移行期の土器棺墓２基（SZ01・SZ02）、弥生時代前期の土器棺墓の可能性が高い土坑１基（SF04）とそれに切られている土坑１基（SF06）と溝１条（SD02）、同時期の可能性があるピット２基（SP23・SP25）を検出した。また縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての遺構と推定する土坑３基（SF16・SF26・SF29）を検出した。

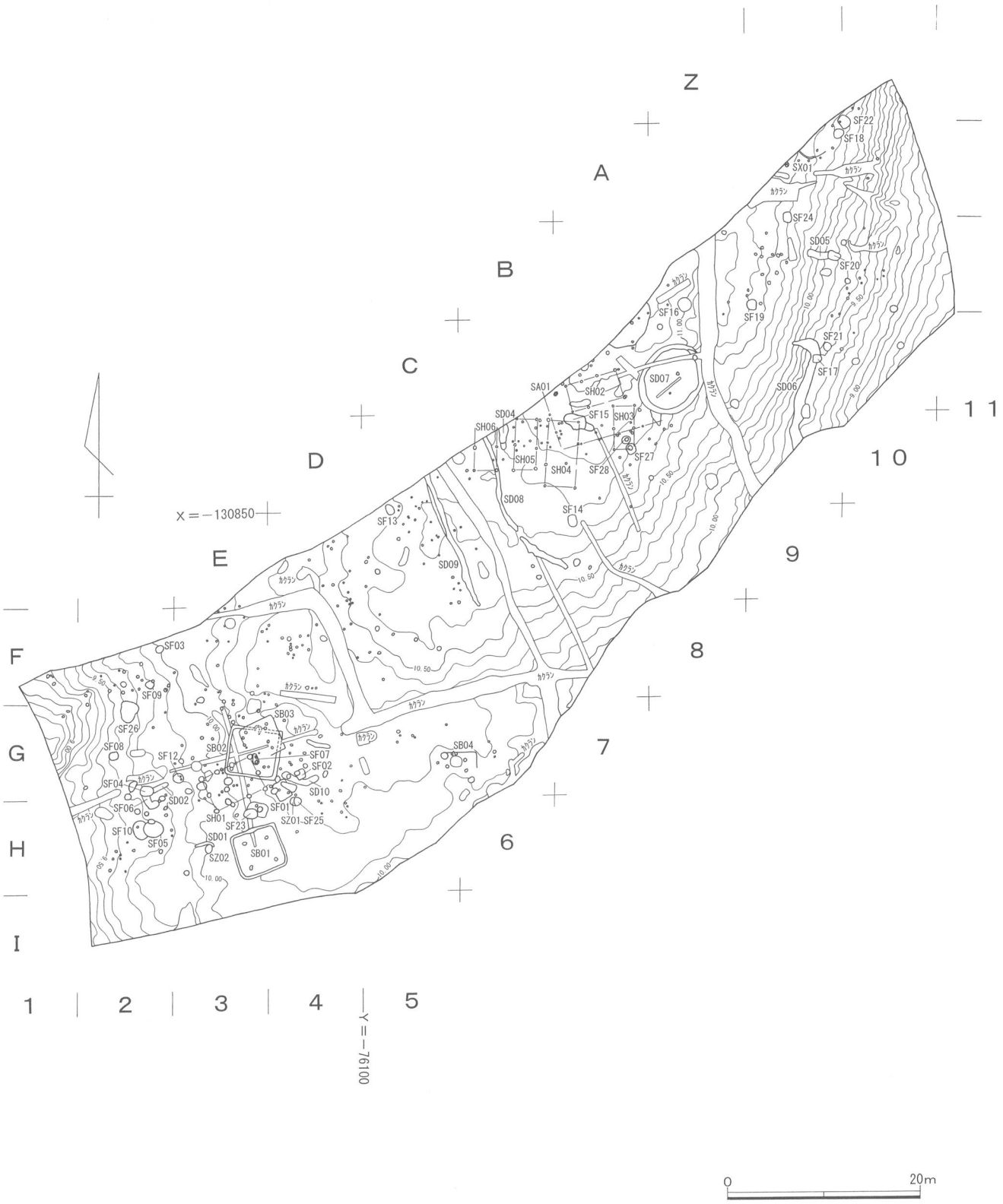
土器棺墓ＳＺ０１（第８図　図版３）

Ｈ４グリッドで検出した。平面形が円形、推定80㎝×80㎝の規模を持ち、深さ15㎝を測る。土器の残存状況は非常に悪く、上胴部から底部にかけての一部が残るだけである。当初は楕円形の遺構として検出したが、掘り進めるに従って西半からは土器の上胴部から底部へかけての一部、東半からはこぶし大の集石が現れた。土器は細片化されていたが、すべてが集石の上に乗っているのを確認した。そこでこの遺構は性格の異なる土坑が重複している可能性が出てきた。再度検討した結果、土器棺墓（SZ01）が集石土坑（SF25）を切る別々の遺構という結論になった。

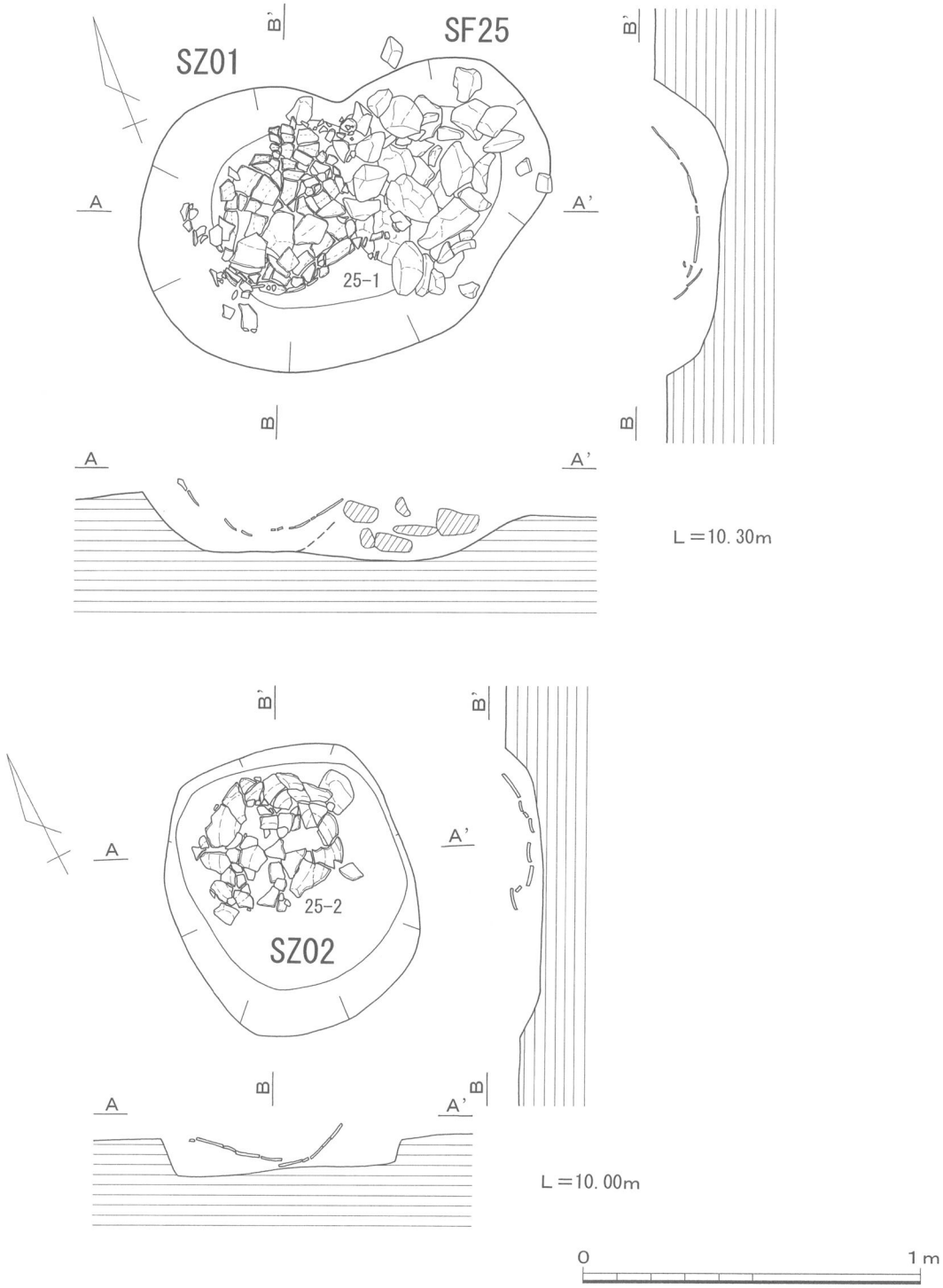
埋葬形態は壺形土器（25-1）の単独による横位埋設と推定する。時期は土器の型式からみて、縄文時代から弥生時代への移行期と判断する。

土坑ＳＦ２５（第８図　図版３）

土器棺墓SZ01と重複している土坑である。平面形は円形、推定65㎝×65㎝の規模を持ち、深さ15㎝を測る。こぶし大の石を中心とした集石土坑である。石に焼成を受けた痕跡は認められない。土器および石器は伴わない。時期については、SZ01に先行することから縄文時代晩期と捉えたい。



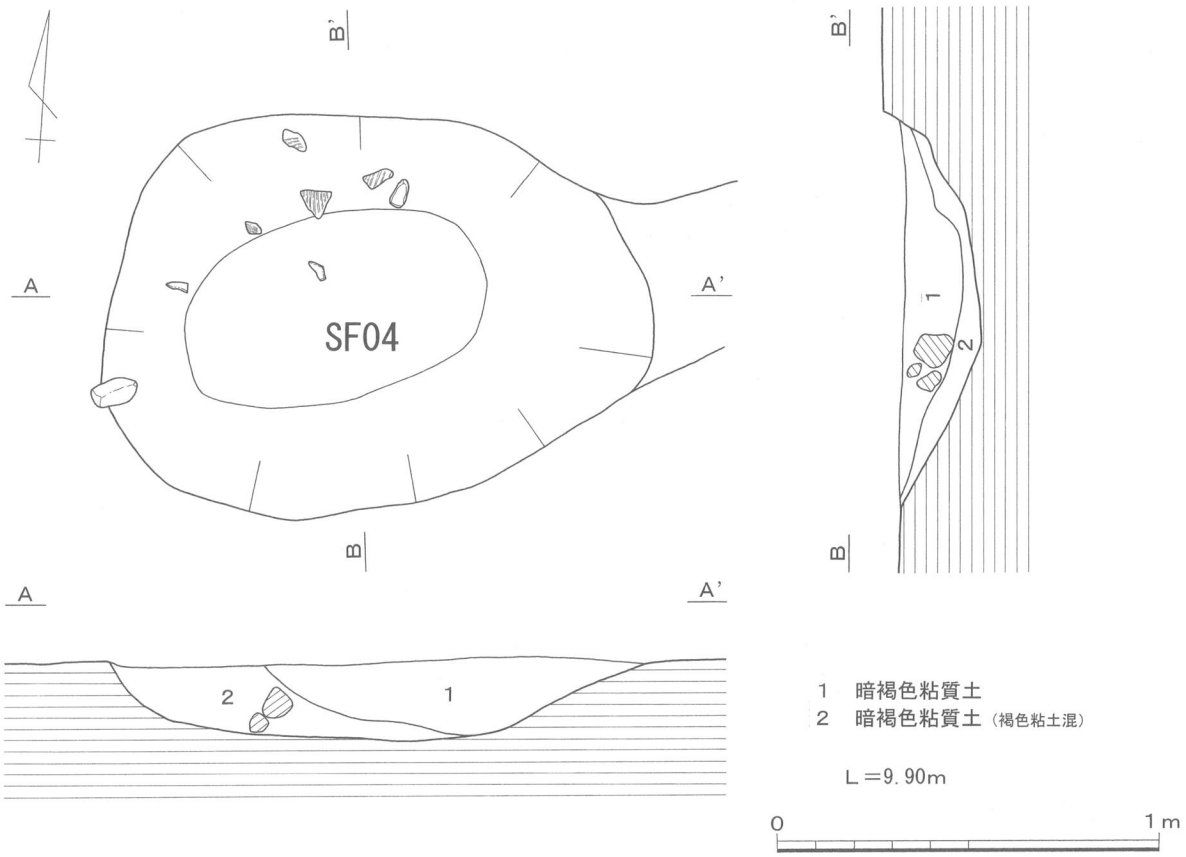
第７図　前岡遺跡　遺構全体図



第８図　SZ01・SF25・SZ02実測図

土器棺墓ＳＺ０２（第８図　図版３）

Ｈ３グリッドで検出した。土器棺墓SZ01から南西方向に約10ｍ離れている。遺構の平面形は楕円形、70㎝×85㎝の規模を持ち、深さは10㎝と非常に浅い。土器の残存状況は悪く、壺の肩部から胴部の一部と底部の一部が残るだけである。包含層中に土器片の散乱がないことから、近世の開墾により削平されて運び去られたと考える。埋葬形態は壺形土器（25-2）の単独による横位埋設と推定する。時期は土器の型式からみて、SZ01と同じ縄文時代から弥生時代への移行期と判断する。



第９図　SF04実測図

土坑ＳＦ０４（第９図　図版４）

SZ02から北西方向へ約10ｍ離れて位置する土坑である。平面形が楕円形、1.1ｍ×1.4ｍの規模を持ち、深さ20㎝を測る。図示できる土器は無かったが、表面を条痕調整した破片が５点出土している。この土器片は胎土と色調および条痕からみて、包含層出土土器（26-3）と同一個体と判断する。したがって弥生時代前期の土器棺墓である可能性が高い。溝（SD02）および土坑（SF06）と重複するが、両者を切っており時期が遅れる。

土坑ＳＦ１６

平坦面東端のＢ８グリッドに位置する。この土坑だけが他と離れている。平面形は円形、1.4ｍ×1.5ｍの規模を持ち、深さ35㎝を測る。図示できなかったが、小破片の弥生土器が数点出土している。時期は土器片からみて弥生時代中期～後期と判断する。

土坑ＳＦ２６

谷面の谷頭に位置する土坑である。平面形は不定形であり、1.8ｍ×2.3ｍの規模を持ち、深さ20㎝を測る。遺物は小破片の弥生土器が出土している。図示できたものは、底部破片（26-28）の１点だけである。時期は土器片からみて弥生時代後期～古墳時代前期と判断する。

土坑ＳＦ２９

SZ02の北に位置する。平面形が楕円形、0.8ｍ×1.0ｍの規模を持ち、深さ10㎝を測る。条痕調整された土器片が出土している。時期は縄文・弥生時代移行期～弥生時代中期と判断する。

ピットＳＰ２３

谷面の東に位置する。大きさ20㎝×25㎝、深さ18㎝を測る。条痕調整された土器の小破片が出土している。時期は縄文・弥生時代移行期～弥生中期と判断する。平地式住居の柱穴である可能性があるが、周辺に対となるピットは見当たらない。

ピットＳＰ２５

谷面の東に位置する。大きさ20㎝×25㎝、深さ25㎝を測る。条痕調整された土器の小破片が出土している。時期は縄文・弥生時代移行期～弥生中期と判断する。SP23とは約７ｍ離れており、対にならない。

その他

SF04と重複するSD02とSF06は遺物を伴わないが、SF04に先行することから、弥生時代前期以前の遺構と捉える。SF03・SF08・SF09はその位置関係からみて縄文・弥生時代移行期～弥生時代中期の可能性があるが、遺物を伴わないので時期不明の遺構として捉えたい。

第10図に縄文時代晩期から弥生時代までの遺構を示すと共に、出土した石器類の分布状況も示す。図中の薄いトーンで示した範囲内から約30点の石鏃と約150点の剥片が出土し、またそこを中心にして石剣（39-2）・環状石斧（39-1）・磨製石斧（36-1）・打製石斧（35-3）等が点在している。調査時にＧ３グリッドとＨ２グリッドの２ヶ所に楕円形のレンズ状堆積が認められ、住居の存在を予測させたが、Ｈ２グリッドの住居想定地は下層で古墳時代の土坑（SF05・SF10）を検出し、石器類が撹乱で移動していることが確認された。Ｇ３グリッドの住居想定地は基盤層で遺物を伴わない３～４基のピットを検出したが、並びが不規則であり住居とは認められず、小規模な窪地と推定する。

２．古墳時代後期～奈良時代

概要（第11図）

古墳時代後期～奈良時代の遺構は調査区西部の緩傾斜面に集中する。この時期の遺構として、竪穴住居４軒（SB01・SB02・SB03・SB04）、竪穴住居の可能性のある溝１条（SD01）、土坑２基（SF05・SF10）、掘立柱建物１棟（SH01）および建物の付属施設の可能性がある方形の土坑２基（SF01・SF02）と円形の土坑１基（SF12）を検出した。

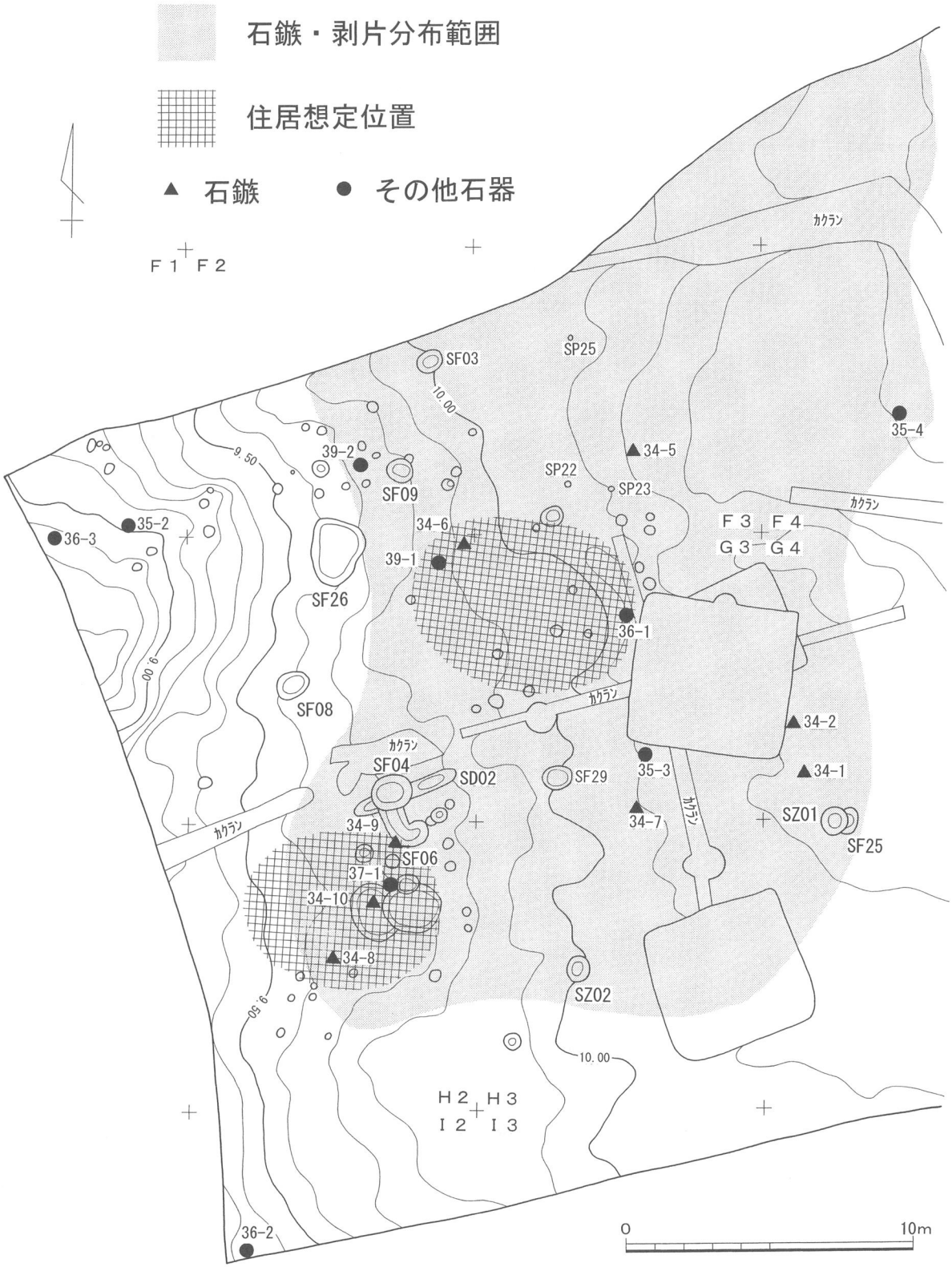
西端、谷面に堆積した層には奈良時代の遺物だけを多量に含むことから、奈良時代から中世にかけてのある時期に谷が埋め立てられたものと考えられる。

竪穴住居ＳＢ０１（第12図　図版５・６）

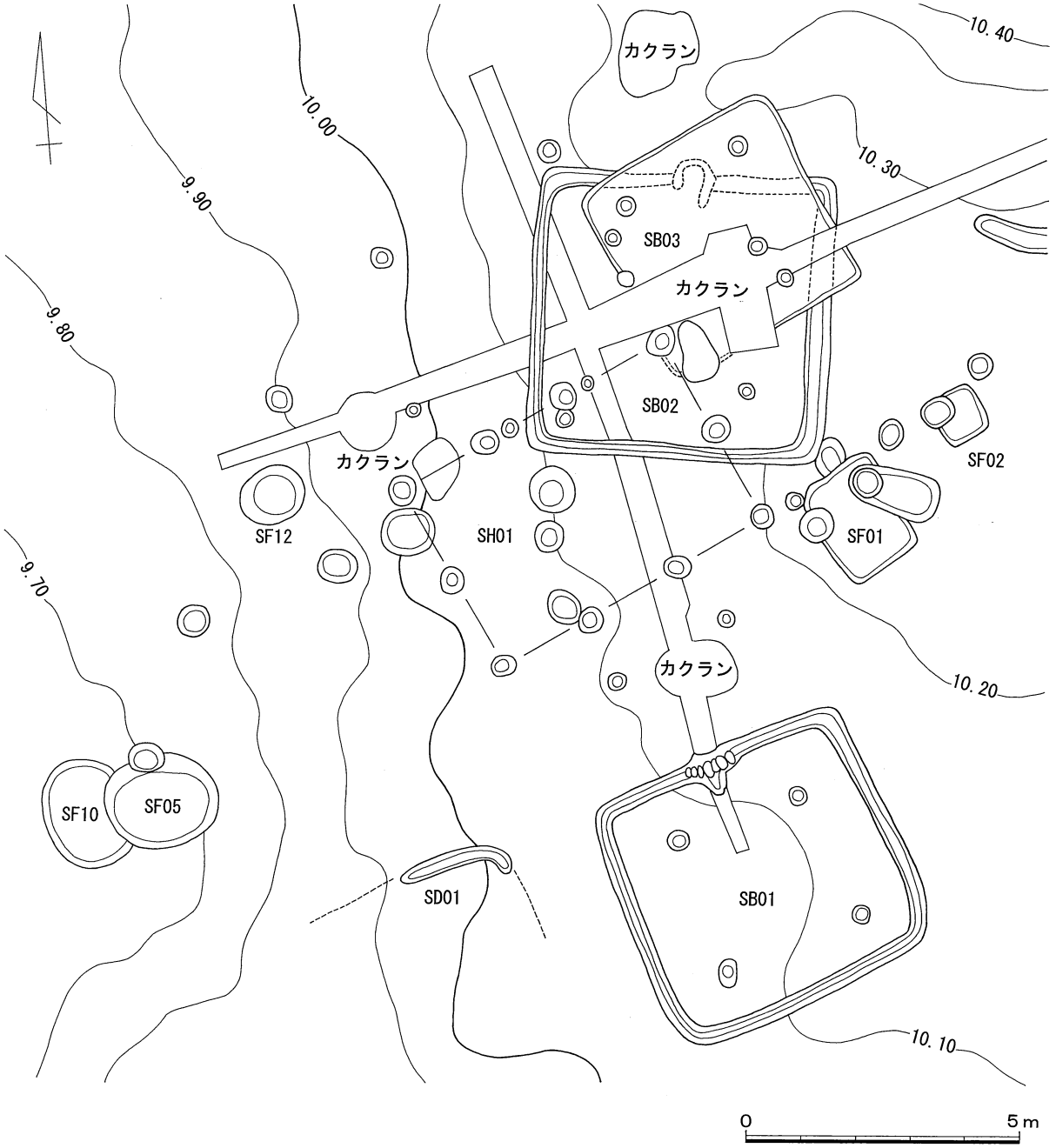
Ｈ３～Ｈ４グリッドで検出した。平面形は隅丸方形、5.0ｍ×5.2ｍの規模を持ち、検出時の床面までの深さは、東半で５㎝、西半で０㎝である。壁溝が全周を廻り、柱穴が４基検出された。遺物は床面に接して坏蓋３点（30-1,30-2,30-3）、壁溝内から甑（29-19,29-21）が出土した。住居の廃棄時期は土器の型式から７世紀中頃と判断する。

北壁の中央部に配石が検出された。７個の石が壁に沿って横一列に並べられ、石の上面が水平に揃うように、西から２番目と３番目の石の下に手のひら大の扁平な石を置いている。石の上面は床面の高さと同じである。石の大きさは20～35㎝である。東端の石（38-1）は表面に加工痕と焼成を受けた跡が認められるが、他の石には認められない。石材は石灰岩およびチャートであり、調査区周辺で簡単に拾えるものである。石列の前面に深さ20㎝の窪みがあり、斜面の一部に焼成を受けた跡がある。これは竈の残存部分である可能性が高い。石列の下には壁溝につづく幅約30㎝の溝がある。

この石列の中央を切って南北に伸びる近年の撹乱溝がある。撹乱は石の上面で止まっていたと推定するが、撹乱溝を掘る際に基盤層まで掘り抜いてしまい、土層図に反映させることができなかった。



第10図　縄文時代晩期～弥生時代遺構概略図

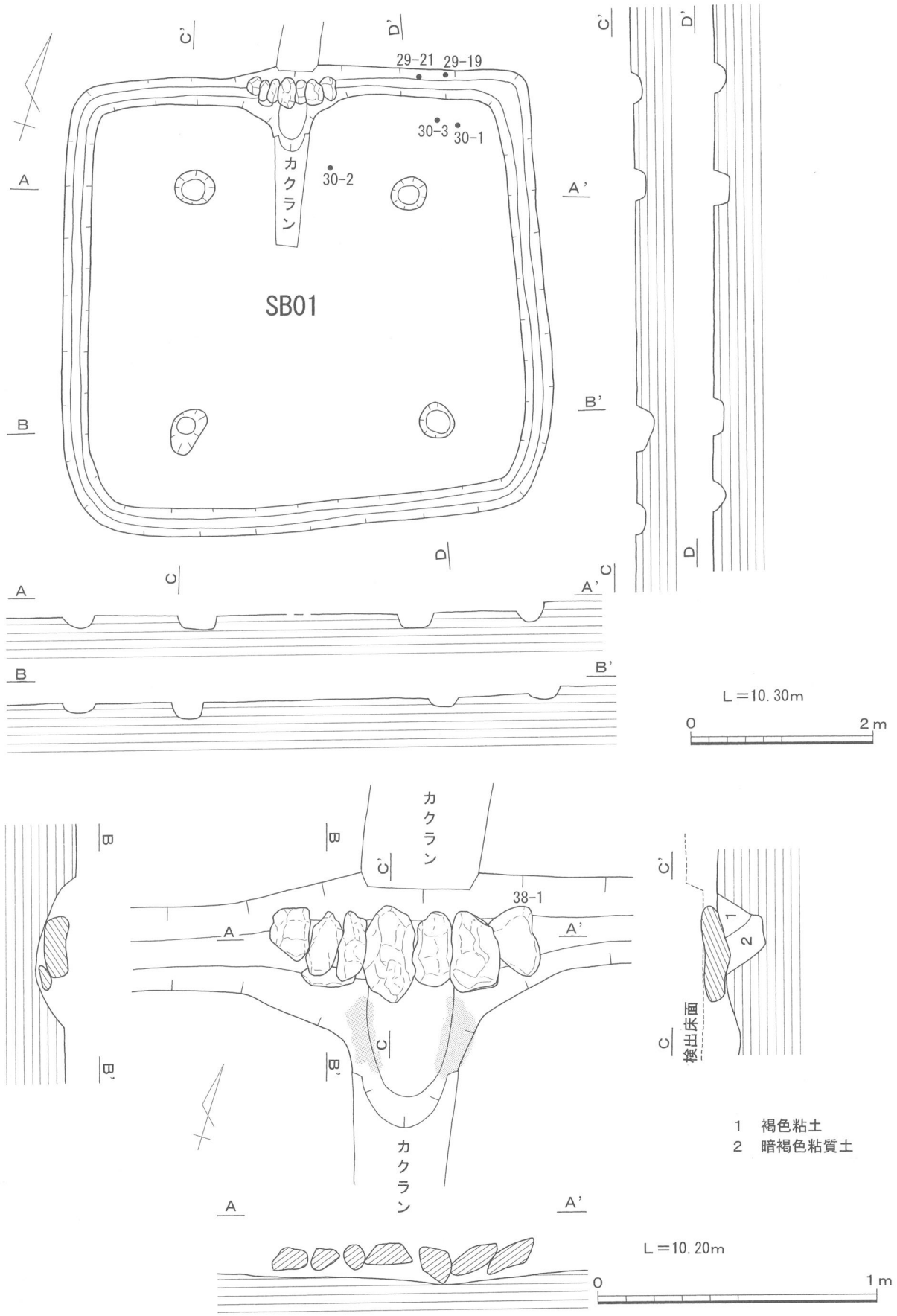


第11図　古墳時代後期～奈良時代遺構概略図

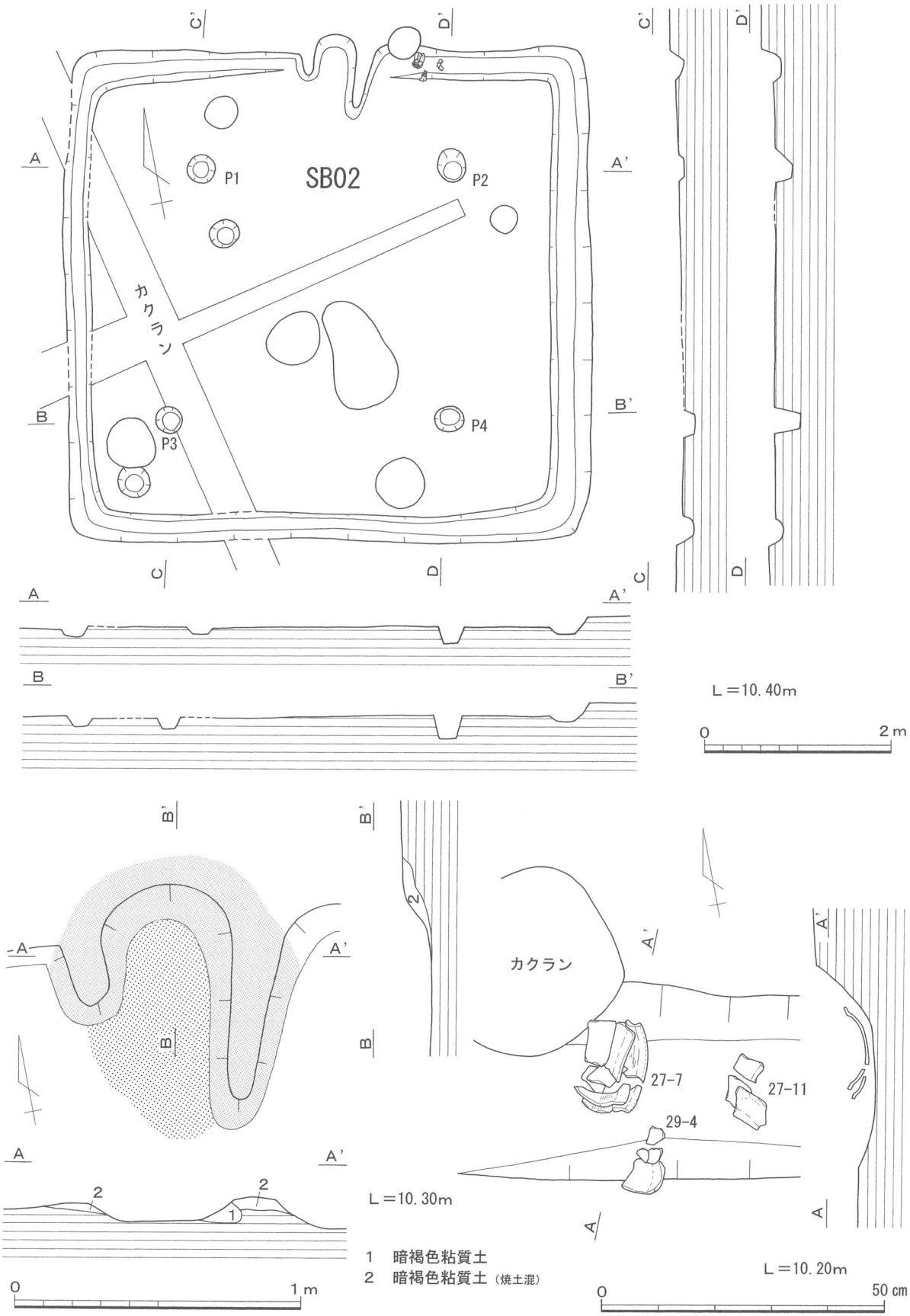
竪穴住居ＳＢ０２（第13図　図版７）

SB01の北側、Ｇ３～Ｇ４グリッドで検出した。平面形はやや角の取れた方形、5.2ｍ×5.0ｍの規模を持ち、検出面から床面までの深さは東壁で10㎝、西壁で０㎝である。壁溝が全周を廻り、北壁の中央部に竈を持ち、貯蔵穴は無かったとみられる。竈は底部だけが残存し、U字形の焼土の盛り上がりとその内側に残る炭を確認した。柱穴４基のうち、Ｐ３がややずれた位置にある。本当の柱穴は攪乱によって消滅した可能性もある。遺物は竈の東側の壁溝内から甕（27-7,27-11,29-4）、南壁の壁溝に接して坏身（27-1）、その他坏身等（29-18,30-4～6）が出土した。

SB02はSB03およびSH01と重複し、その前後関係は古い方からSB02、SB03、SH01の順である。廃棄時期は土器の型式からみて７世紀後半～８世紀と判断する。



第12図　SB01実測図



第13図　SB02実測図

竪穴住居ＳＢ０３（第14図　図版７）

SB02の北半を切るやや小型の竪穴住居である。平面形は方形、3.9ｍ×3.9ｍの規模を持つ。壁溝および貯蔵穴は無かったと考える。この遺構の残存状況は悪く、検出面から床面までの深さは約３㎝である。また西南部に各時代の撹乱が多く入っているため、その部分の壁面ラインは不明である。南西の柱穴は撹乱で消滅したと推定する。竈は検出できなかったが、存在していた可能性がある。第14図の上半図に焼土の範囲が示してあるが、その大部分は下層にあるSB02の竈である。ただし北方に尾のように伸びている部分がSB03の竈の残存部分である可能性がある。遺物は床面の３ヶ所に散って甕（29-1）等が出土した。廃棄時期は土器の型式からみて８世紀代と判断する。

竪穴住居ＳＢ０４（第14図　図版８）

Ｇ５～Ｇ６グリッドで検出した竪穴住居である。他の建物とはやや離れている。竈と北壁の一部を検出した。遺構の残存状況は非常に悪く、住居の北半に厚さ約３㎝の覆土が残るだけである。壁溝、貯蔵穴は確認できなかった。ピットを５基検出したが、確実に柱穴であるものは北東角の１基だけである。遺物は確認調査時に壺（27-4）、本調査時に土師器坏身（27-2）が出土した。廃棄時期は土器からみて７世紀中頃と判断する。SB01と方向、レベルがほぼ同じことから同時に存在していた可能性がある。

掘立柱建物ＳＨ０１（第15図　図版８）

SB02の南半およびSB03の一部と重複する掘立柱建物である。柱間が３間×２間、梁行5.5ｍ、桁行3.7ｍの規模を持つ。遺構の残存状況は比較的よく、最深50㎝の柱穴が残る。柱穴は平面形が円形または楕円形、直径50㎝前後の規模を持ち、すべての柱穴に柱痕が認められる。土器の小破片が出土しているが、時期を決定できるものではない。存続時期は８世紀代のSB03を切っていることから８世紀代中頃以降と推定する。

土坑ＳＦ０１（第15図）

SH01の南東角に位置する。軸方向が同じであることからSH01の付属施設（小屋等）と考える。平面形が方形、1.5ｍ×2.0ｍの規模を持ち、深さ10㎝と浅い。土器は小破片が出土したが、時期を決定できるものではない。

土坑ＳＦ０２

SF01の東に位置する。この土坑もSH01と軸方向が同じであることから、付属施設である可能性が高い。平面形が方形、0.9ｍ×1.0ｍの規模を持ち、深さ10㎝を測る。土器は小破片が出土したが、時期を決定できるものではない。

土坑ＳＦ０５（第16図）

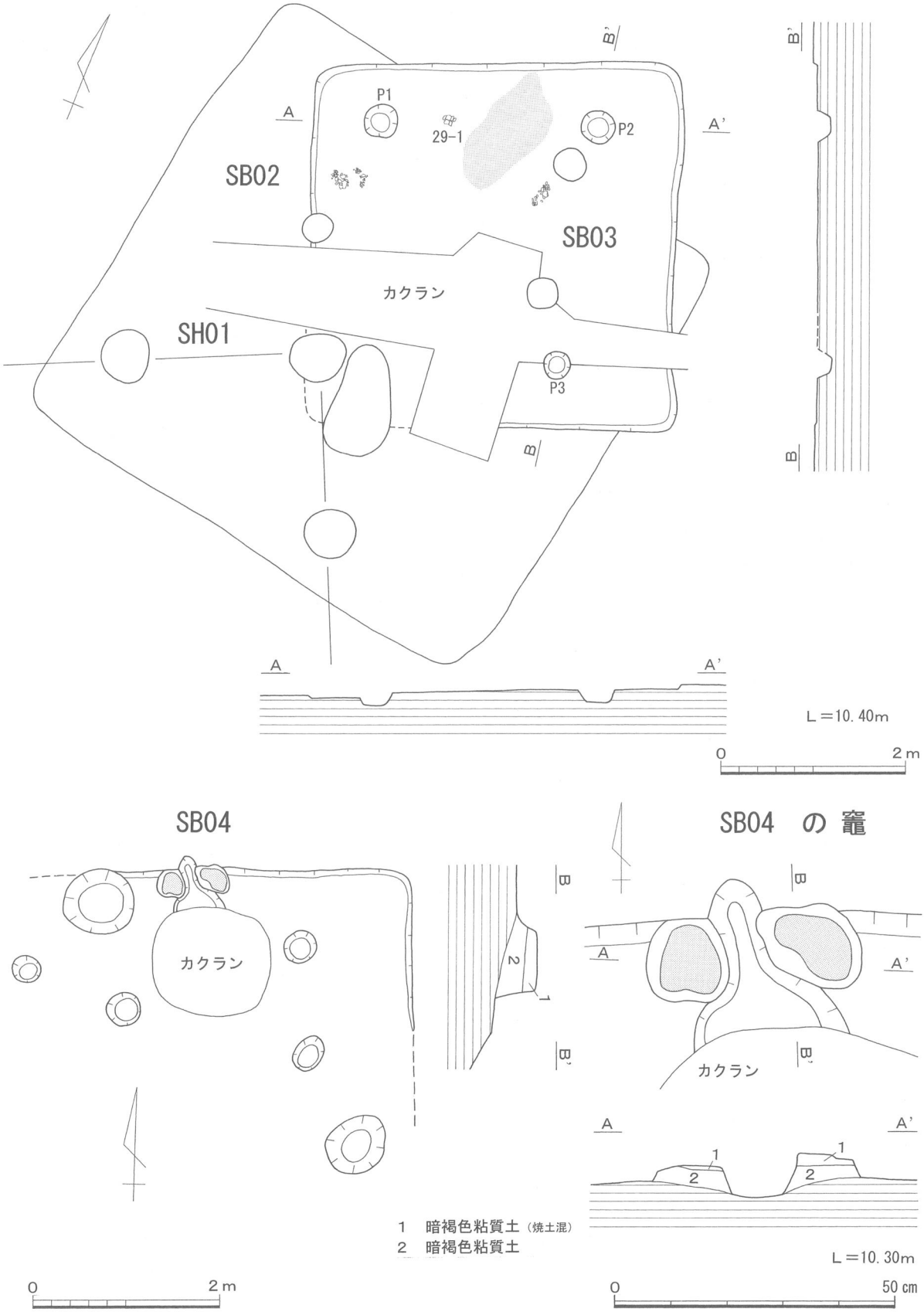
前記した縄文・弥生時代移行期の住居想定位置の下で検出した土坑である。平面形が楕円形、1.7ｍ×2.0ｍの規模を持ち、深さ15㎝を測る。遺物は坏身（27-3）、甕（27-10）、甑（29-22）が出土している。時期は土器の型式からみて８世紀代と判断する。

土坑ＳＦ１０（第16図　図版９）

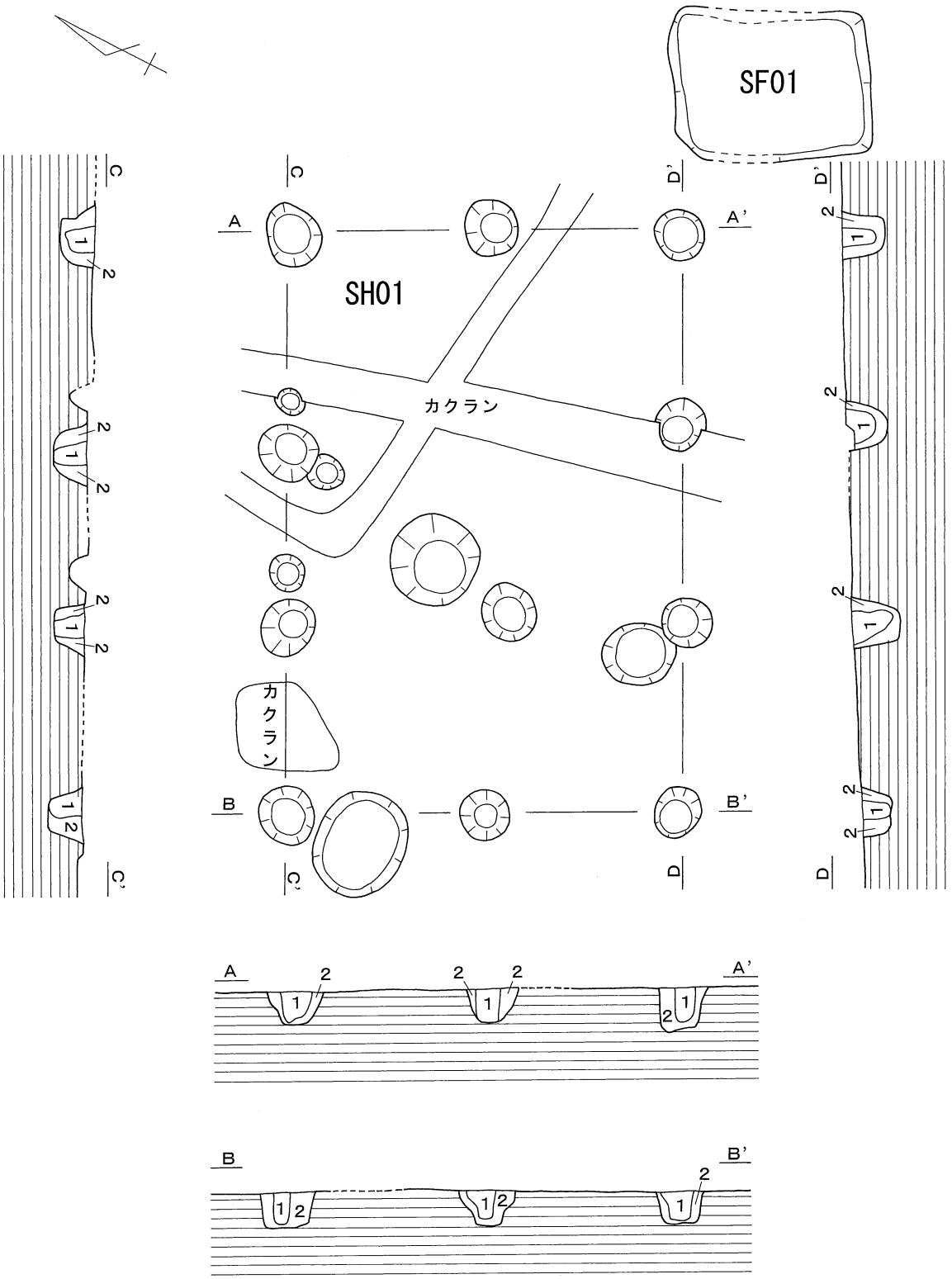
SF05に切られた土坑である。平面形が円形、推定1.5ｍ×1.9ｍの規模を持ち、深さ10㎝を測る。手捏土器（29-13）が南端から出土している。時期は７～８世紀代と判断する。

土坑ＳＦ１２（第17図　図版９）

SH01の北西角に位置する。平面形が円形、1.0ｍ×1.1ｍの規模を持ち、深さ40㎝を測る。検出面の高さまで直径10㎝～40㎝の石が隙間なく詰められていた。底面近くから長胴甕（28-1）が出土した。位置関係からみて、SH01の付属施設（集水坑等）である可能性が高い。



第14図　SB03・SB04実測図

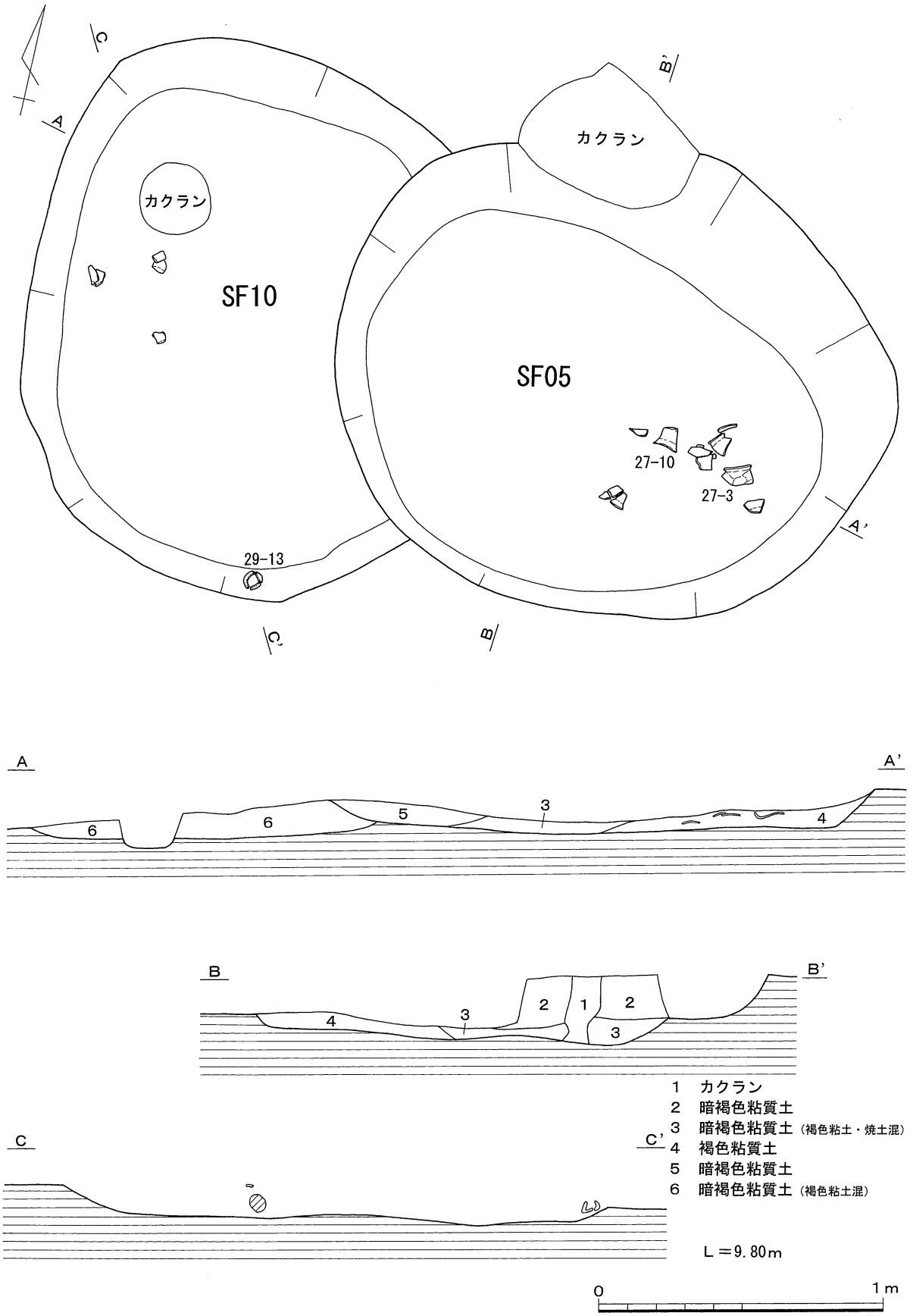


1　暗褐色粘質土（砂礫多）
2　暗褐色粘質土（地山小ブロック混）

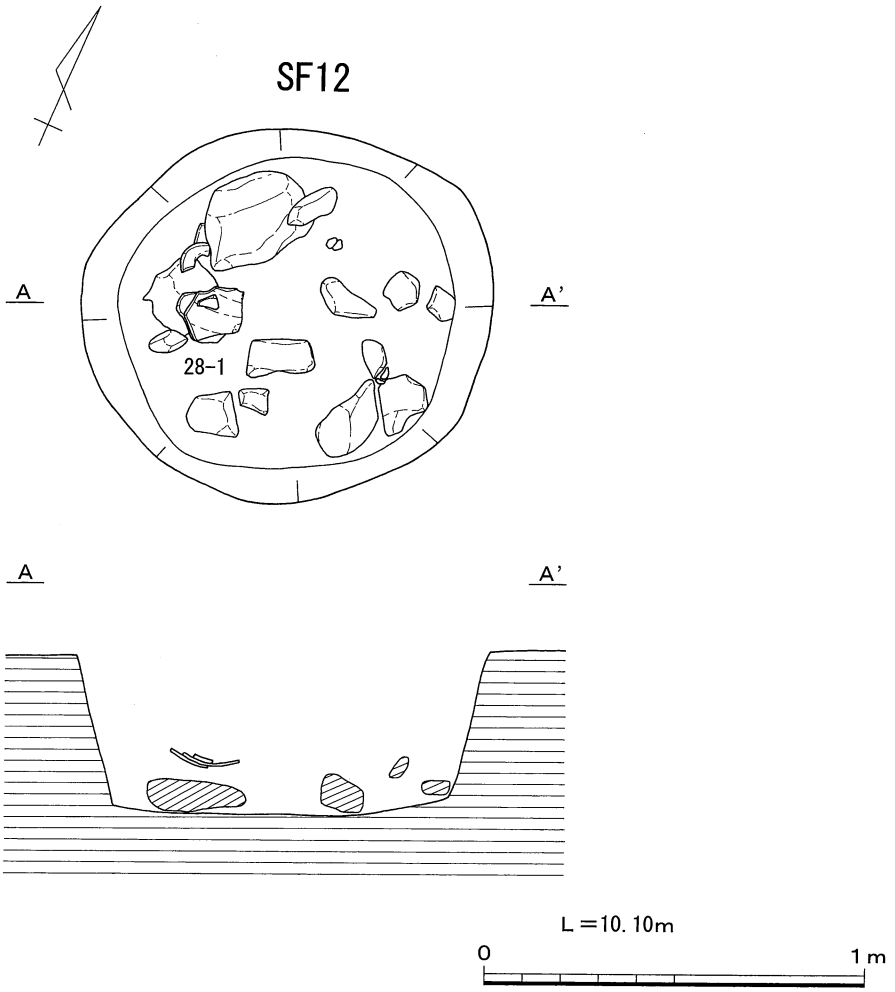
L＝10.30m

0　2m

第15図　SH01実測図



第16図　SF05・SF10実測図



第17図　SF12実測図

溝ＳＤ０１（第11図）

SB01の西に位置し、東端が直角に南へ曲がる溝である。幅30㎝、深さ5㎝、長さ2.3ｍを測る。SB01と並びまた軸方向も一致することから、同時期の竪穴住居の一部（壁溝の角部分）の可能性がある。遺物は出土していない。周辺から柱穴や竈の痕跡は検出されていない。

その他

調査区の東端に位置するSF18から、古墳時代の土器片が出土している。

３．中世

概要（第18図）

平坦面および緩斜面の全域から多数のピット、土坑、土坑墓（SF14・SF19・SF24）、区画溝（SD08・SD09）等を検出した。ピットは平坦面と緩斜面の全域に分布しているが、掘立柱建物と柵列を想定できたのは平坦面東部だけである。

掘立柱建物と柵列は梁方向の違いと切り合い関係から、Ａ群（SH02・SA01）とＢ群（SH03・SH04・SH05・SH06）に分けられる。Ａ群は土坑墓（SF14）と区画溝（SD08）を伴い、屋敷を構成する。Ｂ群は微

妙に梁方向が異なる建物があることから、更に２時期に細分される可能性がある。またＢ群は区画溝（SD09）を伴うと考える。Ｂ群に属する建物の梁方向が南北方向である点は、地形の傾斜方向に大きく影響されていると考える。両者の新旧関係はＡ群の区画溝（SD08）がＢ群のSH06（南東の柱穴）に切られている点、Ａ群のSH02に伴う土坑（SF15）がＢ群のSH04（北東の柱穴）に切られている点からＡ群が先行する。時期はＡ群の屋敷が15世紀、Ｂ群がそれ以降と判断する。

掘立柱建物ＳＨ０２（第19図　図版10）

調査区中央の北側のＣ７～Ｇ３グリッドに位置する。柱間が３間×１間、梁行5.6ｍ、桁行2.9ｍを測る。遺構の残存状況は非常に悪い。柱穴１基が未検出であるが、削平されて消滅したと推定する。この建物は柵列（SA01）・区画溝（SD08）・土坑墓（SF14）・土坑（SF15）を伴い、屋敷を構成する。時期は土坑墓の時期から15世紀と判断する。

掘立柱建物ＳＨ０３（第19図）

SH02の南に位置する。柱間が２間×１間、梁行4.6ｍ、桁行2.2ｍを測る。土坑（SF27）と重複するが、土坑上層で柱穴が認められないことからこの建物が先行する。

掘立柱建物ＳＨ０４（第20図）

掘立柱建物SH03の西側に位置し、SH03と梁方向を同じくする。柱間が３間×１間、梁行6.9ｍ、桁行3.1ｍを測る。Ｂ群の建物の中でやや大きな規模を持つ。柱穴１基が未検出であるが、削平されて消滅したと推定する。土坑（SF15）と重複するが、土坑の上層で柱穴を確認しており、確実にこの建物が土坑より遅れる。

掘立柱建物ＳＨ０５（第19図）

SH04の西側に位置し、SH04と梁方向を同じくする。柱間が２間×１間、梁行5.3ｍ、桁行2.3ｍを測る。

掘立柱建物ＳＨ０６（第20図）

SH05の西側に位置し、SH05と梁方向を同じくする。規模は北側が調査区外に伸びているために不明である。区画溝（SD08）と重複しているが、南東の柱穴が溝を切っていることから溝が先行する。

柵列ＳＡ０１

東西に４間、西側で直角に北に折れて３間、その先は調査区の外へ伸びている。曲がり角の柱穴は未検出である。東側は後世の削平によって消滅したと思われる。遺物は出土していない。掘立柱建物SH02の梁および桁方向と同じであることから、SH02に伴うと推定し、時期は15世紀と判断する。

区画溝ＳＤ０８

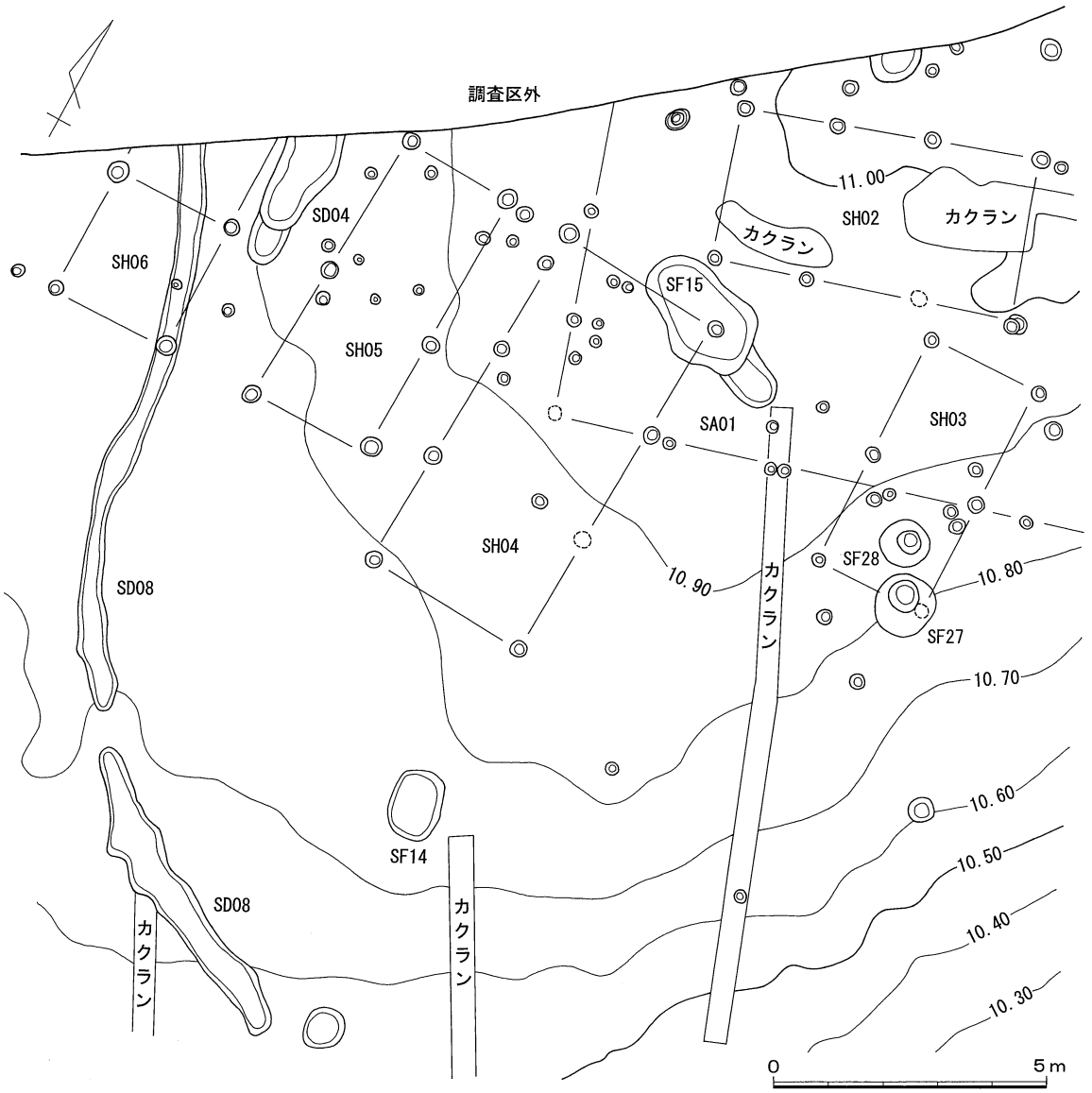
平坦面を南北方向に、途中で少し東に曲がっている。幅約50㎝、長さ16.4ｍ、深さ約10㎝と浅く、途中で切れていることから最深部だけが残存したものと考える。土器は小破片のみで、時期を判定できるものではない。位置関係からみてSH02とSA01およびSF14を囲む区画溝と推定する。

区画溝ＳＤ０９（第７図）

平坦面を南北方向に伸びる溝である。幅約50㎝、深さ約20㎝、長さ14.8ｍを測る。土器は小破片が出土しているのみである。Ｂ群の建物を囲む区画溝であると推測する。

土坑墓ＳＦ１４（第21図）

平面形が隅丸長方形、0.9ｍ×1.3ｍの規模を持ち、深さ10㎝を測る。長軸を南北に合わせている。底面のやや北よりから銭貨３枚（41-1）が出土した。北枕の屈曲位で埋葬されたと推定する。埋葬時期は15世紀と判断する。



第18図　中世の遺構概略図

土坑墓ＳＦ１９（第21図）

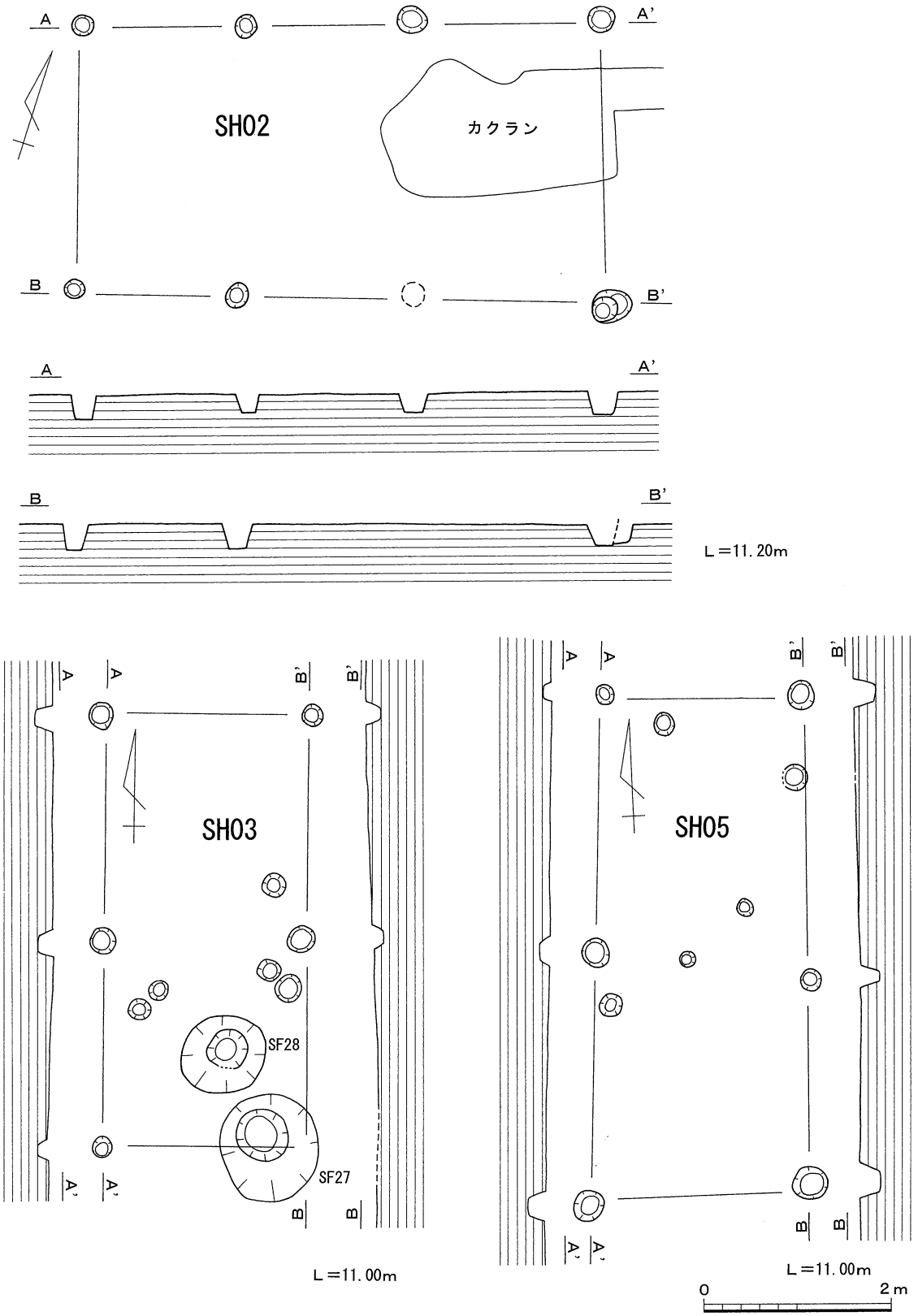
平面形が隅丸方形、1.0ｍ×1.1ｍの規模を持ち、深さ20㎝を測る。長軸を南北方向に合わせている。やや西よりの底面から銭貨３枚（41-2）が出土した。銭貨は火を受けているが、土坑内に焼土や炭は認められない。したがって近辺で火葬された後に埋葬されたと推定する。かわらけ１枚（33-7）が出土している。埋葬時期は15世紀と判断する。

土坑墓ＳＦ２４（第21図）

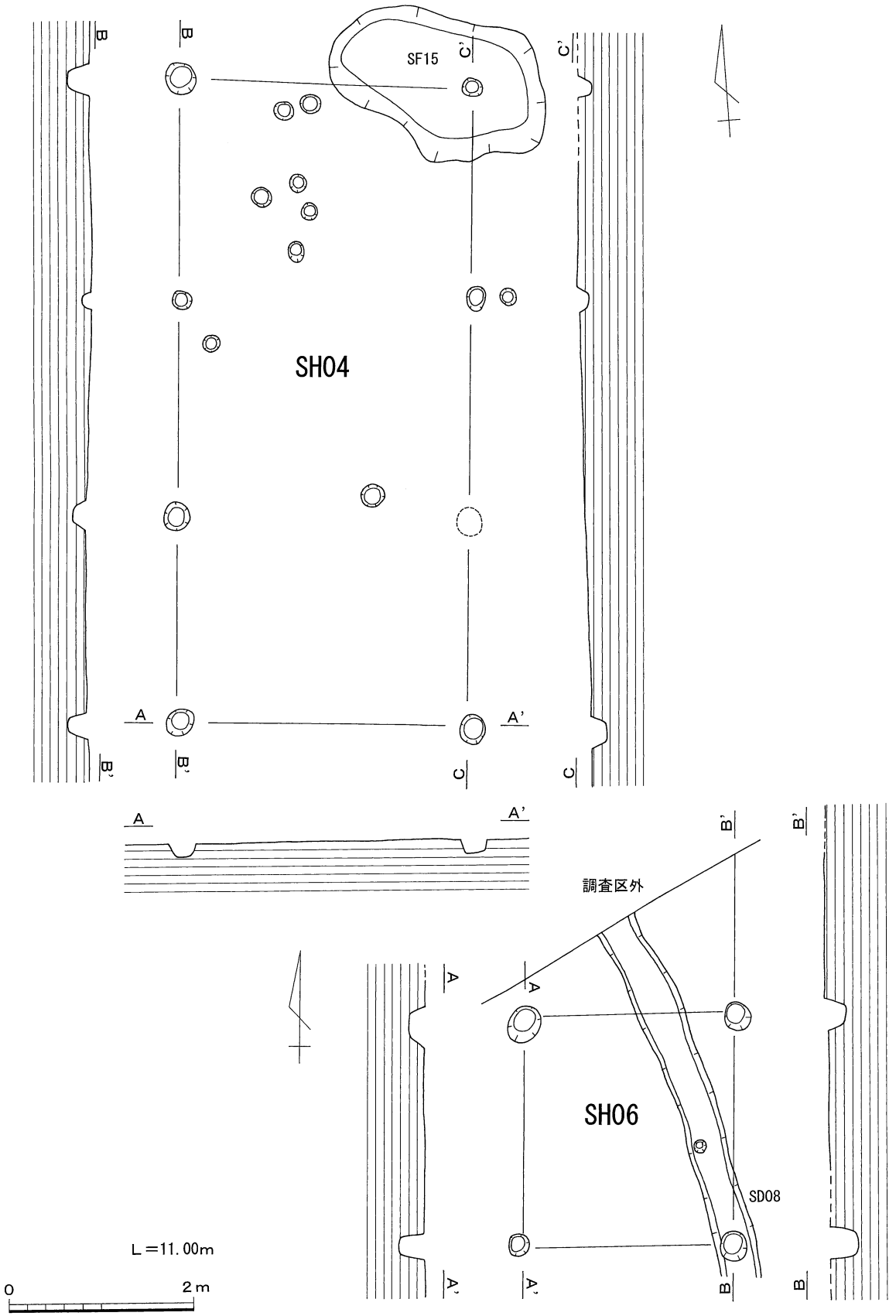
平面形が隅丸長方形、0.7ｍ×0.8ｍの規模を持ち、深さ10㎝を測る。長軸は傾斜方向に合わせているようである。銭貨４枚（41-3～5）が出土している。この貨幣も火を受けていることから、SF19同様火葬後に埋葬されたと推定する。埋葬時期は15世紀と判断する。

土坑ＳＦ１５

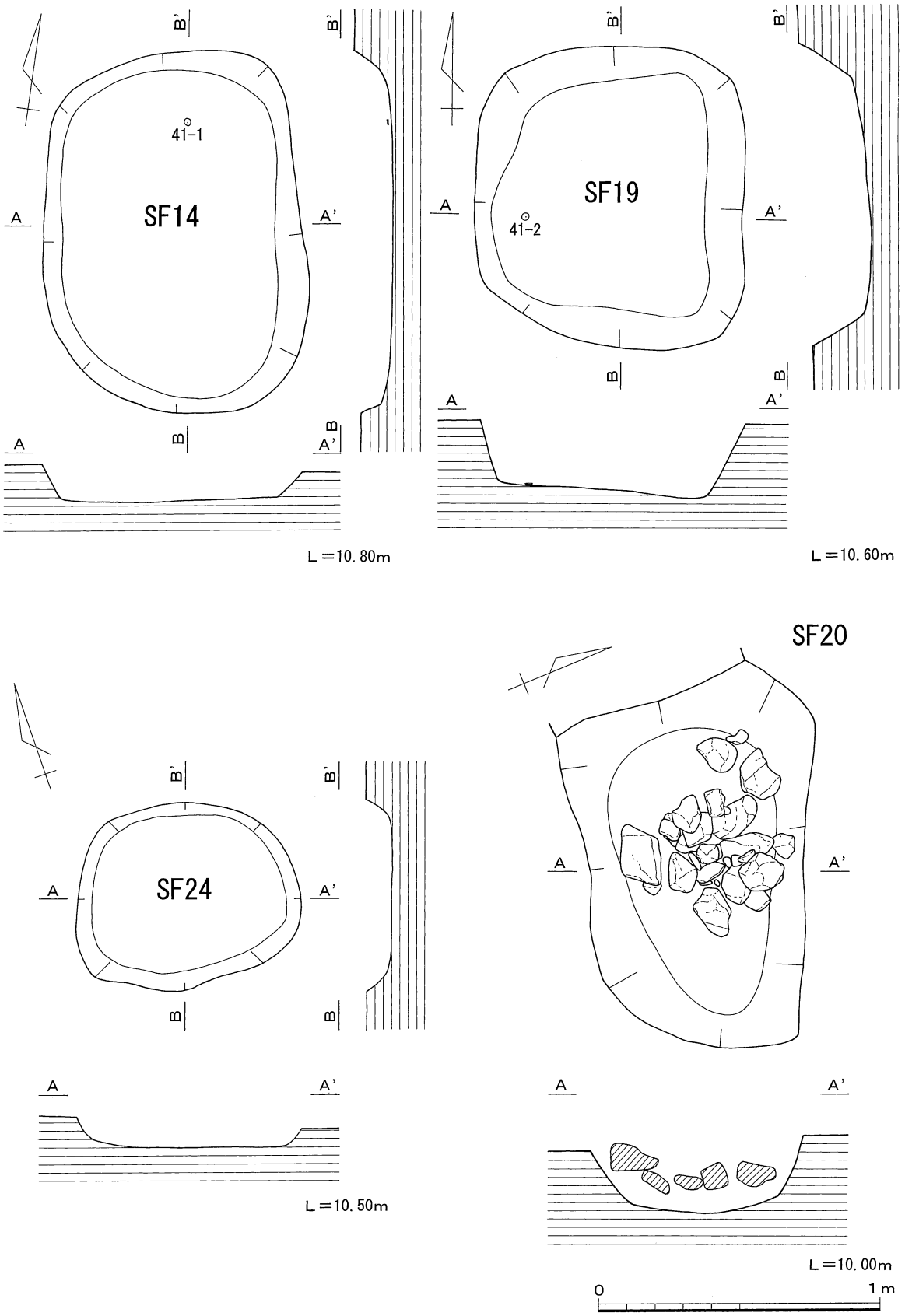
SH02の南西角に位置する。平面形が不定形、1.5ｍ×2.5ｍの規模を持ち、深さ40㎝を測る。SH02の南西角であり、またSA01の内側という位置関係からみて、SH02に付随する池と考える。土器は弥生時代～中世の小破片が出土している。



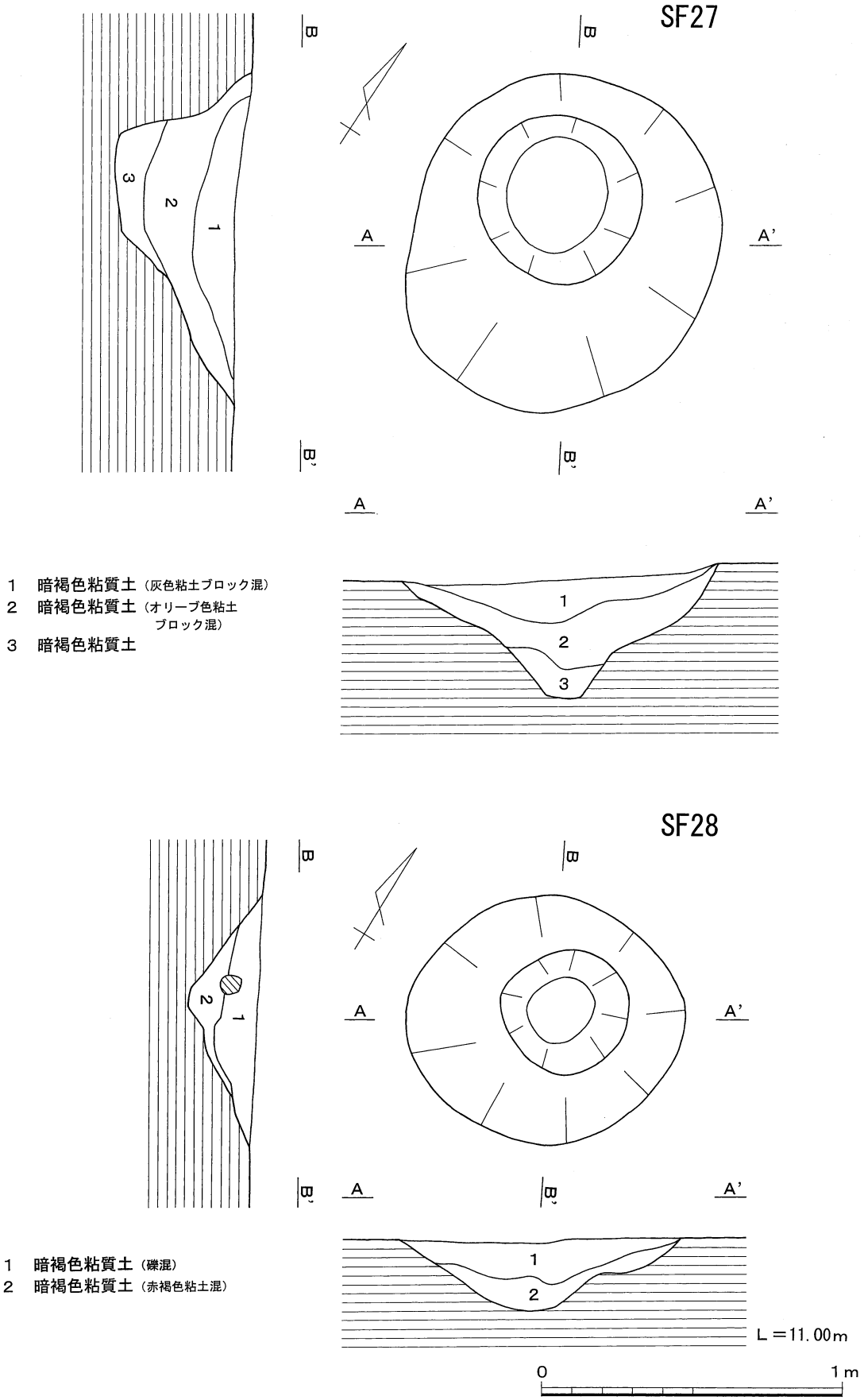
第19図　SH02・SH03・SH05実測図



第20図　SH04・SH06実測図



第21図　SF14・SF19・SF24・SF20実測図



第22図　SF27・SF28実測図

その他（第22図）

SF27はSH02の南に位置する。遺物は出土していないが、SH03を切っていることから15世紀以降である。SF28はSF27の北に位置する。遺物は出土していないが、SF27との類似性から同時期と推測する。

４．時期不明

ＳＸ０１（第23図）

調査区の北東端にある遺構である。炭の混じった焼土、曲がった溝、ピットを伴う。竪穴住居を想定したが、大部分が調査区外であることから、性格不明とする。時期は近くの土坑（SF18）から古墳時代の土器片が出土していることから古墳時代の可能性がある。

ＳＤ０７（第24図）

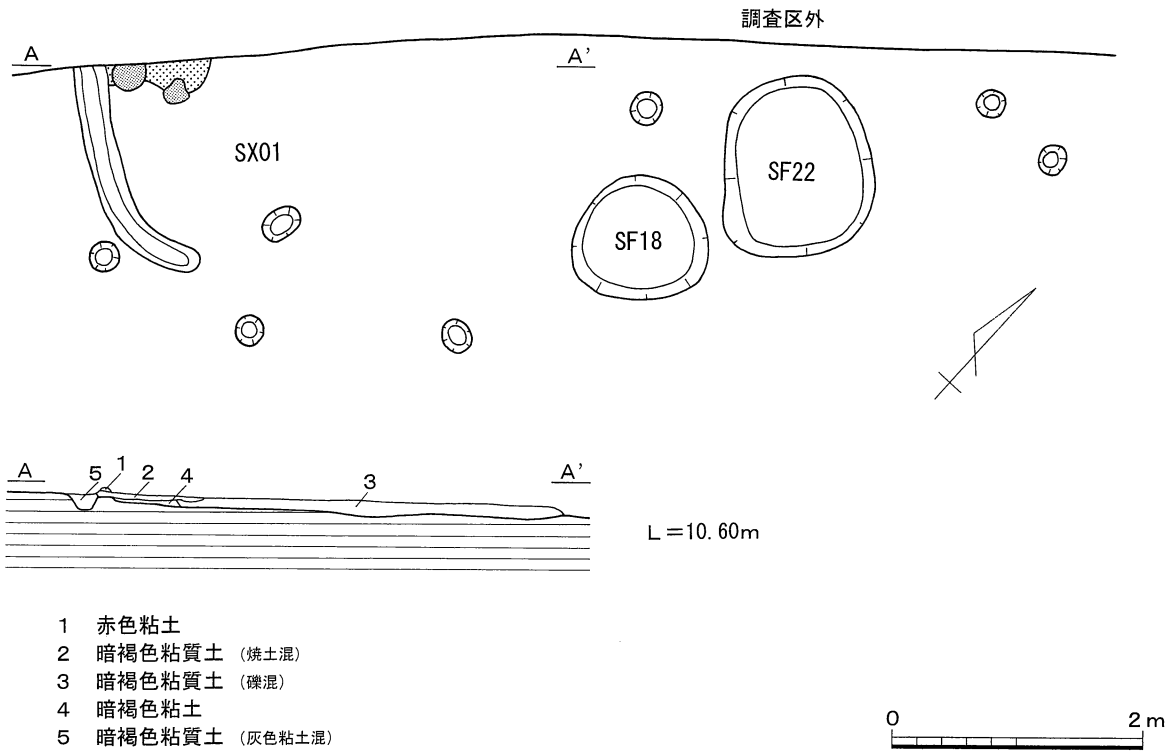
SH02の東側、平坦面の東端に位置する。幅約50㎝、深さ約10㎝の溝が長径7.2ｍ、短径6.6ｍの楕円形に廻る。内側から２基の浅いピットを検出した。遺物を伴わないので時期は不明である。遺構の性格は古墳周溝や住居周溝が考えられるが、古墳にしては溝が浅く明瞭すぎ、住居にしては柱穴の位置が違う。

ＳＦ１７（第24図）

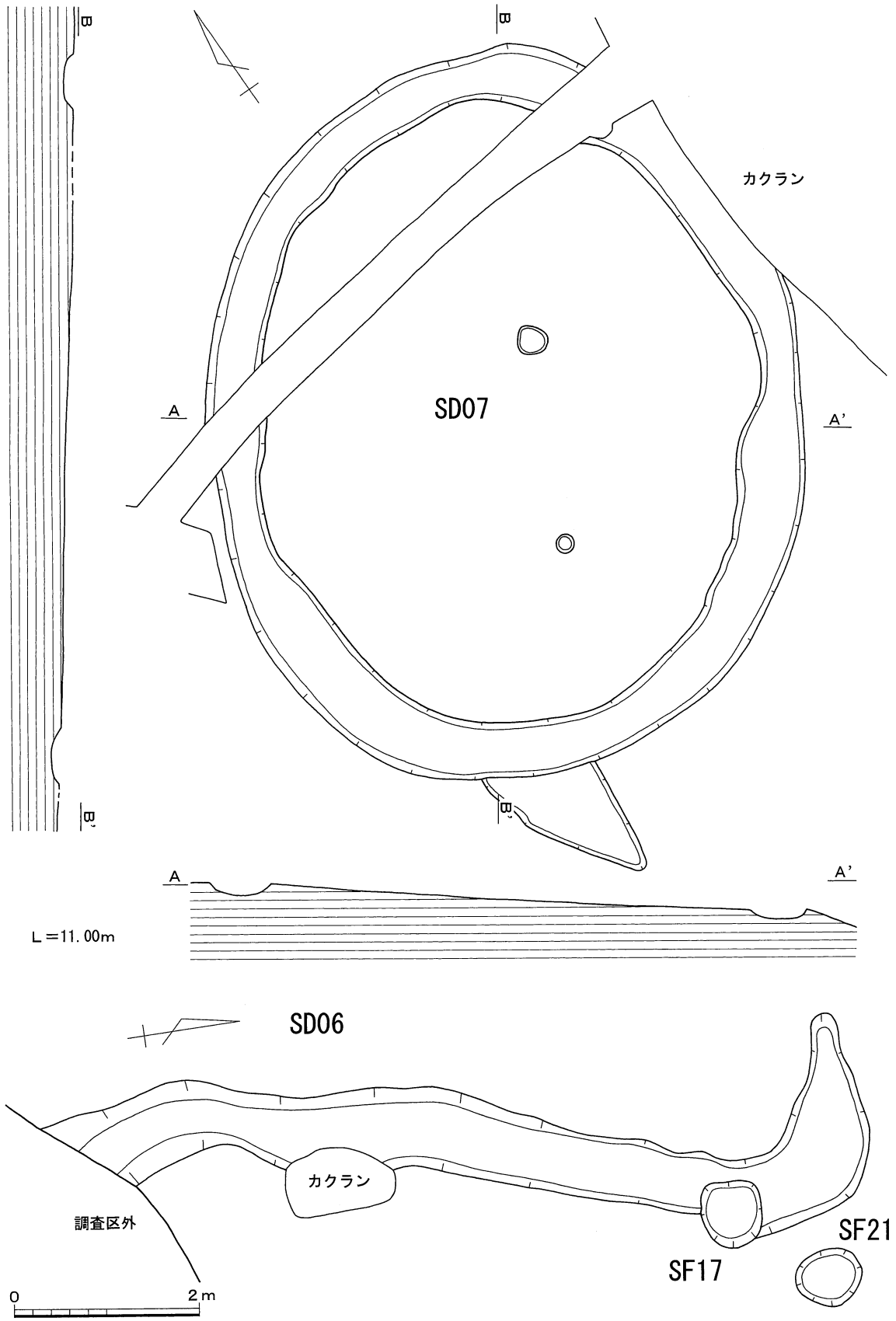
調査区の東端にある遺構である。平面形が円形、65㎝×70㎝の規模を持ち、深さ40㎝を測る。基盤層の岩盤を打ち砕き掘削している。SD06で集めた水を貯えていたと推測する。

ＳＦ２０（第21図）

平面形が不定形、0.9m×1.3mの規模を持ち、深さ25㎝を測る。こぶし大から子供の頭大の石を検出した。遺物等は出土していない。中世の墓である可能性がある。



第23図　SX01・SF18・SF22実測図



第24図　SD06・SD07実測図

（2）遺物

1．土器・土製品

縄文時代～弥生時代前期の遺物

・土器棺壺（第25図　図版11）

調査では土器棺墓2基を検出している。25-1はSZ01、25-2はSZ02から出土しており、器種は壺と推定される。

25-1は頸部および胴部下半を欠損する。復原高47.5㎝、底径7.0㎝を測り、半球形の体部をもつ。底部外面から最大径付近に横方向の条痕を、上半にはナデを施す。

25-2は頸部上半と胴部中位を欠損する。復原高45.1㎝、底径6.0㎝で、胴部最大径がやや丸みをもつと推定される。頸部には指押圧による二条突帯をもち、突帯間を沈線で区画する。摩滅のため外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕が残存する。1・2は馬見塚式末～樫王式期（突帯文～条痕文系土器）の範疇と考えられる。

・包含層出土土器（第26図　図版12）

26-1・2は深鉢である。1は端部を面取りし、屈曲部外面に1列の刺突が見られる。2は端部は丸く仕上げられ、外面に2列の刺突が見られる。ともに摩滅が激しいが、わずかに隆帯の痕跡が認められ、隆帯上に半截竹管による連続爪形文を施していたと思われる。2は口縁部内面に縄文を施す。縄文時代中期初頭、五領ヶ台式併行の時期と考えられる。

図版12-aは図化できなかったが、深鉢の口縁部破片と思われる。直径3㎜ほどの棒状工具による刺突が施されている。破片のみで全体像が不明であるが、縄文時代後期、堀之内式・加曽利B式の時期に属する可能性が考えられる。

26-3・4は深鉢の口縁部である。外面は櫛もしくは半截竹管の条痕を施す。樫王式～水神平式期に位置づけられる。

26-5は壺肩部で突帯上に押圧をもつ。弥生時代前期～中期前半と考えられる。

26-6・7は壺の口縁部である。6は指頭、7は棒状工具による押圧突帯を有する。外面は斜方向の条痕を施す。弥生時代前期、水神平式に位置づけられる。

26-8・9は内傾口縁土器（厚口鉢）である。8の外面には条痕が残る。弥生時代前期末と考えられる。

弥生時代中期～古墳時代前期

・弥生時代中期（第26図　図版12）

26-10～13は壺の破片である。10は内湾口縁壺で外面に条痕を施す。11は肩部破片で跳ね上げ文が施文される。12・13は受口状口縁壺である。口縁部外面に押圧突帯をもつ。13は口縁端面に押引文を、内面に条痕を施す。弥生時代前期～中期中頃に位置づけられる。

26-14は単純口縁甕で口縁上端にキザミをもつ。外面に条痕を施す。弥生時代前期末～中期と考えられる。

26-18は底部破片で外面の一部に条痕が残る。

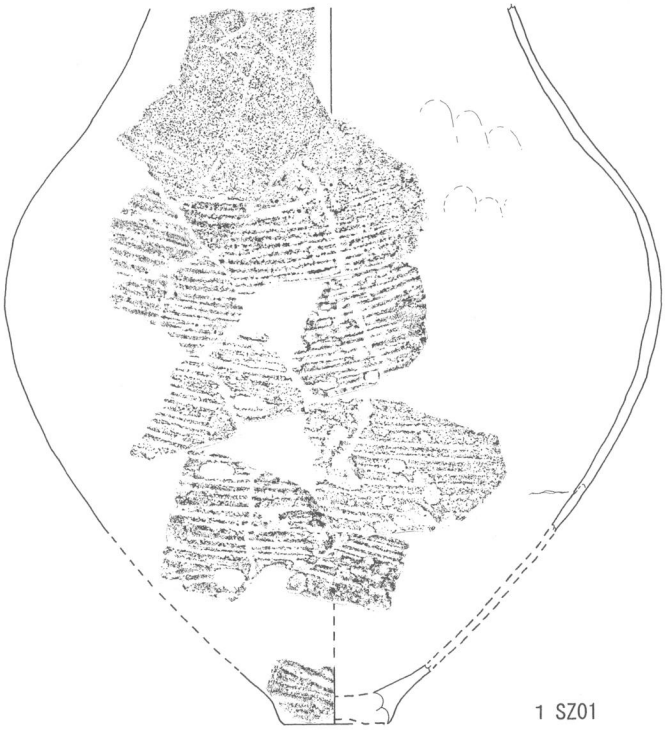
・弥生時代後期・古墳時代前期（第26図　図版12）

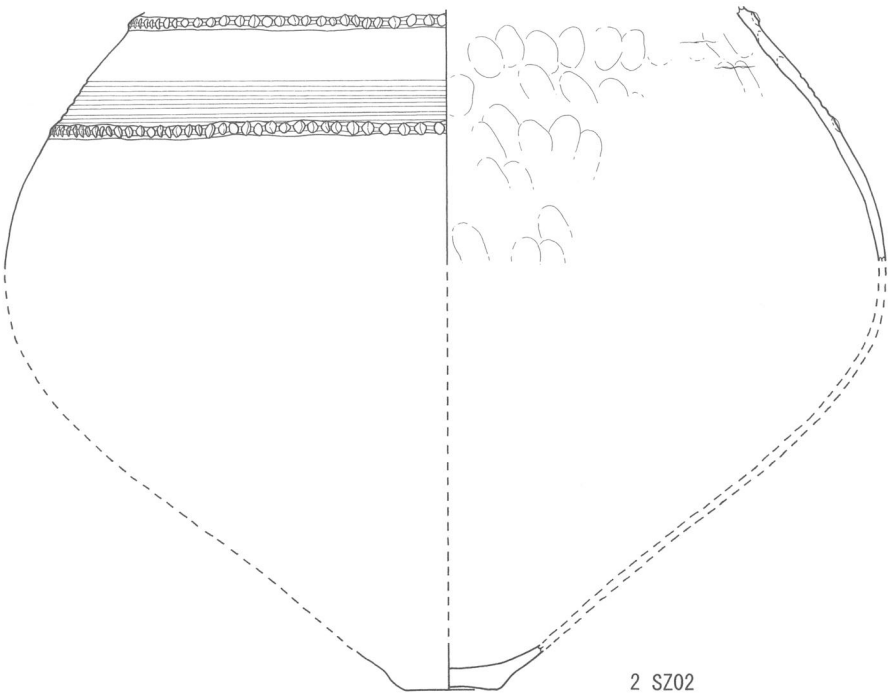
壺・甕・高坏があげられる。

26-15は単純口縁壺で直線的に開く頸部をもつ。26-16は高坏脚部で脚裾部に段を有する。15·16は弥生時代後期、菊川式に位置づけられる。

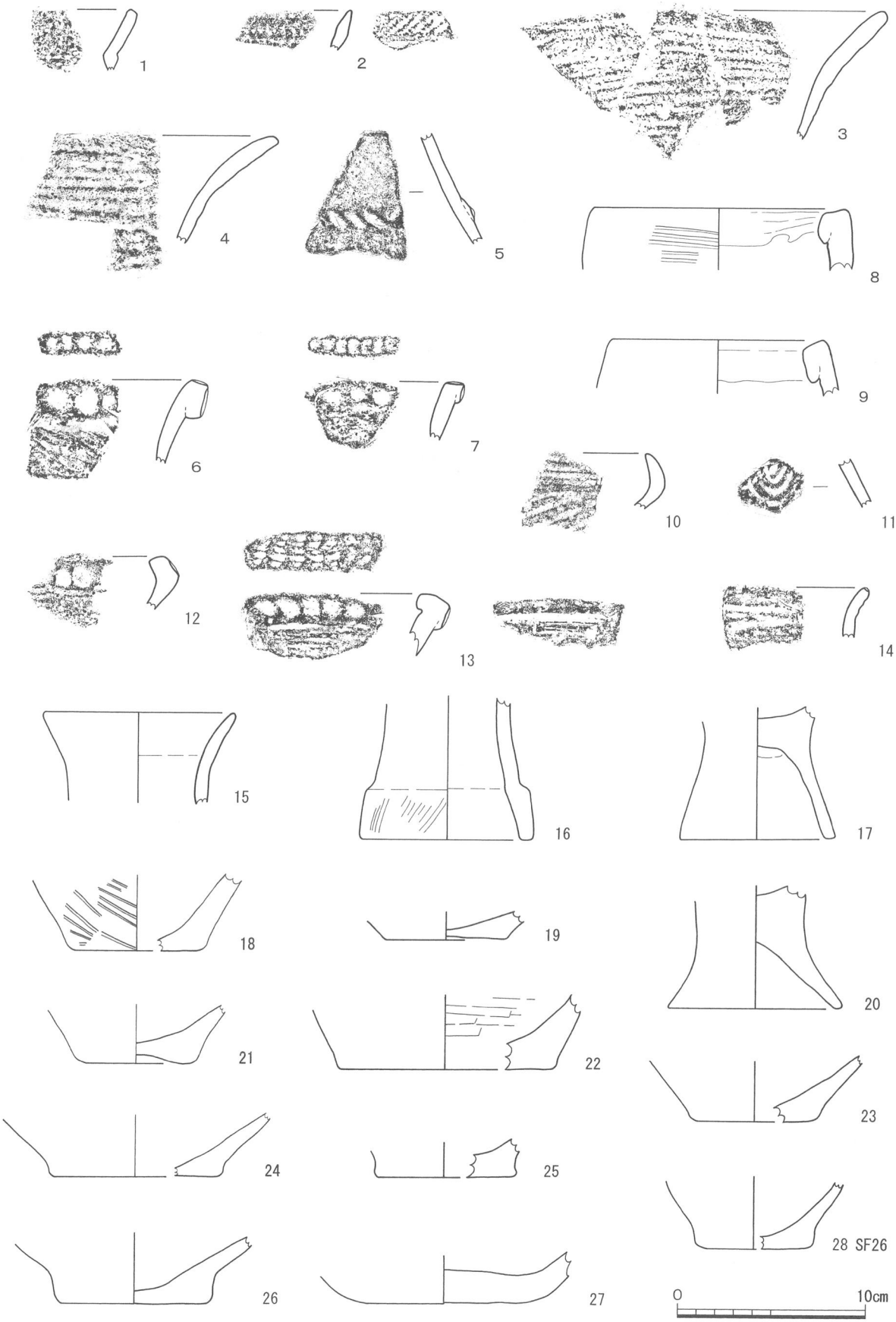
26-19・21～28は壺もしくは甕の底部である。平底と上げ底とが存在する。

26-17・20は台付甕の台部である。20は弥生時代中期に属する可能性が考えられる。





第25図　土器実測図１（縄文時代～弥生時代）



第26図　土器実測図２（縄文時代～古墳時代）

古墳時代後期～奈良時代

・土師器（第27～29図　図版13・14）

坏身・壺・甕・高坏・手捏土器・甑があげられる。

27-1～3は坏身である。1は器壁が厚く、口縁部に鈍い面をもつ。2は器壁が薄く、口唇部を尖らせる。3は体部が大きく外反し、口縁部には面をもつ。７・８世紀代と考えられる。

27-4・5は長頸壺の胴部である。4は内外面をハケ調整の後ナデを施す。

27-6～13、28-1、29-1・4～6・8は甕である。長胴甕、小型甕、大型甕の三種類に区分できる。

27-6・8・9・12・13、28-1は長胴甕である。6は緩く内湾する頸部を、8・9はくの字に屈曲した頸部をもつ。12・13は垂直に立ち上がる頸部に肥厚した口縁部を有する。28-1は全体に二次焼成を激しく受けており、通常の使用以外による被熱の可能性が考えられる。

小型甕は27-7・10・11、29-1がある。7は胴部下半がやや窄まる。口縁部内面には細かなハケを施す。10は直立した頸部を、11はきわめて短い頸部を有する。29-1は長胴を呈する。胴部内面をハケ調整の後板ナデを施す。

29-5・6・8は台付甕の台部である。5は端部を内側へ屈折させる。8は低い台部をもつ。外面にはナデを施す。甕は概ね７・８世紀代と考えられる。

29-7は高坏の坏部と思われる。６世紀代と推定される。

29-9～17は手捏土器である。9～11は底径2.0㎝以内である。11は口縁下部に２個一対の穿孔を有する。12～17は底径2.0㎝以上で平底に仕上げられる。形態差はあるが概ね８世紀代と考えられる。

29-18～22は甑の破片である。18・19は胴部で、20～22は把手の一部である。22はミニチュア型甑と思われる。

・須恵器（第30～32図　図版15・16）

碗形坏身・箱坏・有台坏身・皿・坏蓋・摘蓋・壺・甕・大型瓶・平瓶・高坏・鉢・甕があげられる。

30-1～3はSB01、30-4～6はSB02、その他は包含層出土である。

30-1～3は坏蓋である。口径は9.0㎝前後を測る。内湾口縁を呈し、口縁端部を丸く仕上げる。天井部には反時計回りのヘラケズリを施す。７世紀前半～中頃に位置づけられる。

30-4・5・20～22は碗形坏身である。4はやや内傾した口縁部をもつ。７世紀後半～８世紀中頃に位置づけられる。

30-6は壺の口縁部である。口縁部直下に沈線をもつ。

30-7～19は摘蓋で口径16.0㎝前後を測る。7～10・13はやや小ぶりな摘みを、11・12は扁平な摘みをもつ。14～19は天井部から口縁部に向かい大きくハの字に広がる。14・15は口唇部を尖らせ、16～19は端部を短く立ち上がらせる。形態差はあるが概ね８世紀中頃と考えられる。

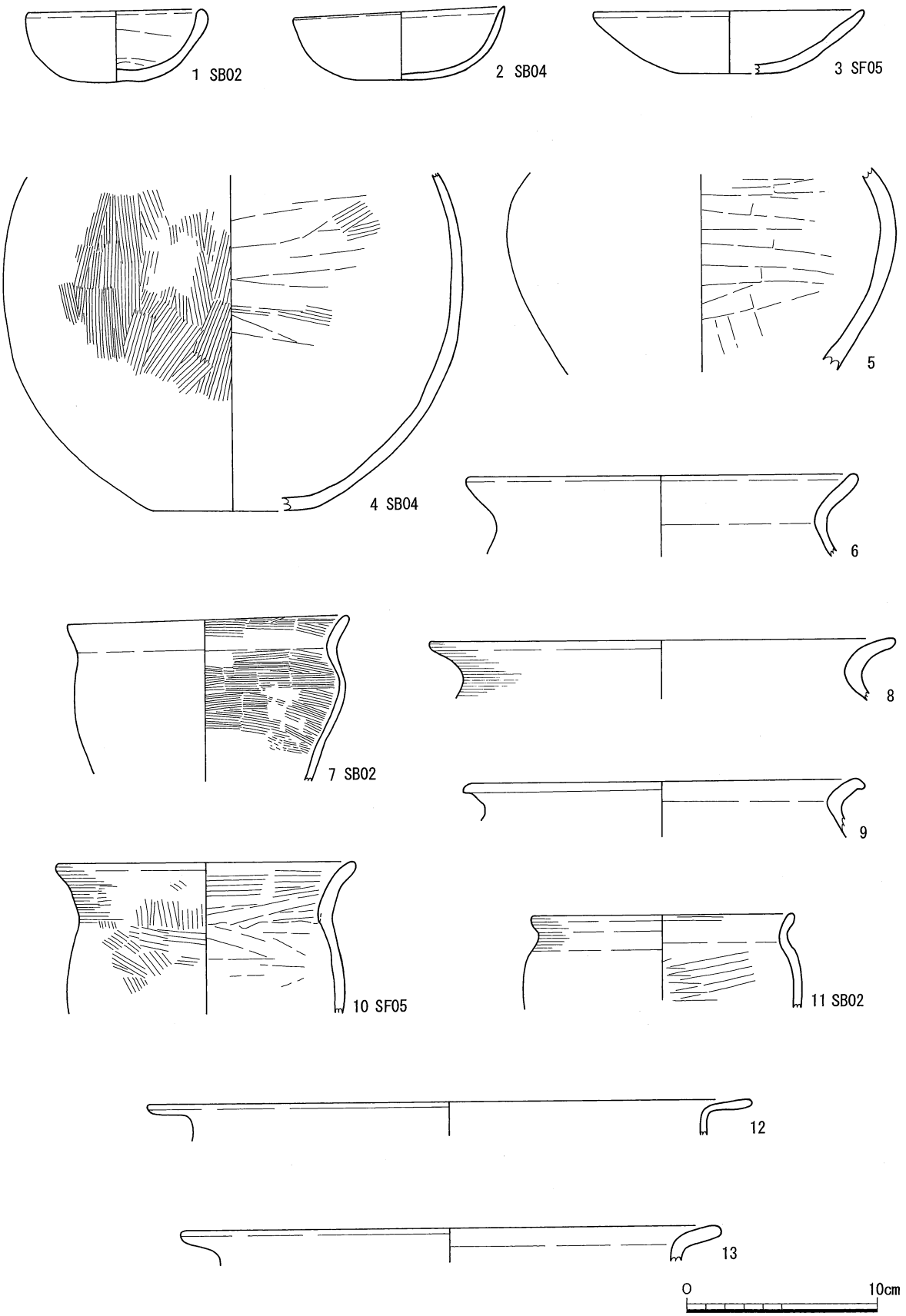
30-23は皿である。口縁部は面をもち、底部付近にヘラケズリを施す。８世紀中頃に位置づけられる。

30-24は箱坏の底部である。底部付近にはヘラケズリが施される。

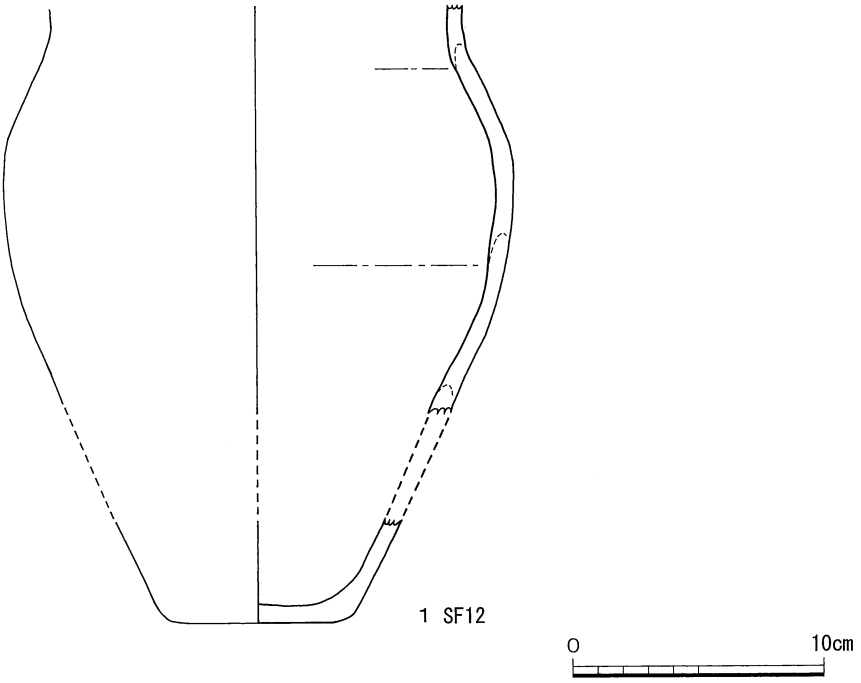
30-25～30、31-1～16は有台坏身で口径14.0～14.5㎝前後を測る。28～30は底部からほぼ垂直に立ち上がる体部をもつ。高台は平坦である。28は口縁端部を薄く外方へ引き出す。31-1～3は底部が高台よりも突出している。高台は三角形を呈する。形態差はあるが概ね８世紀中頃と考えられる。

31-17は大型瓶である。内面に自然釉が付着している。７世紀代と推定される。

31-18～20は甕である。18は面のある口縁部をもつ。頸部内面には当て具痕が残る。19・20は口縁部にやや丸みをもつ。頸部外面にタタキを、内面に当て具痕を残す。甕は７・８世紀代と考えられる。



第27図　土器実測図３（古墳時代～奈良時代）



第28図　土器実測図４（古墳時代～奈良時代）

31-21は平瓶の口縁部で、口縁直下に２条の沈線を巡らす。

31-22は長頸壺、31-23は壺の底部破片である。23は胴部下半をヘラケズリ調整の後ナデを施す。７世紀後半～８世紀前半に位置づけられる。

32-1・4は甕である。1は無台甕で頸部に沈線をもつ。胴部下半は反時計回りのヘラケズリを施す。4は有台甕である。頸胴部には２条の沈線と斜行刺突文を施し、最大径以下をヘラケズリ調整する。ともに８世紀中頃に位置づけられる。

32-2は高坏の脚部である。７・８世紀代と推定される。

32-3は鉢で球形の胴部に短い頸部がつく。底部外面には籾状圧痕を残す。胴部下半は反時計回りのヘラケズリを施す。７世紀後半～８世紀前半に位置づけられる。

中・近世（第33図　図版17）

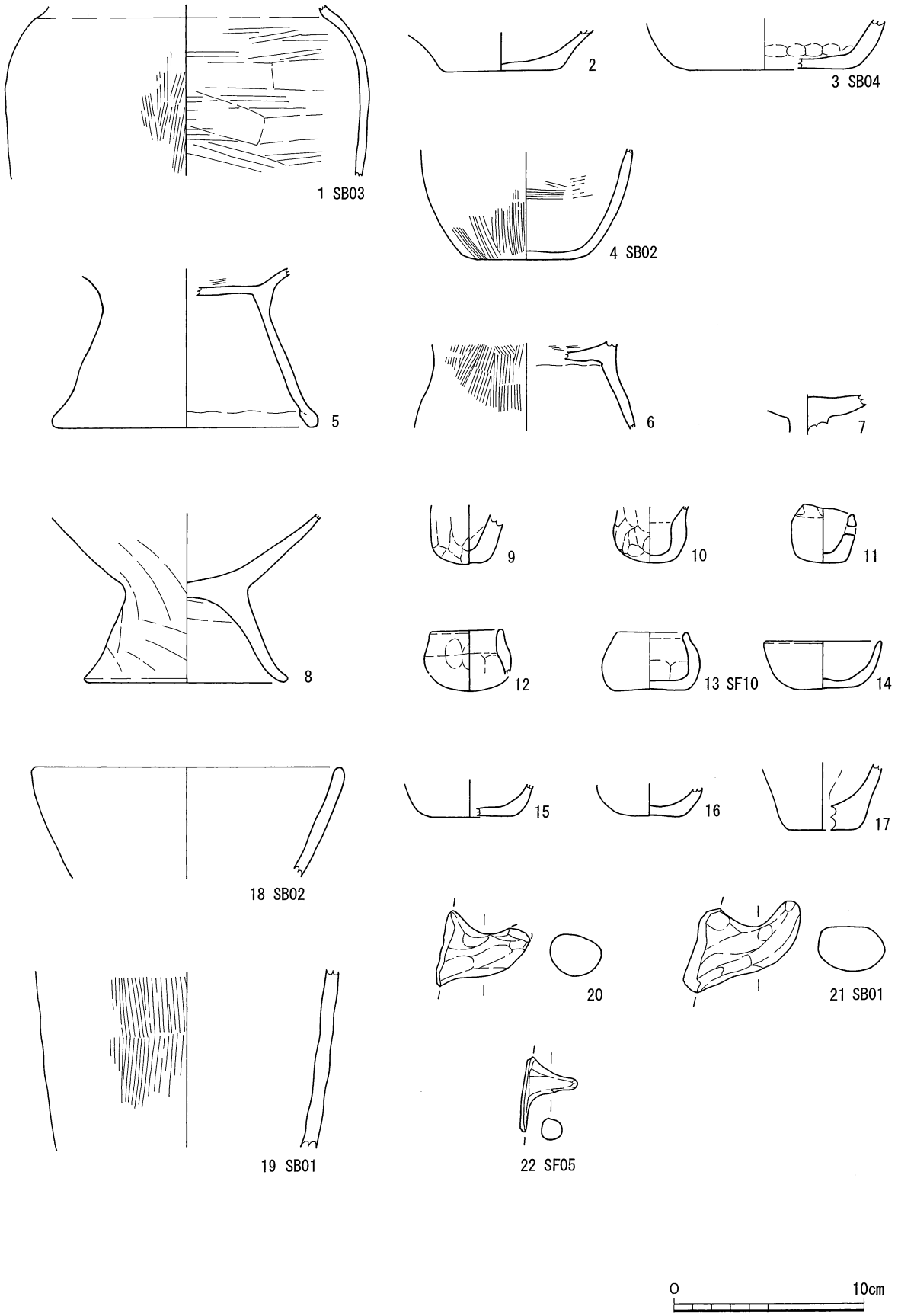
33-1・2・4・5は渥美・湖西窯の山茶碗である。1は緩やかに内湾する体部をもつ。2・4は底部外面に糸切痕を残す。5は高台下端面に籾痕が残存している。すべて12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。

33-3は龍泉窯系の青磁碗である。14世紀代と考えられる。

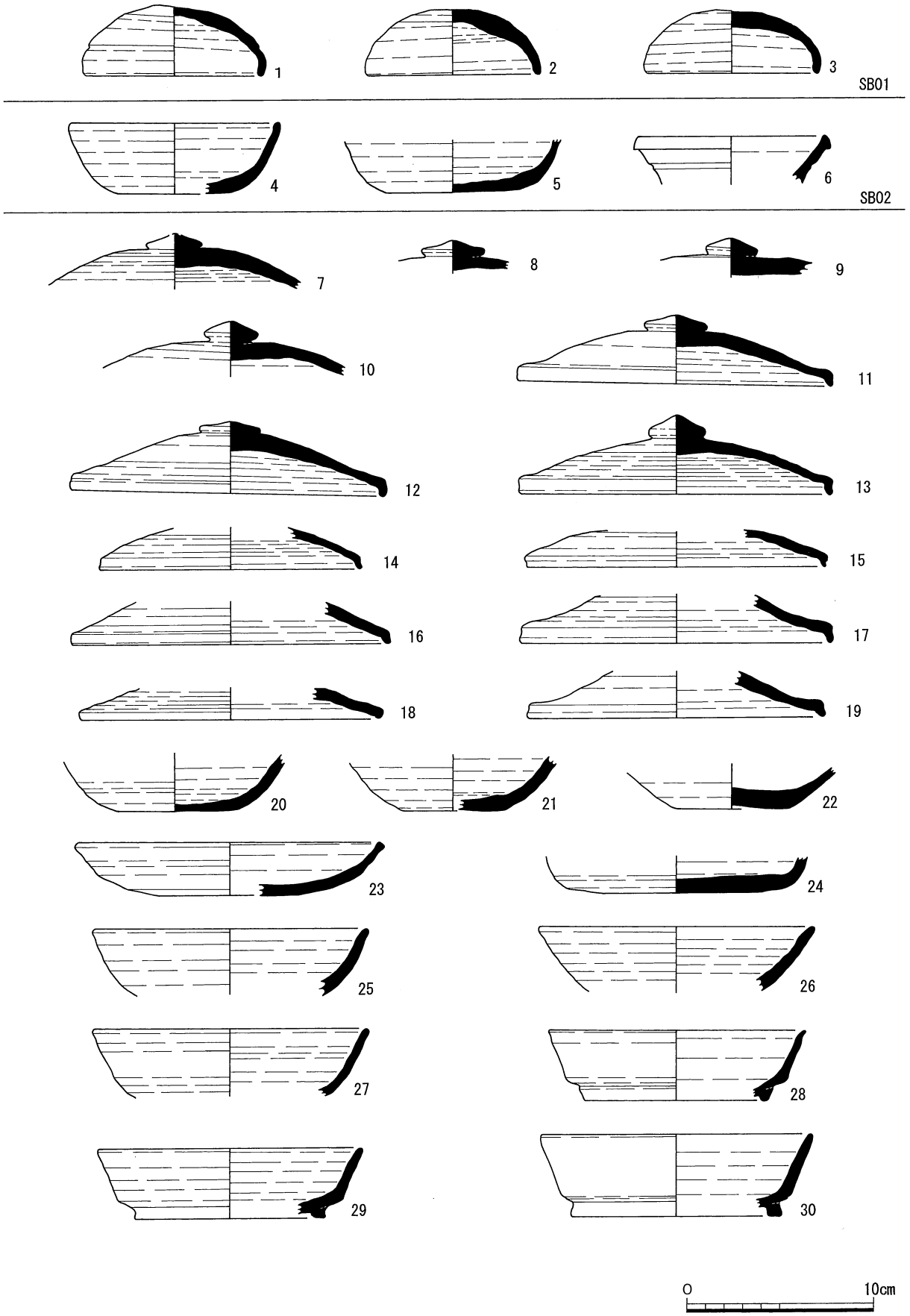
33-6は四耳壺の底部で内外面の一部に灰釉が施される。高台端面には線状圧痕を残す。14世紀中頃（古瀬戸中期）に位置づけられる。

33-7～11は非ロクロ成形のかわらけで口径10.0㎝以内の小型品（7・8・10・11）と12.0㎝以上の中型品（9）がある。7～9の口縁部内面にはナデによる段が残る。これらは15世紀後半に位置づけられる。

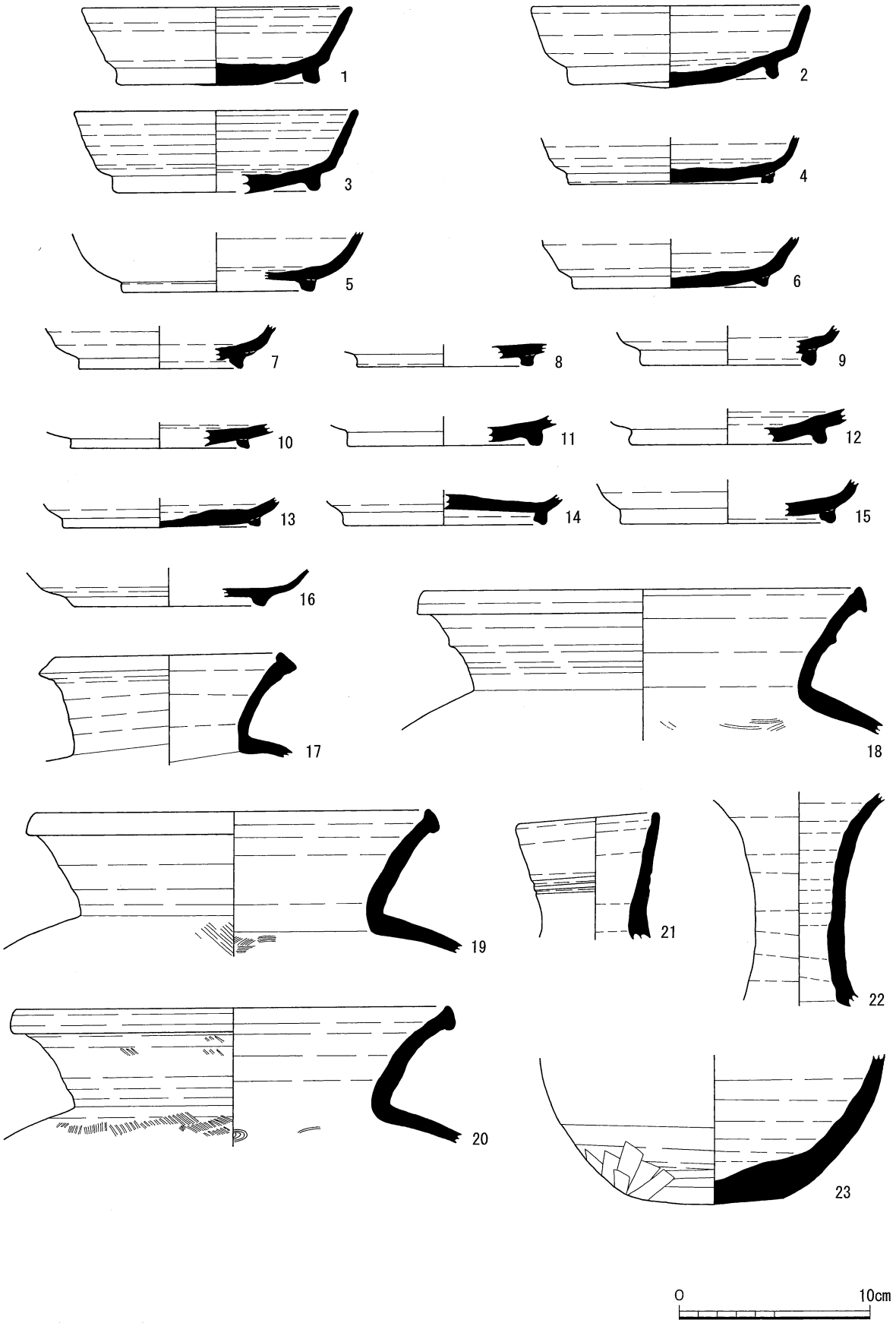
33-12～14は17世紀前後の遺物である。12は内耳鍋の口縁部である。13は天目茶碗で外面に鉄釉を施す。14は瀬戸・美濃産の皿で、直線的に広がる体部に幅広の高台をもつ。高台を除く全面に灰・長石の御深井釉が施される。



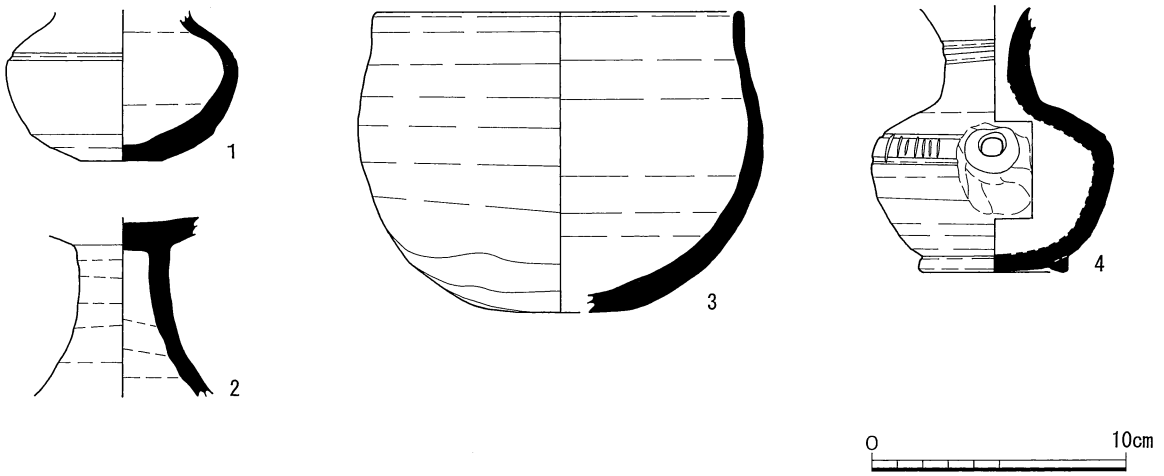
第29図　土器実測図５（古墳時代～奈良時代）



第30図　土器実測図６（古墳時代～奈良時代）



第31図　土器実測図７（古墳時代～奈良時代）



第32図　土器実測図８（古墳時代～奈良時代）

33-15～24は18世紀以降の遺物である。15は瀬戸・美濃の陶胎染付皿で見込み部にコンニャク印判を施す。16～18は瀬戸・美濃産の丸碗で外面に鉄釉を施す。16は内面に長石釉を、18は灰釉を施す。19・20は瀬戸・美濃産の擂鉢で全面にサビ釉を施す。19は口縁端部が鈍く丸みをおびている。20は底部片で内面に擂目を残す。

33-21・22は常滑産の甕である。21は直立した頸部をもつ。外面に鉄釉が施される。22は平底甕底部で内外面にナデを施す。23は瀬戸・美濃産の半胴甕底部である。底部内面に鉄釉を施す。

33-24は土錘である。時期は不明である。

２．石器・石製品

石鏃・未成品（第34図　図版18）

石鏃成品13点、石鏃の未成品と思われるもの20点が出土した。平面形態から凹基無茎・凹基有茎・平基有茎・凸基有茎に分類できる。

・凹基無茎鏃

34-1・4・8・11～13はチャート製である。基部の抉りは浅く、断面はレンズ状を呈する。1は基部を欠損するが、先端の作りが鋭いため凹基無茎鏃に含めた。

34-7・14・17・18は黒曜石製で14・17・18については未成品と考えられる。7は基部を欠損している。断面はレンズ状を呈する。

34-10は下呂石製で基部先端を欠損する。下呂石は剥片を含めても、この１点のみである。

・凹基有茎鏃

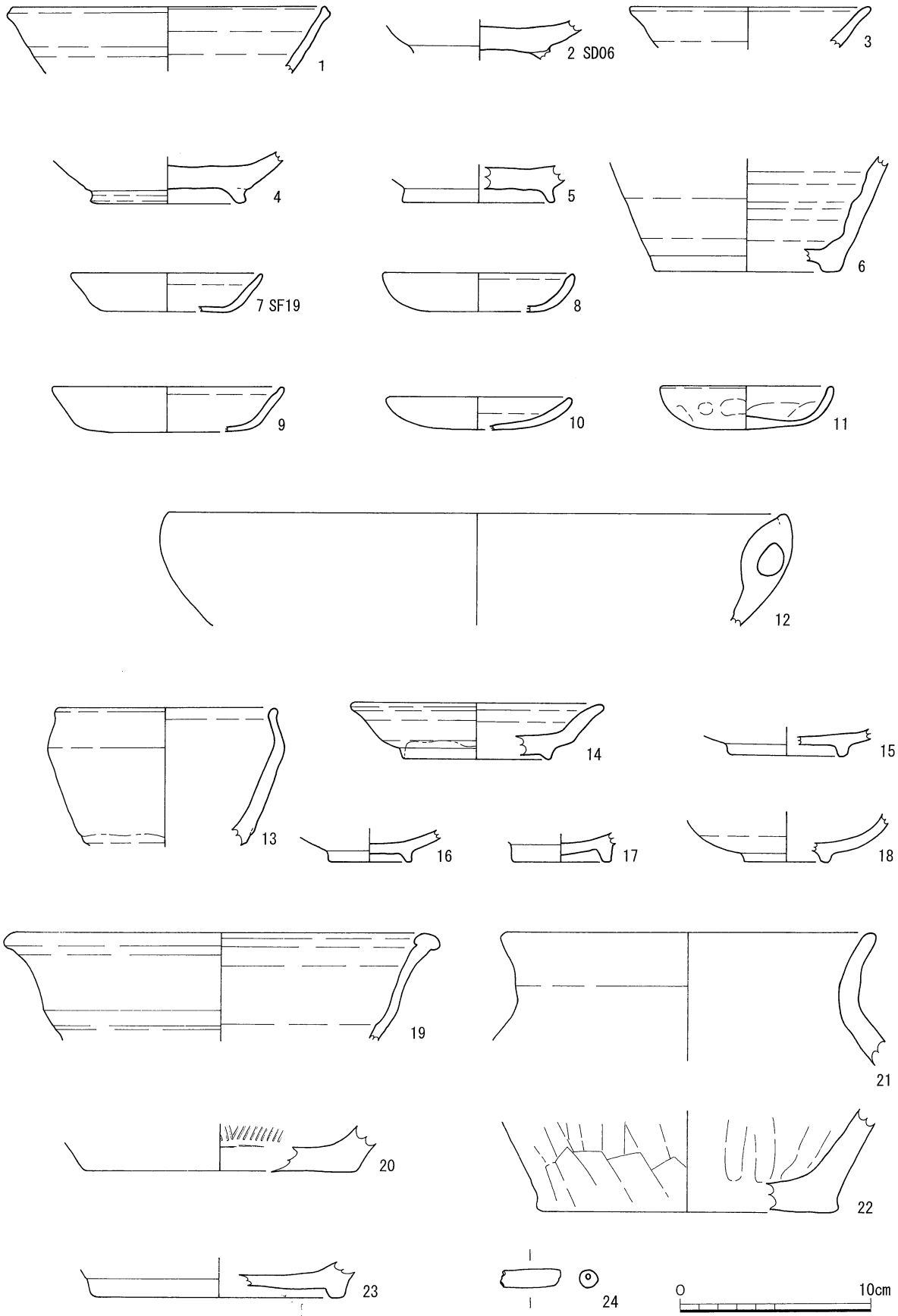
34-2はチャート製で長さに対しやや幅広に作られている。34-5は黒曜石製である。厚さがあるため製作途中の可能性が高い。

・平基有茎鏃

34-9はチャート製で茎部先端が鋭利に仕上げられる。

・凸基有茎鏃

34-6・16は黒曜石製で16は未成品である。6は基部がやや厚手に製作されている。



第33図　土器・土製品実測図（中・近世）

打製石斧（第35図　図版19）

35-1はハンレイ岩製で平面形は短冊形を呈する。基部中央には自然面が残る。刃部から基部側面・基端面に剥離痕が見られる。

35-2・3は緑色片岩製である。2は短冊形で片面の一部に剥離痕を残す。実測図左面の中央部を敲打する。3は分銅形である。両面には自然面が残存し、基部側縁には剥離痕が見られる。

35-4は片玄武岩製で短冊形を呈する。基端面および刃部先端を剥離調整し、全面を敲打する。

磨製石斧（第36図　図版19）

36-1～3は片玄武岩を使用する。1・2は乳棒状磨製石斧で断面は楕円形を呈する。基端面と基部側縁には剥離痕が残る。全面を敲打した後、基部から刃部先端にかけ研磨を加える。3は刃部の一部を欠損している。基部側縁から刃部に剥離痕が観察できる。基部に敲打を行い、刃部先端を研磨する。

36-4は緑色片岩製で柱状を呈する。基端部と基部側縁には剥離痕を、刃部には研磨痕を残す。実測図左面にのみ敲打痕が見られる。

太型蛤刃石斧（第37図　図版20）

37-1は片玄武岩製で長さ13.0㎝、幅6.2㎝、厚さ4.2㎝、重量609gを測る。断面は楕円形を呈する。基部側には剥離痕が見られる。ほぼ全面に敲打を行った後、研磨を加えている。

台石（第38図　図版20）

38-1はSB01の配石の１つである。石灰岩製の台石で長さ27.8㎝、幅17.8㎝、厚さ8.5㎝、重量5.7kgを測る。平面形は三角形で一部被熱による赤色変化が認められる。外面には不定方向の研磨痕が残存する。

環状石斧（第39図　図版21）

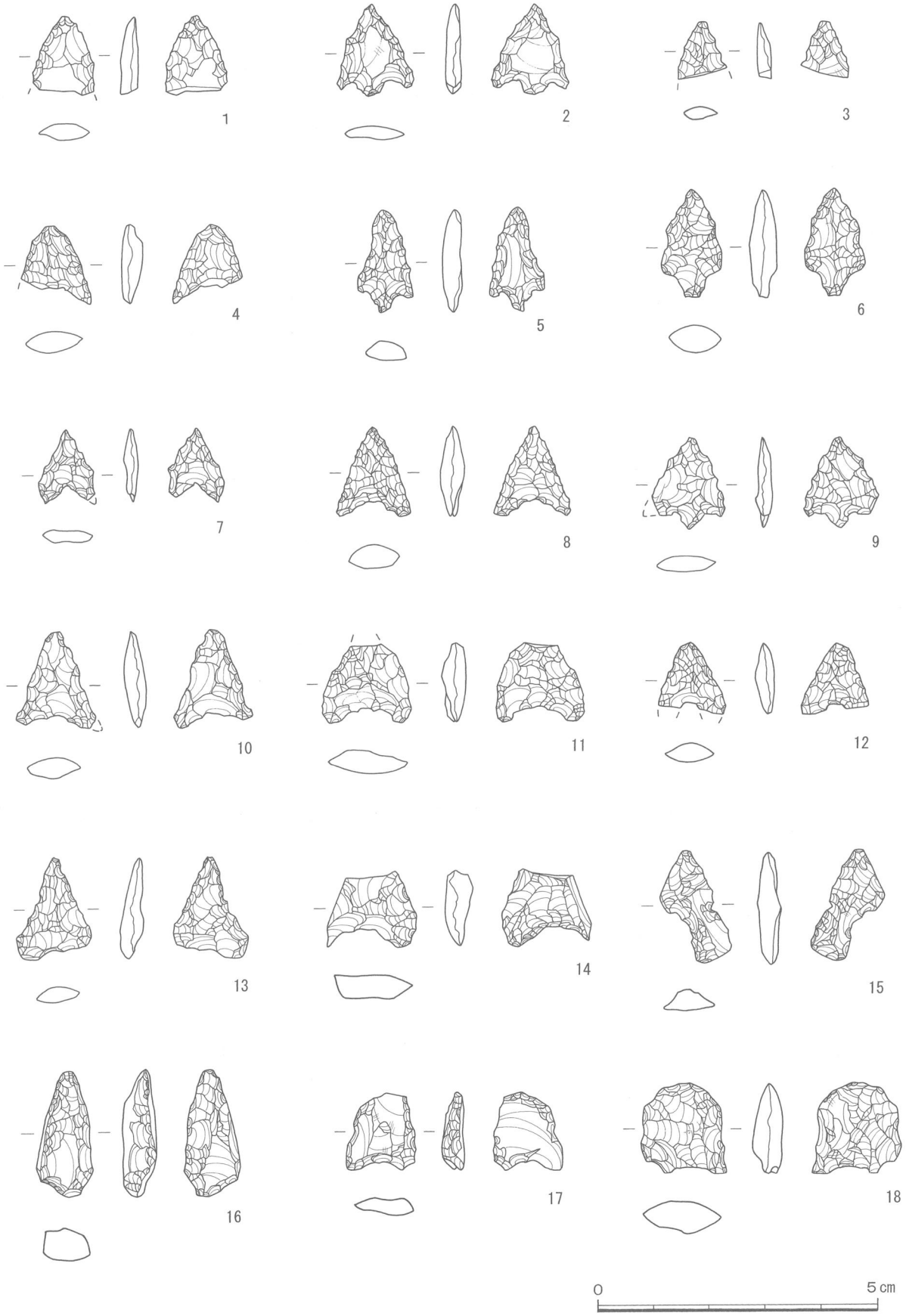
39-1は緑色片岩製で直径8.1㎝、円孔径1.0㎝、厚さ1.2㎝、重量134gを測る。平面形は不正円形を、断面はレンズ状を呈する。刃部の左上端および右下端部には剥離痕が残存する。円孔は両面穿孔でわずかに摩滅が見られる。

石剣（第39図　図版21）

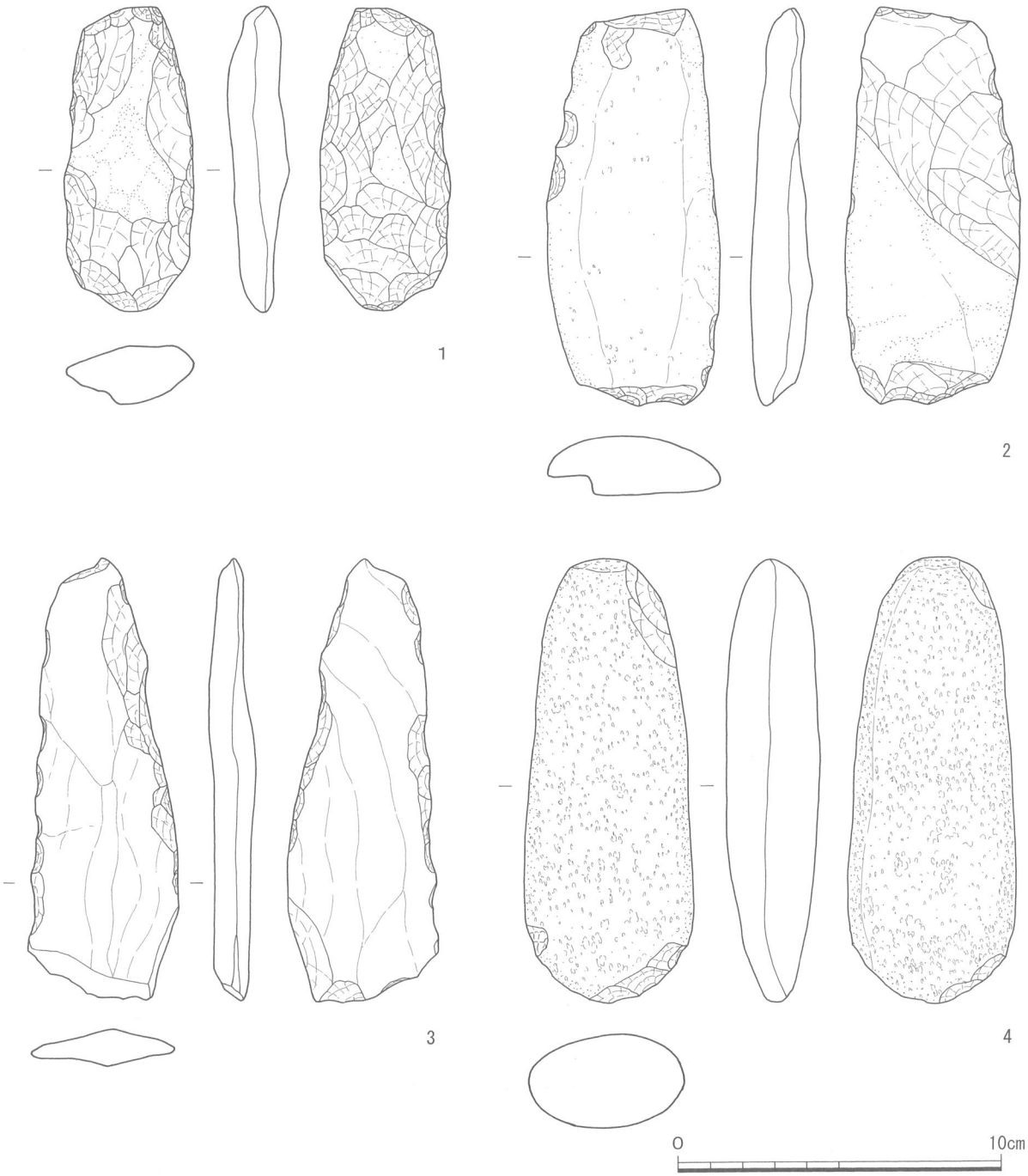
39-2は頭部から胴部中央付近が残存する。緑色片岩製で残存長14.3㎝、頭部最大幅5.9㎝、基部最大幅4.5㎝、厚さ2.0㎝、重量229gを測る。断面は楕円形を呈する。全面に敲打を行う。

不明石製品（図版21）

図版21-qは凝灰質砂岩の礫であるが、頂部から側辺部にかけて加工痕が連続して認められる。加工痕は一単位が幅約７㎜、長さ５～10㎜で、波形の面と平坦な面が観察される。鑿のような金属の刃物を二種類使って、削られたと思われる。時期・用途は不明である。



第34図　石器実測図１（石鏃・未成品）

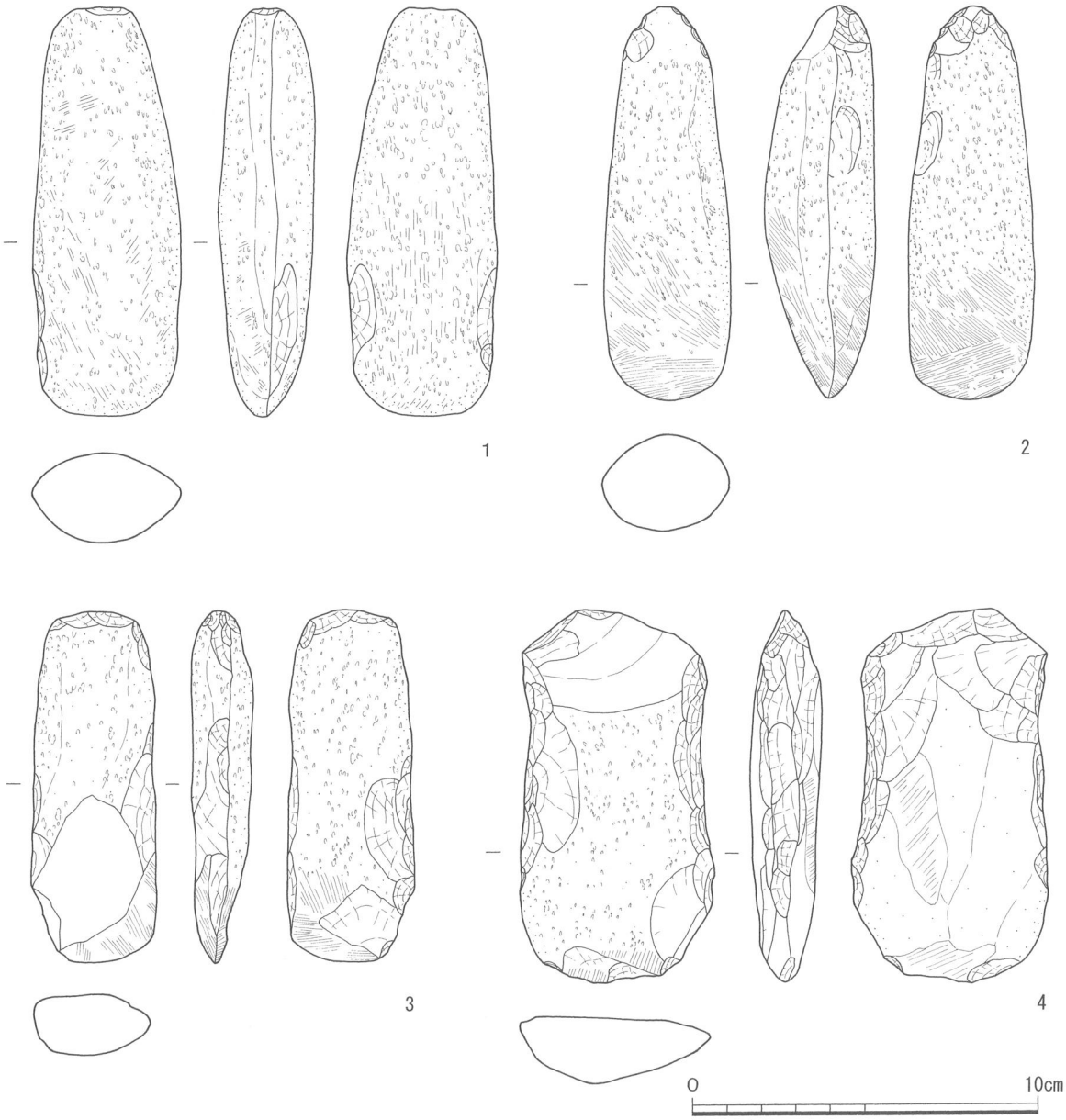


第35図　石器実測図２（打製石斧）

３．金属製品

鉄鏃（第40図　図版22）

40-1は鉄鏃の鏃身部破片で残存長3.1㎝、幅2.4㎝、厚さ0.4㎝を測る。平面形は三角形である。鏃身は平造で関部は撫角を示す。平根式三角形式に分類される。



第36図　石器実測図３（磨製石斧）

銭貨（第41図　図版22）

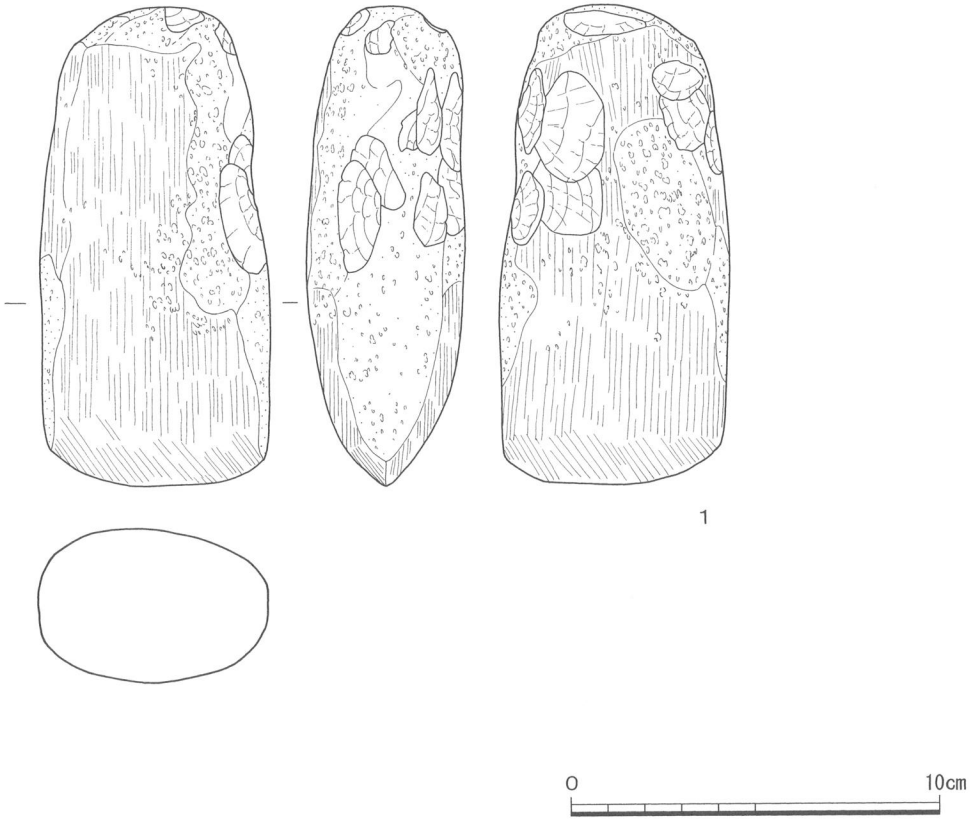
41-1はSF14、2はSF19、3～5はSF24出土である。

41-1・2は各々３枚が重なり、分離不可能である。1は１枚目と３枚目の表面を外側にしている。１枚目は紹聖元宝で３枚目は天禧通宝と読める。２枚目については不明である。

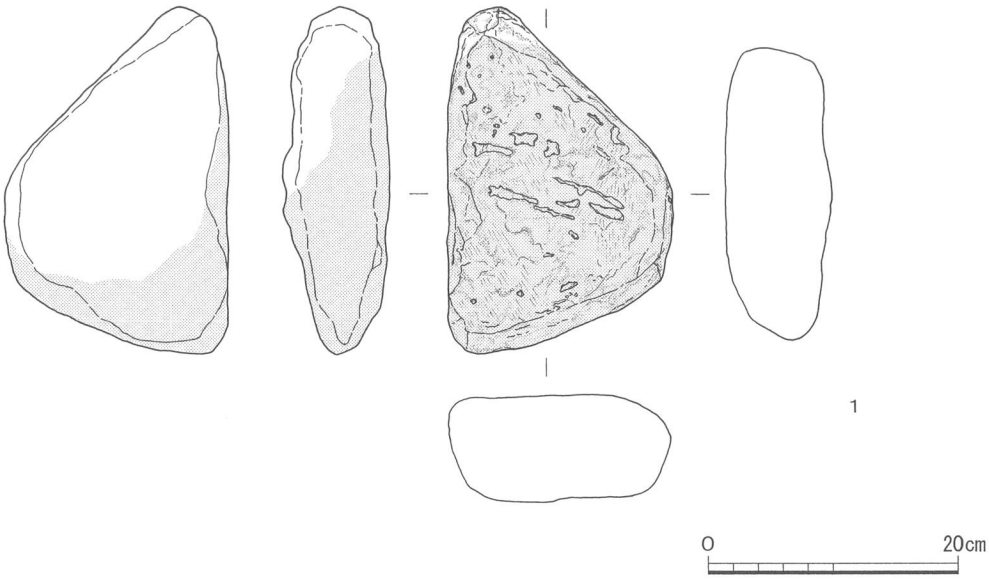
41-2は１枚目を表に３枚目を裏面にする。１枚目は天禧通宝と判読できる。X線観察によると２枚目もしくは３枚目が皇宋通宝と推定される。また被熱の可能性がある。

41-3～5は４枚重なっていたが3・4は分離できた。3は熙寧元宝である。4は元豊通宝で片面には被熱の痕跡が残る。５は２枚が分離できなかった。表面を内側にしており、被熱の可能性が指摘される。

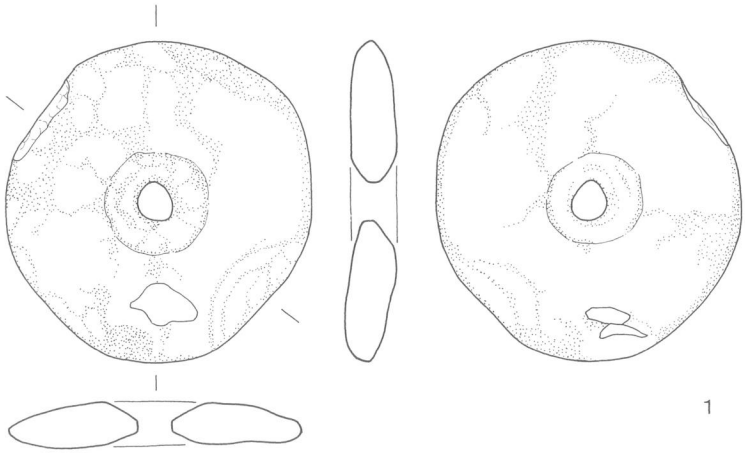
判読可能な銭貨はいずれも北宋銭である。

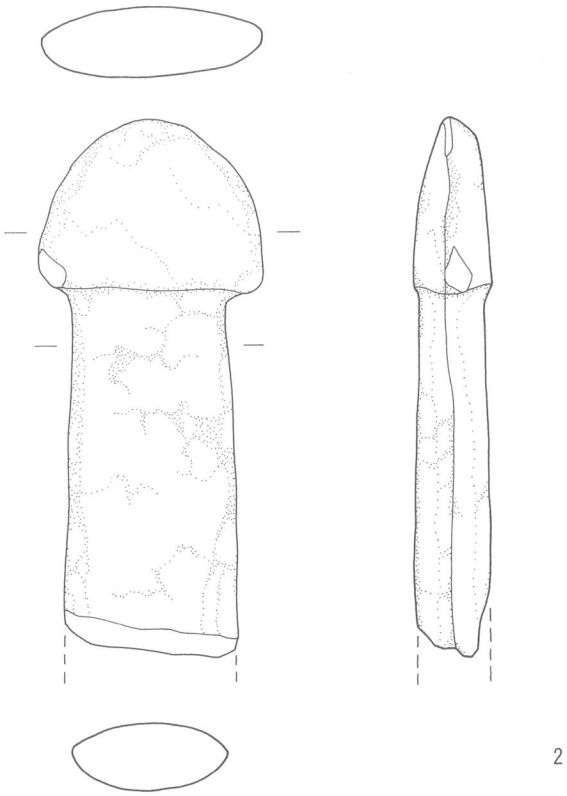


第37図　石器実測図４（太形蛤刃石斧）

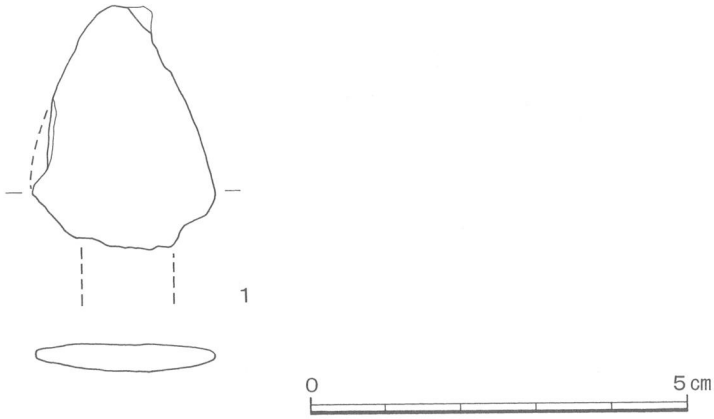


第38図　石器実測図５（台石）

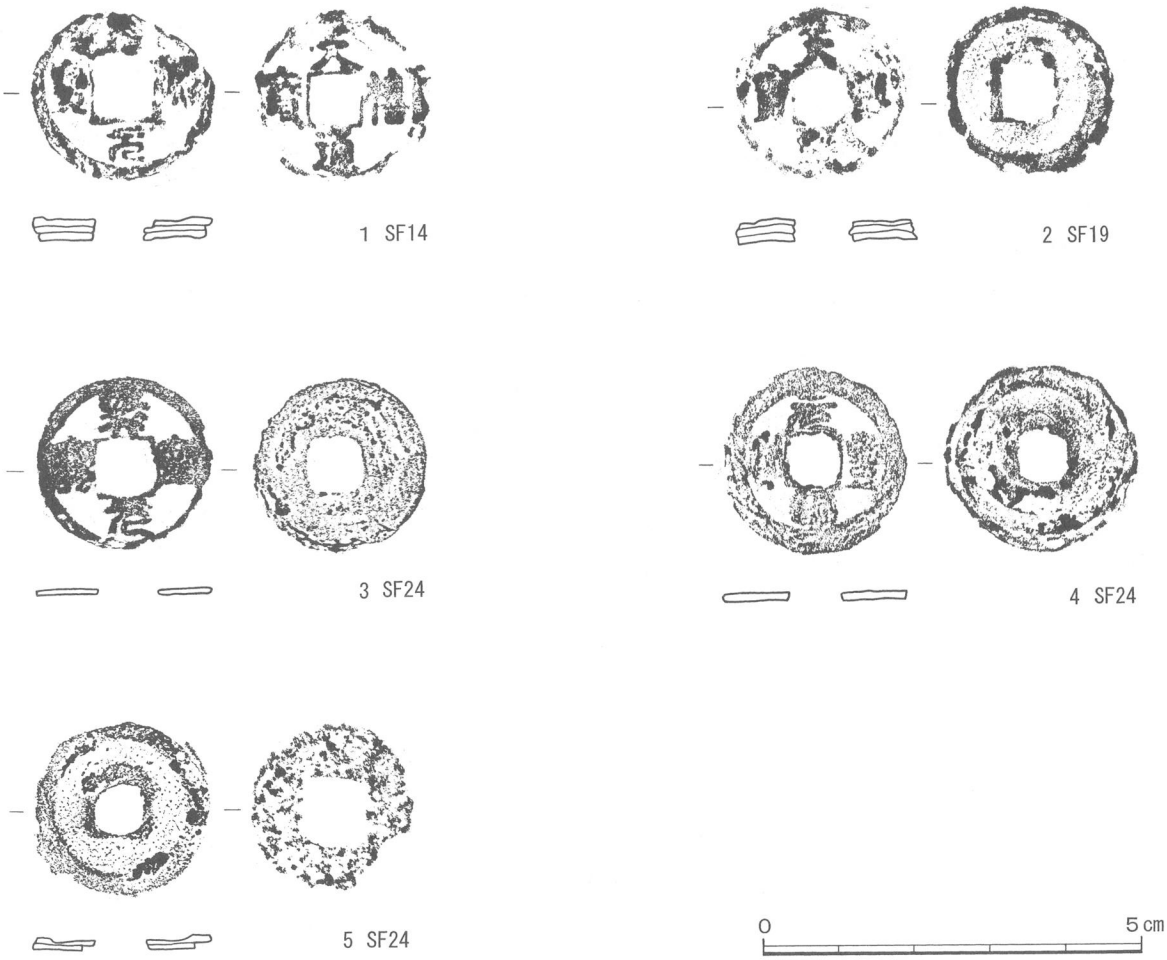




第39図　石器・石製品実測図（環状石斧・石剣）



第40図　鉄鏃実測図



第41図　銭貨実測図

第４節　今城の遺構と遺物

今城の確認調査におけるトレンチの配置図を第42図に示す。

（１）遺構（第43図・図版23）

１トレンチの西側より、深さ約40㎝、直径約75㎝のほぼ円形の土坑が検出された。覆土は炭がわずかに混入した褐色粘質土である。

比較的大きな破片の弥生時代の壺（44-1）が出土している。肩から下の部分であるが残存率が少なく、出土状態からも土器棺とするには疑問が残る。壺以外には遺物は無く、弥生時代中期の土坑と考えられるが、土器の摩耗状態からは他の時代の遺構に弥生土器のみが混入した可能性も否定できない。

調査範囲は果樹園の改植により基盤層まで削って平坦面を作っている。検出された遺構は丘陵縁辺部であったために削平を免れたものと考えられる。

（２）遺物（第44図・図版23）

１トレンチの土坑より出土した弥生土器（44-1）は、壺の底部と胴部の一部である。肩部に並行するクランク状の沈線が連続する。その直下にハケ目がわずかに見られるが、摩滅が激しいため他の調整等は観察できない。器壁は胴部中央付近よりも肩部の方が厚いが、肩部においても厚さにばらつきがみられる。

２トレンチからは中世陶器（44-2）が出土している。体部上半が残存する碗で、やや直立気味の口縁部を有し、内外面全体に緑色釉を施す。時期は15世紀第３四半期に属すものと考えられる。

その他、図化できなかったが、条痕を持つ土器・須恵器・かわらけ等の小破片が出土している。

（３）小結

１．出土弥生土器について

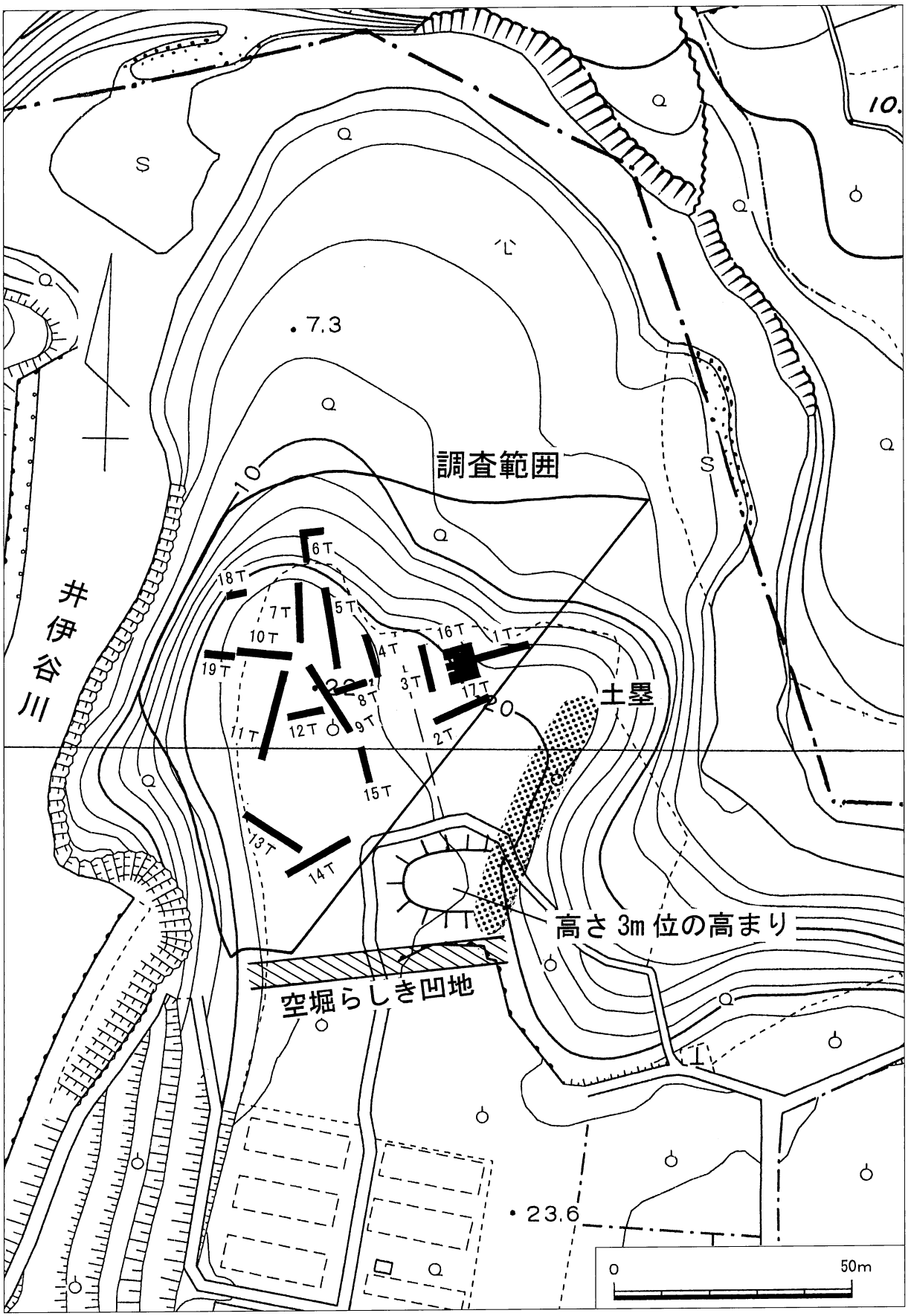
沈線文のみが施された弥生土器の出土地としては、掛川市・袋井市山下遺跡、磐田市野際遺跡があり、いずれも弥生中期後葉と推定されている（佐藤1996）。今城土坑出土土器（44-1）は比較資料となるデータが少なく、胎土や文様だけで断言しがたいが、弥生時代中期後半の嶺田式に属すると考えられる。

弥生中期の遺跡としては都田川流域の川久保遺跡・茂塚遺跡・岡の平遺跡・井通遺跡等があるが、いずれも沖積平野の自然堤防上ないし、平野部に接した台地縁辺部の低位段丘上に立地している。今城のような丘陵上にある弥生中期の遺跡は、細江町猿平遺跡、三方原台地縁辺部上にある浜松市沢上Ⅵ遺跡等で極端に少ないが、沢上Ⅵ遺跡で検出された土器棺墓が、今城の土坑の性格を示唆しており、そのまま今城地区の弥生時代における立地環境を特徴づけている。

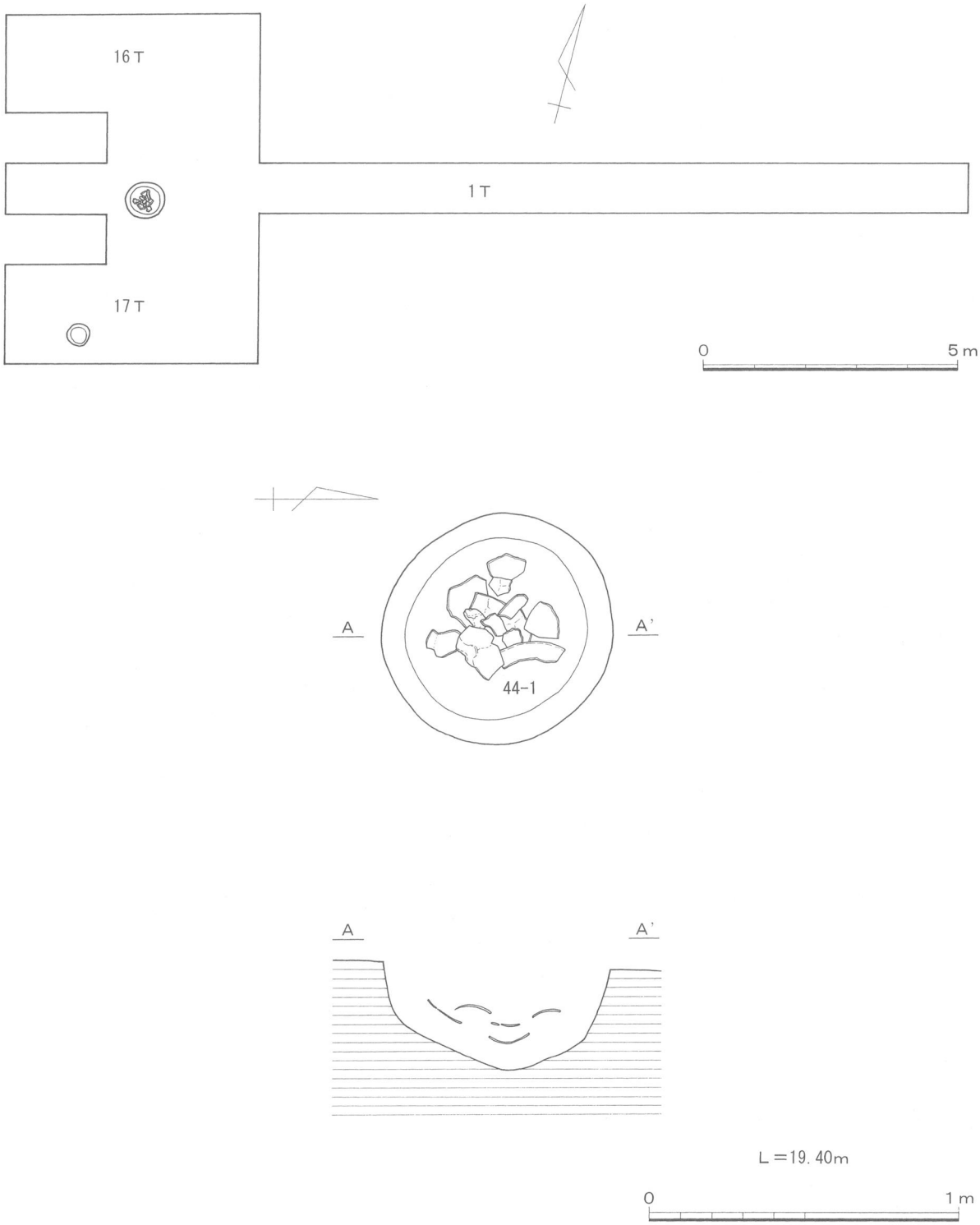
いずれにせよ、生活（水田耕作）に不適と思われる丘陵上に位置する弥生中期の遺跡の資料が、今後増えることに期待するところが大きい。

２．今城地区の中世城砦について

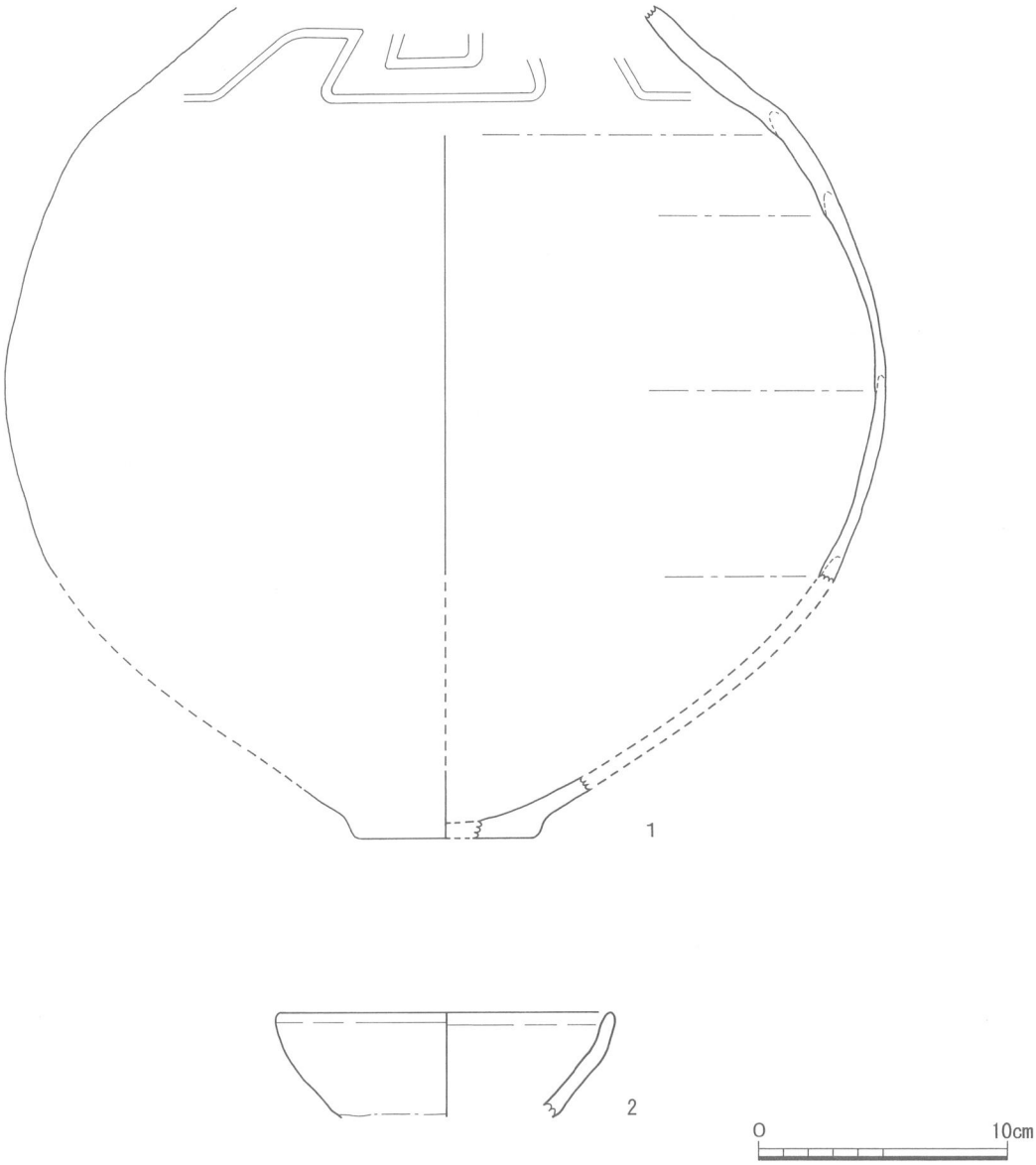
今城は中世の城砦として知られているが、今回の調査では砦に関わる遺構は検出されなかった。土地の所有者から聞いた、かつて存在した城関連の遺構と思われるものを第42図に盛り込んだが、それらは調査区外である。ただしそれらの遺構は完全に失われており、現状からは確認できなかった。



第42図　今城 トレンチ配置図
（細江町都市計画基本図を複写して加筆。聞き取りによる城関連遺構を図示。）



第43図　今城　土坑実測図



第44図　今城　遺物実測図

引佐・細江町所在の井伊氏関係の中世城砦は、自然地形を利用した点が多く、地勢険しく難攻守易の地である点が特色である。三岳城が大規模な遺構を留める以外は目立ったものがない。それらの一つと考えられる今城は井伊氏の本拠地である井伊谷盆地の南の出口に位置する。南からその本拠（三岳城・井伊谷城）を目指すには、今城のある丘陵と井伊谷川対岸の丘陵との間の狭隘な所を通過しなければならない。今城はこの狭隘な箇所を一望にできる地点である。南北朝期であること、三岳城・井伊谷城といった本城に付随した砦（支城）の一つであるということなどから、大規模に地形が変えられたり、遺物が多量に存在するとは考えられない。今回の調査範囲では、果樹園の改植等により遺構のほとんどが失われてしまっており、南北朝期の遺構・遺物が検出されなかったからといって、城砦の存在を直ちに否定する事はできないであろう。

表3　出土遺物観察表1（土器:縄文時代～奈良時代）

（　　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	色調	胎土	焼成	時期	部位	残存%	備考
25-1	11	壺	SZ01		(47.5)	(43.4)	7.0	茶褐	密	良好	縄文時代晩期～弥生時代前期	胴部～底部	25	馬見塚式末～樫王式　図上復原
25-2	11	壺	SZ02		(45.1)	(58.2)	6.0	橙	密	良好	縄文時代晩期～弥生時代前期	胴部～底部	30	馬見塚式末～樫王式　図上復原
	12-a	深鉢	SD05					にぶい黄橙	密	良好	縄文時代後期～晩期	口縁部	5	
26-1	12	深鉢	F2		(3.15)			にぶい黄橙	密	良好	縄文時代中期?	口縁部	5	五領ヶ台式
26-2	12	深鉢	F2		(2.1)			にぶい黄橙	密	良好	縄文時代中期?	口縁部	5	五領ヶ台式
26-3	12	深鉢	G2		(6.8)			橙	密	良好	縄文時代晩期～弥生時代前期	口縁部	10	樫王式～水神平式
26-4	12	深鉢	G3		(5.7)			橙	密	良好	縄文時代晩期～弥生時代前期	口縁部	5	樫王式～水神平式
26-5	12	壺	E5		(5.9)			浅黄	密	良好	弥生時代前期～中期前半	肩部	5	
26-6	12	壺	F2		(4.5)			灰黄	密	良好	弥生時代前期	口縁部	5	水神平式
26-7	12	壺	F3		(3.0)			にぶい橙	密	良好	弥生時代前期	口縁部	5	水神平式
26-8	12	鉢	F1	(13.2)	(3.2)			明赤褐	密	良好	弥生時代前期末	口縁部	5	
26-9	12	鉢	F2	(11.2)	(2.9)			橙	密	良好	弥生時代前期末	口縁部	5	
26-10	12	壺	F2		(3.2)			赤褐	密	良好	弥生時代中期	口縁部	5	
26-11	12	壺	F2		(2.6)			にぶい黄橙	密	良好	弥生時代中期(前期～中期前半)	肩部	5	
26-12	12	壺	F4		(2.75)			橙	密	良好	弥生時代中期(中期中葉?)	口縁部	5	内面条痕
26-13	12	壺	G3		(3.3)			にぶい橙	密	良好	弥生時代中期(中期前半)	口縁部	5	
26-14	12	甕	F4		(2.6)			浅黄	密	良好	弥生時代中期(前期末～中期)	口縁部	5	
26-15		壺	F3	(10.0)	(5.0)			褐	密	良好	弥生時代後期	口縁部	10	菊川式
26-16	12	高坏	Z10		(7.8)		(8.9)	橙	密	良好	弥生時代後期	脚部	40	菊川式
26-17	12	台付甕	H2		(7.1)		8.3	橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期	台部	80	
26-18		壺・甕?	F2		(3.7)		(6.4)	にぶい橙	密	良好	弥生時代中期	底部	20	
26-19		壺・甕?	E4		(1.5)		6.3	明黄褐	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	100	
26-20	12	台付甕	F3		(6.0)		(9.0)	橙	密	良好	弥生時代中期?	台部	80	
26-21		壺・甕?	G4		(3.2)		(5.0)	にぶい橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	25	
26-22		壺・甕?	G3		(4.0)		(11.3)	赤橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	5	
26-23		壺・甕?	E3		(3.6)		(6.0)	明赤褐	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	25	
26-24		壺・甕?	C8		(3.3)		(8.7)	にぶい橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	50	
26-25		壺・甕?	H2		(2.1)		(7.3)	褐	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	40	
26-26	12	壺・甕?	H2		(3.6)		7.6	にぶい橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	100	
26-27		壺・甕?	G1		(2.8)		8.0	橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	100	
26-28		壺・甕?	SF26		(3.6)		(5.2)	にぶい橙	密	良好	弥生時代後期～古墳時代前期?	底部	20	
27-1	13	坏身	SB02	9.0	3.7		2.8	浅黄橙	密	良好	7世紀中頃		60	
27-2	13	坏身	SB04	10.8	3.6		(4.0)	橙	密	良好	7世紀中頃		50	摩滅により調整不明
27-3	13	坏身	SF05	14.1	3.3		(4.0)	黄橙	密	良好	7・8世紀		40	
27-4	13	長頸壺	SB04		(17.8)	(24.0)	(8.0)	橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	胴部	40	
27-5		長頸壺	H2		(10.7)	(20.2)		にぶい橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	胴部	20	
27-6		長胴甕	F1	(19.8)	(4.3)			橙	密	良好	7世紀	口縁部	5	摩滅により調整不明
27-7	13	小型甕	SB02	14.7	(8.4)	14.1		明赤褐	密	良好	8世紀	口縁部	70	摩滅により調整不明
27-8		長胴甕	G1	(24.1)	(3.2)			橙	密	良好	7・8世紀	口縁部	10	
27-9		長胴甕	G1	(21.0)	(3.0)			黄橙	密	良好	7・8世紀	口縁部	10	
27-10		小型甕	SF05	(15.4)	(7.9)			淡橙	密	良好	8世紀	口縁部	30	
27-11	13	小型甕	SB02	(13.5)	(4.9)			にぶい褐	密	良好	8世紀	口縁部	25	摩滅により調整不明
27-12		長胴甕	G1	(31.4)	(1.9)			にぶい橙	密	良好	8世紀	口縁部	5	
27-13		長胴甕	F1	(27.4)	(1.9)			明褐	密	良好	8世紀	口縁部	10	
28-1		長胴甕	SF12		(24.3)	(20.2)	(6.0)	にぶい黄橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	胴部	20	全体に二次焼成を受けている 摩滅により調整不明　図上復原
29-1	13	小型甕	SB03		(9.0)	(19.2)		にぶい橙	密	良好	8世紀	胴部	15	
29-2		壺	F2		(2.1)		(5.8)	明褐	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	底部	50	
29-3		壺・甕?	SB04		(2.5)		(8.0)	黒褐	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	底部	25	
29-4	13	甕?	SB02		(5.8)		(5.0)	明褐	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	底部	25	
29-5	13	台付甕	F3		(8.5)		(13.1)	明赤褐	密	良好	8世紀前半	台部	30	摩滅により調整不明
29-6		台付甕	G1		(4.7)			にぶい黄橙	密	良好	8世紀前半	台部	20	
29-7		高坏	F2		(2.0)			橙	密	良好	6世紀	坏部	10	摩滅により調整不明

表4　出土遺物観察表2（土器:古墳時代～奈良時代）

（　　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	色調	胎土	焼成	時期	部位	残存(%)	備考
29-8	13	台付甕	H2		(9.0)		(10.2)	浅黄橙	密	良好	7･8世紀	台部	40	
29-9	14	手捏土器	F2		(3.2)		1.0	橙	密	良好	8世紀	胴部	60	
29-10	14	手捏土器	F1		(3.0)		1.0	明赤褐	密	良好	8世紀	胴部	90	
29-11	14	手捏土器	F1		(3.1)		1.5	にぶい橙	密	良好	8世紀		90	口縁部穿孔
29-12	14	手捏土器	F2	3.15	3.3		(2.4)	黄橙	密	良好	8世紀	口縁～胴部	70	
29-13	14	手捏土器	SF10	3.9	3.1		3.5	にぶい橙	密	良好	8世紀		90	摩滅により調整不明
29-14	14	手捏土器	F2	(6.0)	2.6		2.5	橙	密	良好	8世紀		50	摩滅により調整不明
29-15	14	手捏土器	F1		(1.8)		(4.0)	橙	密	良好	8世紀	底部	25	
29-16	14	手捏土器	G3		(1.5)		2.5	浅黄橙	密	良好	8世紀	底部	100	
29-17	14	手捏土器	F3		(3.6)		(3.6)	橙	密	良好	8世紀	底部	50	
29-18		甑	SB02	(16.0)	(5.8)			にぶい橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	口縁～胴部	10	摩滅により調整不明
29-19	14	甑	SB01		(9.5)			明赤褐	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	胴部	20	
29-20	14	甑	H4		(4.0)			にぶい黄橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	把手	100	
29-21	14	甑	SB01		(4.4)			橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	把手	100	
29-22	14	甑	SF05		(4.0)			橙	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	把手	100	

表5　出土遺物観察表3（土器:古墳時代～奈良時代）

（　　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	つまみ	色調	胎土	焼成	時期	部位	残存(%)	回転	備考
30-1	15	坏蓋	SB01	(9.4)	(3.7)				灰	密	良好	7世紀前半～中頃		80	反時計回り	
30-2	15	坏蓋	SB01	9.1	3.5				灰	密	良好	7世紀前半～中頃		80	反時計回り	
30-3	15	坏蓋	SB01	(9.0)	3.4				黄灰	密	良好	7世紀前半～中頃		60	反時計回り	
30-4	15	坏身(碗形)	SB02	(10.9)	(3.8)		(6.0)		黄灰	密	良好	7世紀後半～8世紀中頃	口縁～底部	20		
30-5		坏身(碗形)	SB02		(2.8)		(7.2)		灰黄	密	良好	7世紀後半～8世紀中頃	底部	60		
30-6		壺	SB02	(9.9)	(2.6)				にぶい黄橙	密	良好	7世紀?	口縁部	15		内外面に自然釉付着
30-7		摘蓋	F1		(2.9)			(2.9)	灰黄	密	良好	8世紀中頃	蓋摘み部	20	時計回り	
30-8		摘蓋	F1		(1.6)			3.3	黄灰	密	良好	8世紀中頃	蓋摘み部	100		
30-9		摘蓋	F2		(1.9)			2.8	黄灰	密	良好	8世紀中頃	蓋摘み部	100		
30-10		摘蓋	F2		(2.9)			2.8	灰白	密	良好	8世紀中頃	蓋摘み部	100	反時計回り	
30-11	15	摘蓋	F1	16.7	3.6			3.3	灰白	密	不良	8世紀中頃		70		
30-12	15	摘蓋	F2･G1･F1	(16.5)	3.8			3.2	黄灰	密	良好	8世紀中頃		30	時計回り	
30-13	15	摘蓋	G2	(16.6)	4.2			3.0	灰黄	密	良好	8世紀中頃		20	反時計回り	
30-14		摘蓋	F1	(13.8)	(2.2)				黄灰	密	良好	8世紀中頃	口縁部	5		外面に自然釉付着
30-15		摘蓋	F1･G1	(16.0)	(1.95)				黄灰	密	良好	8世紀中頃	口縁部	20		
30-16		摘蓋	F2	(16.8)	(2.2)				灰黄	密	良好	8世紀中頃	口縁部	10		
30-17		摘蓋	F2	(16.4)	(2.5)				灰白	密	良好	8世紀中頃	口縁部	10		
30-18		摘蓋	F2	(15.8)	(1.6)				灰	密	良好	8世紀中頃	口縁部	10		
30-19		摘蓋	F2	(15.6)	(2.4)				黄灰	密	良好	8世紀中頃	口縁部	25		
30-20		坏身(碗形)	F1		(3.0)		(5.4)		内面→黄灰 外面→灰黄	密	良好	7世紀後半～8世紀中頃	底部	50		
30-21		坏身(碗形)	G1		(2.9)		(5.0)		灰白	密	良好	7世紀後半～8世紀中頃	底部	25		
30-22		坏身(碗形)	F2		(2.2)		(5.6)		黄灰	密	良好	7世紀後半～8世紀中頃	底部	30		
30-23		皿	G1	(16.0)	(2.8)		(7.2)		灰白	密	良好	8世紀中頃	口縁～底部	20	反時計回り	
30-24		坏身(箱坏)	G1		(2.0)		(9.4)		灰白	密	良好	8世紀中頃?	底部	15	時計回り	
30-25		有台坏身?	F2	(14.6)	(3.6)				黄灰	密	良好	8世紀中頃	口縁部	10		
30-26		有台坏身?	F2･F1	(14.7)	(3.5)				灰黄	密	良好	8世紀中頃	口縁部	20		
30-27		有台坏身?	F1	(14.4)	(3.6)				灰黄	密	良好	8世紀中頃	口縁部	15		
30-28		有台坏身	G1	(13.8)	3.8		(9.8)		灰白	密	良好	8世紀中頃		10		
30-29		有台坏身	F1	(14.0)	3.8		(9.8)		灰白	密	良好	8世紀中頃		10		
30-30		有台坏身	G1	(14.4)	4.4		(11.0)		灰白	密	良好	8世紀中頃		10		
31-1	15	有台坏身	G1･G2	(13.9)	(4.1)		(9.9)		灰黄	密	良好	8世紀中頃		40		
31-2	15	有台坏身	F2	(14.3)	(4.3)		(10.5)		灰白	密	良好	8世紀中頃		60		
31-3	15	有台坏身	G1	(14.6)	(4.4)		(10.2)		灰黄	密	良好	8世紀中頃		40		

表6　出土遺物観察表4（土器:古墳時代～奈良時代）

（　　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	つまみ	色調	胎土	焼成	時期	部位	残存(%)	回転	備考
31-4		有台坏身	F3		(2.5)		(10.5)		灰	密	良好	8世紀中頃	底部	50		
31-5		有台坏身	F2		(3.1)		(9.9)		灰	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-6	15	有台坏身	G1		(2.6)		(9.8)		灰白	密	不良	8世紀中頃	底部	50		
31-7		有台坏身	F3		(2.2)		(8.4)		黄灰	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-8		有台坏身	F2		(1.15)		(9.0)		灰白	密	良好	8世紀中頃	底部	10		
31-9		有台坏身	G2		(2.1)		(9.0)		黄灰	密	良好	8世紀中頃	底部	10		
31-10		有台坏身	F2		(1.25)		(9.2)		灰白	密	良好	8世紀中頃	底部	10		
31-11		有台坏身	F2		(1.5)		(10.0)		灰白	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-12		有台坏身	F2		(1.75)		(10.0)		灰黄	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-13		有台坏身	G1		(1.6)		(10.3)		灰	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-14		有台坏身	G1		(1.5)		(10.2)		灰黄	密	良好	8世紀中頃	底部	30		
31-15		有台坏身	F2		(2.3)		(11.0)		灰黄	密	良好	8世紀中頃	底部	20		
31-16		有台坏身	F2		(1.9)		(10.0)		灰白	密	不良	8世紀中頃	底部	15		
31-17	16	大型瓶	F2・G2	(11.8)	(5.4)				灰黄	密	良好	7世紀	口縁部	90		内面に自然釉付着
31-18		甕	F1・G1	(22.8)	(7.8)				灰白	密	良好	7・8世紀	口縁部	25		外面に自然釉付着
31-19		甕	G3・G1	(20.4)	(7.6)				黄灰	密	良好	7・8世紀	口縁部	5		
31-20	16	甕	G1	(22.6)	(7.2)				黄灰	密	良好	7・8世紀	口縁部	20		
31-21	16	平瓶	F2・G2	(7.2)	(6.4)				灰黄	密	良好	古墳時代後期～奈良時代	口縁部	40		内外面に自然釉付着
31-22	16	長頸壺	F1		(11.0)				灰黄	密	良好	7世紀後半～8世紀前半	頸部	40		内外面に自然釉付着
31-23	16	壺	G1		(7.8)		(7.3)		灰黄	密	良好	7世紀後半～8世紀前半	底部	100		
32-1	16	無台瓹	F1		(5.85)	(9.1)	(3.0)		灰白	密	良好	8世紀中頃	胴部	40	反時計回り	内外面に自然釉付着
32-2	16	高坏	F1		(7.0)				灰黄	密	良好	7・8世紀	脚部	60		脚裾部欠損
32-3	16	鉢	G1	(14.2)	(11.8)		(5.0)		黄灰	密	良好	7世紀後半～8世紀前半		50	反時計回り	
32-4	16	有台瓹	G1		(10.4)	9.5	5.4		浅黄	密	良好	8世紀中頃	胴部	90	反時計回り	内外面に自然釉付着

表7　出土遺物観察表5（土器・土製品:中・近世）

（　　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	色調	胎土	焼成	時期	産地	部位	残存(%)	備考
33-1	17	山茶碗	E7	(16.4)	(3.5)			灰白	密	良好	12世紀末～13世紀初頭	渥美・湖西	口縁部	10	
33-2	17	山茶碗	SD06		(2.0)		(7.0)	にぶい黄橙	密	良好	12世紀末～13世紀初頭	渥美・湖西	底部	100	糸切痕
33-3		青磁碗	H2	(12.6)	(2.2)			オリーブ	密	良好	14世紀		口縁部	5	龍泉窯系
33-4	17	山茶碗	C8		(2.8)		7.7	浅黄	密	良好	12世紀末～13世紀初頭	渥美・湖西	底部	100	静止糸切痕
33-5	17	山茶碗	E7		(2.0)		(7.8)	灰白	密	良好	12世紀末～13世紀初頭	渥美・湖西	底部	50	高台に籾痕
33-6	17	四耳壺?	E4		(6.1)		(9.7)	にぶい黄	密	良好	14世紀中頃(古瀬戸中期)		底部	25	高台に線状圧痕
33-7		かわらけ	SF19	(10.0)	2.0		(7.0)	浅黄橙	密	良好	15世紀後半			25	摩滅により調整不明
33-8		かわらけ	C7	(9.8)	2.0			浅黄橙	密	良好	15世紀後半			5	摩滅により調整不明
33-9		かわらけ	F2	(12.0)	(2.4)		(7.0)	にぶい橙	密	良好	15世紀後半			25	摩滅により調整不明
33-10		かわらけ	F2	(9.3)	(1.8)			浅黄橙	密	良好	15世紀後半			25	
33-11	17	かわらけ	C7	(8.8)	2.35		5.0	灰白	密	良好	15世紀後半			50	
33-12	17	内耳鍋	C9	(32.4)	(6.0)			浅黄橙	密	良好	16世紀後半以降		口縁～胴部	15	摩滅により調整不明
33-13	17	天目茶碗	D9	(11.3)	(7.3)			黒	密	良好	17世紀前半		口縁部	10	鉄釉
33-14	17	皿	C9	(13.0)	(3.0)		(7.6)	灰白	密	良好	17世紀中～後半	瀬戸・美濃		25	灰・長石の御深井釉
33-15	17	皿	G4		(1.5)		(6.0)	灰白	密	良好	18世紀前半	瀬戸・美濃	底部	25	見込みにコンニャク版(花紋)
33-16	17	丸碗	D8		(1.75)		(4.2)	灰白～黒褐	密	良好	18世紀	瀬戸・美濃	底部	50	外面鉄釉　内面長石釉
33-17	17	丸碗	C7		(1.6)		5.1	暗オリーブ褐	密	良好	18世紀前半	瀬戸・美濃	底部	100	鉄釉
33-18	17	丸碗	D8		(2.6)		(4.4)	灰白～黒褐	密	良好	18世紀	瀬戸・美濃	底部	40	外面鉄釉　内面灰釉
33-19		擂鉢	G5	(21.2)	(5.8)			黄褐	密	良好	18世紀後半	瀬戸・美濃	口縁部	10	サビ釉
33-20		擂鉢	D8		(2.4)		(14.0)	暗赤褐	密	良好	18世紀	瀬戸・美濃	底部	10	サビ釉
33-21		甕	C9	(19.3)	(7.0)			にぶい赤褐	密	良好	江戸時代	常滑	口縁部	10	外面鉄釉
33-22		甕	E4		(5.5)		(15.8)	にぶい黄橙	密	良好	江戸時代	常滑	底部	25	露胎
33-23		半胴甕	E4		(1.9)		(12.7)	暗赤褐	密	良好	18世紀	瀬戸・美濃	底部	25	内面鉄釉
33-24		土錘	G3	長さ(3.2)	最大径1.0 重量3.0g		内径0.3	明赤褐	密	良好	不明(近世以降か?)			80	

表8　出土遺物観察表6（石器・石製品）

（　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	形態	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
34-1	18	石鏃	SP15	凹基無茎?	チャート	(1.40)	1.11	0.32	0.45	基部欠損
34-2	18	石鏃	SP17	凹基有茎	チャート	1.60	1.34	0.26	0.47	
34-3	18	石鏃	E3	不明	黒曜石	(1.00)	(0.85)	(0.24)	0.16	基部欠損
34-4	18	石鏃	E4	凹基無茎	チャート	1.40	(1.30)	0.38	0.50	基部欠損
34-5	18	石鏃	F3	凹基有茎	黒曜石	1.85	0.96	0.35	0.47	
34-6	18	石鏃	G2	凸基有茎	黒曜石	1.90	1.07	0.49	0.68	
34-7	18	石鏃	G3	凹基無茎	黒曜石	1.30	0.95	0.22	0.18	基部欠損
34-8	18	石鏃	H2	凹基無茎	チャート	1.56	1.29	0.41	0.59	
34-9	18	石鏃	H2	平基有茎	チャート	1.64	1.34	0.28	0.51	基部欠損
34-10	18	石鏃	H2(SF10)	凹基無茎	下呂石	1.70	1.42	0.38	0.55	基部欠損
34-11	18	石鏃	表採	凹基無茎	チャート	(1.38)	1.55	0.43	0.76	先端欠損
34-12	18	石鏃	表採	凹基無茎	チャート	(1.25)	1.18	0.36	0.36	基部欠損
34-13	18	石鏃	表採	凹基無茎	チャート	1.80	1.35	0.40	0.59	
34-14	18	未成品	SF12	凹基無茎	黒曜石	1.35	1.58	0.48	0.86	
34-15	18	未成品	E4	不明	黒曜石	2.00	0.90	0.38	0.48	
34-16	18	未成品	E4	凸基有茎	黒曜石	2.28	1.00	0.62	1.34	
34-17	18	未成品	E5	凹基無茎	黒曜石	1.39	1.23	0.38	0.65	
34-18	18	未成品	F3	凹基無茎	黒曜石	1.60	1.50	0.55	1.16	
	18-b	未成品	SF02		チャート	2.22	1.56	0.67	1.92	
	18-c	未成品	SF03		チャート	2.60	1.80	0.86	3.51	
	18-d	未成品	SP19		黒曜石	1.09	0.97	0.49	0.37	
	18-e	未成品	SP34		チャート	2.89	1.25	0.52	2.54	
	18-f	未成品	E4		黒曜石	2.33	2.11	1.22	4.72	
	18-g	未成品	E4		チャート	3.02	1.84	0.66	3.63	
	18-h	未成品	E4		チャート	3.28	2.38	0.87	6.52	
	18-i	未成品	E4		黒曜石	1.98	1.43	0.58	1.56	
	18-j	未成品	F2		黒曜石	2.20	1.90	1.05	3.73	
	18-k	未成品	F2		黒曜石	2.91	2.08	0.67	4.31	
	18-l	未成品	F3		黒曜石	1.83	1.66	0.43	0.95	
	18-m	未成品	G3		黒曜石	1.15	1.70	0.45	1.34	
	18-n	未成品	G3		チャート	2.72	1.88	0.70	3.60	
	18-o	未成品	G3		黒曜石	1.61	2.24	0.45	0.71	
	18-p	未成品	G3		チャート	2.27	1.21	0.59	2.02	
35-1	19	打製石斧	F2		ハンレイ岩	9.4	3.9	1.7	80	
35-2	19	打製石斧	F1		緑色片岩	12.2	5.4	1.8	161	
35-3	19	打製石斧	G3		緑色片岩	13.6	4.5	1.2	82	
35-4	19	打製石斧	F4		片玄武岩	13.7	5.2	2.8	318	
36-1	19	磨製石斧	G3		片玄武岩	11.8	4.3	2.7	229	
36-2	19	磨製石斧	I2		片玄武岩	11.3	3.7	3.2	198	
36-3	19	磨製石斧	G1		片玄武岩	10.1	3.7	1.8	105	
36-4	19	磨製石斧	E4		緑色片岩	10.7	5.5	1.8	183	
37-1	20	太型蛤刃石斧	H2		片玄武岩	13.0	6.2	4.2	609	
38-1	20	台石	SB01		石灰岩	27.8	17.8	8.5	5700	被熱
39-1	21	環状石斧	G2		緑色片岩	直径8.1	円孔径1.0	1.2	134	
39-2	21	石剣	F2		緑色片岩	14.3	頭部最大幅5.9 基部最大幅4.5	2.0	229	
	21-q	不明	C8		凝灰質砂岩	10.7	4.0	1.8	99	加工痕のある礫

表9　出土遺物観察表7（金属製品）

（　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
40-1	22	鉄鏃	F3	3.1	2.4	0.4	5.6	平根式三角形式

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値 銭径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	銭名	国名	初鋳年	書体	備考
41-1	22	銭貨	SF14	2.45	0.60	0.35	3.79	紹聖元宝	北宋	1094	篆書	3枚分離不可
								不明				
								天禧通宝	北宋	1017		
41-2	22	銭貨	SF19	2.27	0.70	0.37	4.95	天禧通宝	北宋	1017		3枚分離不可　模鋳銭　被熱の可能性
								不明				
								皇宋通宝	北宋	1039	真書	
41-3				2.33	0.70	0.12	1.59	熙寧元宝	北宋	1068	篆書	
41-4	22	銭貨	SF24	2.50	0.60	0.15	3.28	元豊通宝	北宋	1078	篆書	裏面被熱
41-5				2.54	0.60	0.22	3.40	不明				2枚分離不可　両面被熱
								不明				

表10　出土遺物観察表8（下坂田地区）

（　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	色調	胎土	焼成	時期	産地	部位	残存(%)	備考
4-1		内耳鍋		(22.8)	(4.3)			浅黄橙	密	良好	15世紀後半～16世紀初頭		口縁部	5	
4-2		かわらけ		8.7	2.3			浅黄橙	密	良好	15世紀後半～16世紀初頭			90	
4-3		かわらけ		(7.4)	1.9			浅黄橙	密	良好	15世紀後半～16世紀初頭			30	

表11　出土遺物観察表9（今城）

（　）は推定値・残存高

図版番号	写真図版番号	器種	出土遺構・位置	計測値(cm) 口径	高さ	胴部最大径	底径	色調	胎土	焼成	時期	産地	部位	残存(%)	備考
44-1	23	壺	土坑			(35.2)	(6.8)	浅黄	密	良好	弥生時代		胴部	20	嶺田式？図上復原
44-2		碗		(13.4)	(4.2)			オリーブ黄	密	良好	15世紀第3四半期	志戸呂(古瀬戸Ⅲ)	口縁部	15	

第Ⅳ章　総括

第１節　前岡遺跡の変遷

前岡遺跡の確実な成立は縄文時代晩期～弥生時代の変換期である。縄文時代中期（五領ヶ台式）と考えられる小破片が２点出土しており、縄文時代中期までさかのぼる可能性はあるが、ここでは内容がある程度判明している縄文時代晩期以降の遺跡の様相を整理してみる。

・縄文時代晩期～弥生時代

この時期と推定される遺構は土器棺墓２基、土坑６基、溝１条、ピット２基を検出した。遺構からは土器棺以外は小破片の土器しか出土せず、詳細な時期の決定は困難であるが、おおむね以下のようである。縄文時代晩期の土坑１基、縄文時代晩期から弥生時代への移行期の土器棺墓２基。弥生時代前期頃の土坑２基、溝１条、縄文晩期～弥生中期の土坑１基、ピット２基、弥生時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される土坑各１基である。

土器棺２点は周辺での類例に乏しく比較資料が少ないが、当地域における、馬見塚式末～樫王式期に該当する時期の様相を示すものであろう。

石器は石鏃13点、石鏃の未成品と思われるもの20点、黒曜石・チャートの剥片約150点、打製石斧４点、磨製石斧４点、太型蛤刃石斧１点、環状石斧１点、石剣１点が出土している。これらの石器類のうち太型蛤刃石斧１点は弥生時代中期のものであろう。他の石器は縄文時代中・後期の可能性も否定できないが、縄文時代晩期から弥生時代への移行期に属すると考えられる。調査範囲は遺跡の一部分であるが、構成比としては集落内での石器所持の様相を表しているのではないかと考えられる。また、未成品および黒曜石・チャートの破片が出土していることから、遺跡内において石鏃の製作を行っていたことがわかる。

前岡遺跡の北約１㎞に位置する正楽寺遺跡出土の黒曜石は大半が長野県霧ヶ峰産であるが、中に神津島産が１点含まれる（引佐町1992）。前岡遺跡では黒曜石の分析をする余裕が無かったが、産地の明らかなものとして１点下呂石の石鏃が出土している。下呂石の破片は出土しておらず、下呂石は石鏃という製品で、黒曜石・チャートは原石または石核の状態で搬入され、集落内で石鏃を生産していたと考えられる。

引佐町・井伊谷地域では晩期以前の縄文時代の遺跡がほとんど知られていないが、晩期になり低段丘面・丘陵端部に遺跡が知られるようになる。前岡遺跡も同様な立地の遺跡であり、住居は検出できなかったが、稲作の導入に伴って低地部へと進出した集落であると想像できる。

弥生時代前期から後期まではわずかな遺構と土器の小破片しか出土しておらず、遺跡の様相を知ることはできない。調査区外に中心があるか、古墳時代以降にほとんどが失われてしまったのであろう。

・古墳時代後期～奈良時代

遺構は竪穴住居４軒、掘立柱建物１棟、土坑５基、溝１条を検出した。

遺物は須恵器・土師器の他、甑、ミニチュア甑、手捏土器９点・鉄鏃１点が出土した。

竪穴住居SB01の配石遺構については次節で述べるが、祭祀を行っていたと想像される。

３軒の竪穴住居と掘立柱建物は７世紀中頃から８世紀にかけて、SB01・SB02・SB03・SH01の順で建てられたと考えられる。SB04は方位・遺物等からSB01と同時存在の可能性が考えられる。

これらの情報から当期の遺跡の全容を伺うことは困難である。しかし遺物全体を見渡したときに、検出された遺構時期である７世紀中頃から８世紀前半にピークがあり、６世紀後半から８世紀を通じた期間が集落としての存続期間であると見て取れる。

包含層ではあるが鉄鏃１点が出土している。古代の建築儀礼に鉄鏃が用いられることがあり、その中でも広根（平根）式鏃は儀仗的性格が強いと考えられている（松村1995）。この鉄鏃も建築儀礼に関わる遺物である可能性がある。

・中世

中世と推測される遺構としては、掘立柱建物５棟、柵列１列、土坑墓３基、土坑３基、溝２条が検出された。いずれも15世紀代と考えられる。その他、近世・時期不明を含め多くのピット、土坑、溝が検出されている。

建物は２群に分けられ、先行する柵を伴う１棟は土坑墓を伴う屋敷を構成していたと考えられる。後出する４棟はほぼ南北方向に向きをそろえているが、２時期の可能性も持つ。

土坑墓の銭貨には被熱の跡がみられるものがあることから、火葬が行われていたと考えられる。土坑には炭化物・焼土等は検出されないことから、別の場所で火葬され、遺骨などとともに銭貨・かわらけなどが埋葬されたのであろう。墓の配置としては、掘立柱建物を取り巻くように配置されている。

第２節　竪穴住居内配石について

今回の調査において古墳時代後期の竪穴住居SB01において、石が何らかの意図を持って並べられた状態で検出された。これについて多少考えてみたい。

まず、検出状況を確認する。SB01は調査区の南西で検出され、5.0ｍ× 5.2ｍのやや角の取れた方形である。方角は軸が南北からやや西にふれている。柱穴は４本確認された。

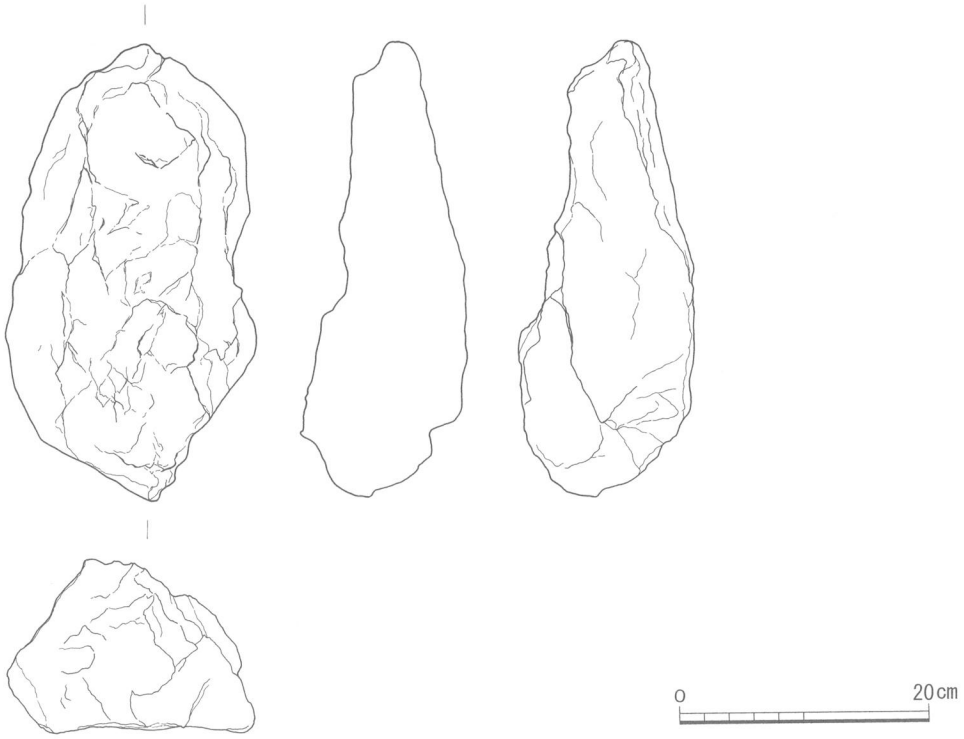
北東隅近く、床面から須恵器坏蓋が３点、２点は伏せた状態で、１点は上を向いた状態で出土した。この遺物は７世紀中頃と考えられる。他に北東の壁溝からは甑の破片が出土している。

壁溝が１周回ったように検出され、配石は北壁中央、壁溝がやや幅を広げたようになっている部分に、長軸を溝に直行させ、７つの石が並べられていた。石材は基盤層中に含まれる石灰岩・チャートである。大きさは長さが20～35㎝、幅10～25㎝、厚さは８～10㎝ほどである。中央の石が最大で、両端に向かって小さくなるように石を配している。西から２・３番目の石では南側の下に、長さ約20㎝、幅約10㎝、厚さ約５㎝の板状の薄い石がかませてある。東端の石（38-1）は片側から熱を受けている。他の石は熱を受けた形跡はない。（この石は台石であるが、遺跡の状況からは配石に使われる以前に台石として使用された石を偶然使った可能性が高いと考えられる。）

配石の中央南側には深さ20㎝の窪みがあり、左右の壁は焼けている。

配石の位置としては竪穴内北壁中央で、本来ならば竈が作られる位置である。竈が築かれていたのであれば、竈を壊した後、壁溝をつなげるように溝を掘り、そこに石を並べたと考えられる。配石の南側の被熱がその痕跡である可能性が高い。また後に述べるように、竈は初めから無く、住居ではない特殊な建物であった可能性も否定できない。その場合、被熱は配石に関連して火が使われたのであろう。

配石の状況からは７つの石の上面を平らにすること、７つをきれいにバランスよく並べることを意識している。ただし中央の石は他の石に比べ平坦ではなく、南に向けられている部分は少し突起している（第45図）。



第45図　SB01配石実測図

7つの石は竈の心材である可能性も否定できず、その場合は竈の廃棄に伴う祭祀が考えられる（寺沢1986、堤1991）。しかし、それぞれの石を観察すると、中央の石は先にみたように角張っているなど、竈の心材とは認めにくい。また、前岡遺跡の他の住居、周辺地域での調査ではこの時期に石を心材とした竈は検出されていない。よって配石用に新たに採集してきたものと考えられる。

そこで注目したいのが、井伊谷川の支流である神宮寺川の左岸に位置する天白遺跡（天白磐座遺跡）である。そこでは古墳時代前期から中世にかけて磐座による祭祀が行われ続けている。そこでの信仰の対象は地中より屹立した巨岩群である。目を転じてこの配石を眺めた場合、中央の石は他の石が平坦なのと違い中央部が尖っている。それはこれらの巨岩をイメージしているのではないだろうか。SB01の方向、配石の方向が北からわずかに西にふれていて、天白遺跡の方向とほぼ一致するのはあながち偶然とはいえないかもしれない。

井伊谷盆地の空間利用としては、東側丘陵が古墳が築かれた墓域、北および西の段丘上が生活域である（辰巳他1992）。その生活域に水を供給するのが神宮寺川で、天白遺跡から水が引かれ、生活・灌漑に利用されたと想像される。

天白遺跡が水源の祭祀であるのに対し、前岡遺跡は井伊谷盆地の南端、水の出口に当たる。天白遺跡より流れる水による恩恵を受ける最期の地点といえよう。そのような地点で、水源である天白遺跡の磐座を集落内で再現し、祭祀を行ったのではないだろうか。床面から出土している須恵器坏蓋は祭祀に使われたものと考えられる。その場合このSB01は住居ではなく、特別な建物である可能性も考えなくてはならないであろう。ただし、SB01と同時存在の住居は見つかっておらず、集落としての全体像、集落内におけるSB01の位置がどのようなものであるかもわからず、性格を決定するには至らない。

ここでは可能性として述べたにすぎず、その可能性を検証するには、今後の井伊谷の地、及び他地域での調査例の増加が望まれる。

参考文献

足立鍬太郎他　1930：静岡県史第一巻。

井鍋誉之　2003：的場遺跡　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第140集。

遠藤喜和・丸杉俊一郎　1998：井通遺跡を中心とした浜名湖北東岸地域の地理的・歴史的環境の予察。静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要,6.1-29頁。

大谷宏治　2003：遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義。静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要,10.175-188頁。

梶田博之・栗原雅也　1993：川久保船渡遺跡。

勝又直人　1996：角江遺跡Ⅱ　遺物編３　石器・金属製品他　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第69集。

加納俊介・石黒立人編　2002：弥生土器の様式と編年　東海編。

川江秀孝　1979：静岡県下の須恵器について。静岡県考古学会シンポジューム,2.9-22頁。

木村文雅編　1986：細江町史　資料編６。

佐藤由紀男　1996：遠江・駿河（中期）。YAY！弥生土器を語る会20回到達記念論文集。

佐藤由紀男・古環境研究所　1995：川山遺跡Ⅱ。

鈴木敏則・向坂鋼二他　1998：梶子北遺跡　遺物編（本文）。

辰巳和弘他　1992：天白磐座遺跡。

堤　隆　1991：住居廃絶時における竈解体をめぐって。東海史学,25.93-114頁。

寺沢知子　1986：祭祀の変化と民衆。季刊考古学,16.56-61頁。

松村恵司　1995：鉄鏃と建築儀礼。山梨県考古学協会誌,7.17-20頁。

引佐町　1992：引佐町史　上巻。

蜆塚遺跡調査団　1960：蜆塚遺跡　その第三次発掘調査。

静岡県　1990：静岡県史　資料編１　考古一。

静岡県　1990：静岡県史　資料編２　考古二。

静岡県　1992：静岡県史　資料編３　考古三。

静岡県　1994：静岡県史　通史編　原始・古代。

静岡県教育委員会　1981：静岡県の中世城館跡。

静岡県教育委員会　1989：静岡県文化財地図Ⅱ。

静岡県教育委員会　1989：静岡県文化財地名表Ⅱ。

浜松市博物館　1989：都田地区発掘調査報告書　上巻　本文編。

浜松市博物館　1990：都田地区発掘調査報告書　下巻　本文編。

あとがき

前岡遺跡・今城の発掘調査・資料整理に際し、以下の方々から多くのご教示・ご指導をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

安藤寛　岩瀬彰利　川添和暁　工藤基志　栗原雅也　佐藤由紀男　柴田稔　鈴木敏則　戸田剛
戸田哲也　戸塚洋輔　永井宏幸　平野吾郎　堀木真美子　松井一明　向坂鋼二　森泰通

写　真　図　版

図版 1

前岡遺跡 ↓ ⇩ 今城

1　遺跡遠景（南より）

2　前岡遺跡　調査区全景（北より）

1　調査区完掘状況（東半・上が北）

2　調査区完掘状況（西半・上が北）

図版 3

1　SZ01・SF25　遺物出土状況（東より）

2　SZ02　遺物出土状況（西より）

1　SF04　遺物出土状況（東より）

2　包含層　環状石斧出土状況（北より）

3　包含層　石剣出土状況（北より）

図版 5

1　竪穴住居群　完掘状況（南より）

2　SB01　完掘状況（南より）

1　SB01　配石検出状況（南より）

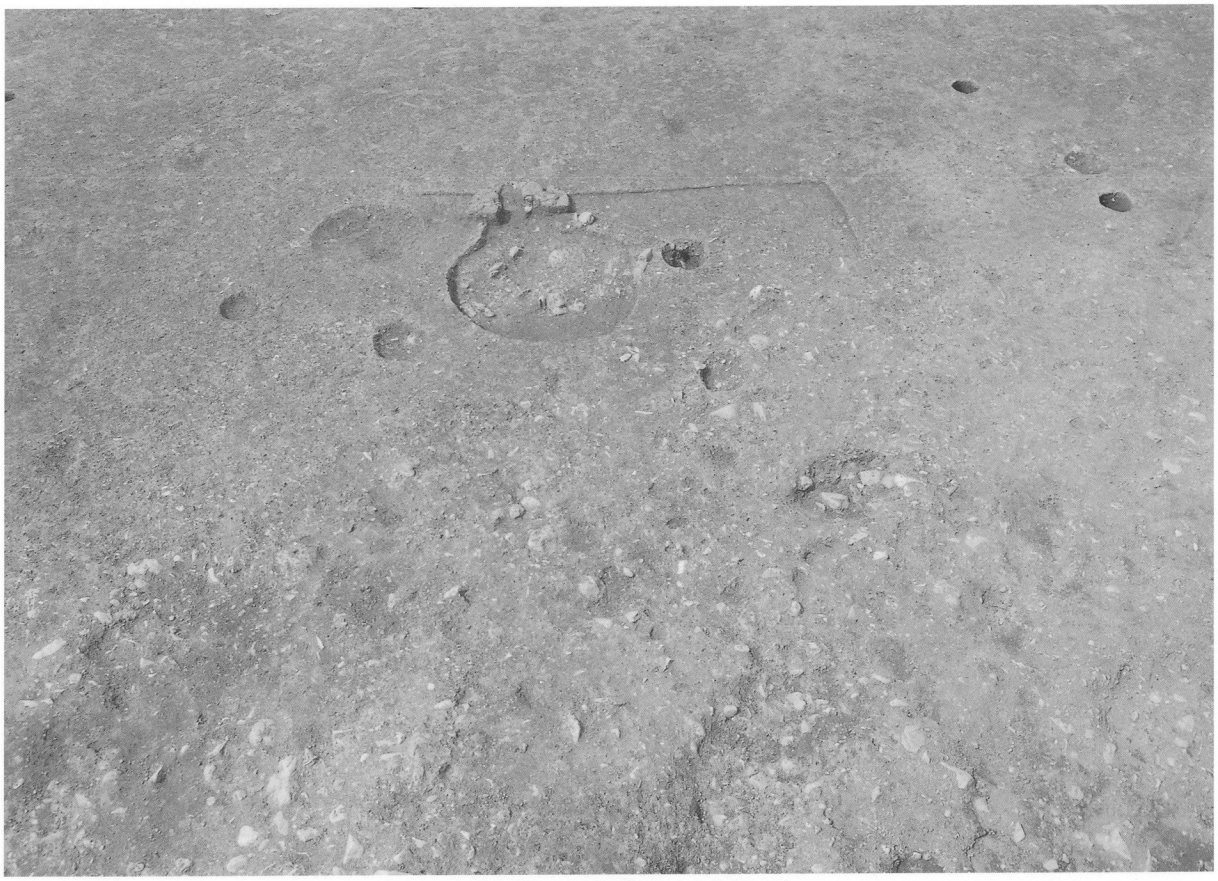
2　SB01　遺物出土状況 1（北より）

3　SB01　遺物出土状況 2（北より）

図版 7

1　SB02　完掘状況（南より）

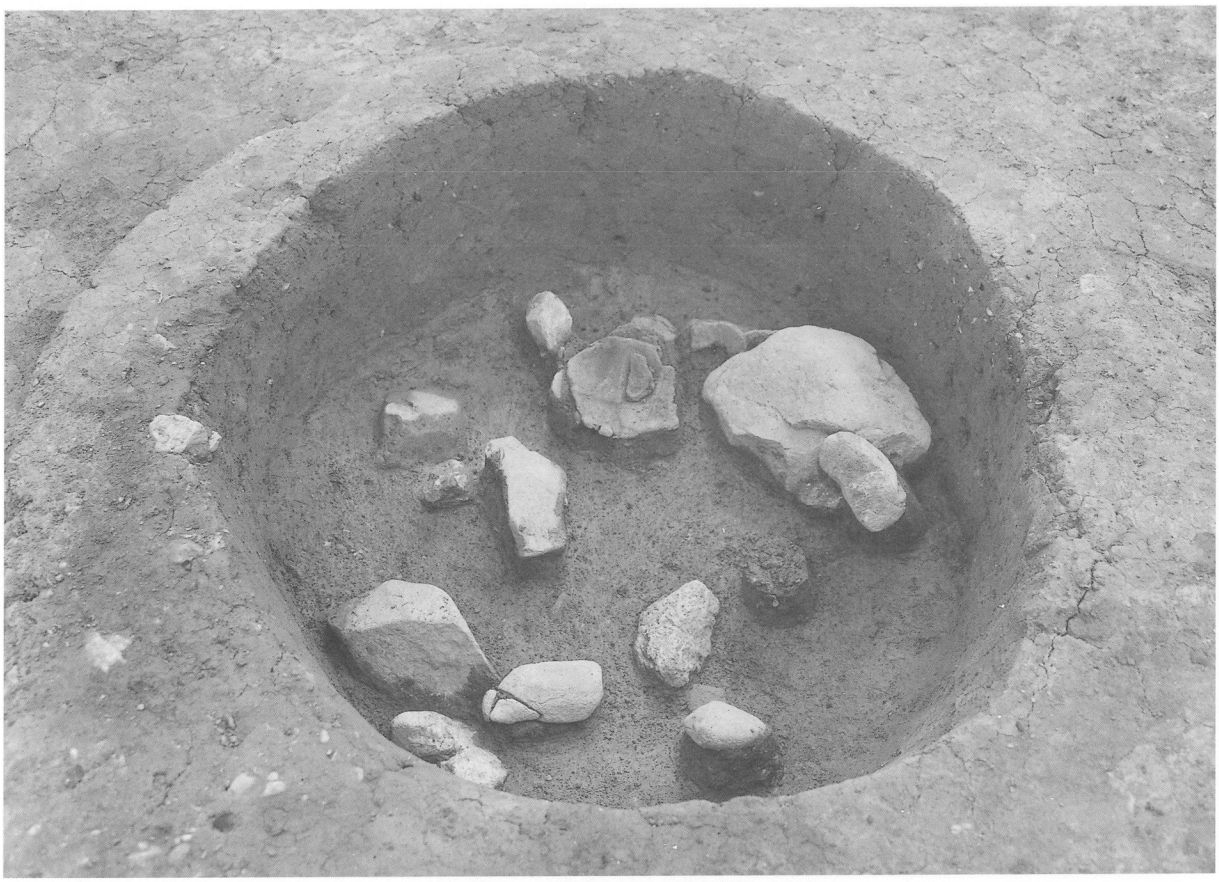
2　SB03　完掘状況（西より）



1　SB04　完掘状況（南より）

2　SH01　完掘状況（西より）

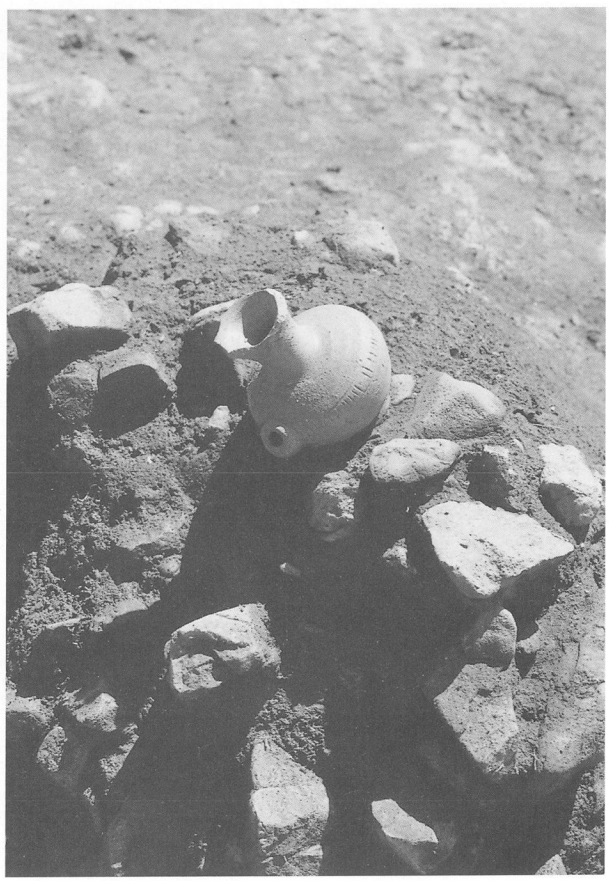
図版 9



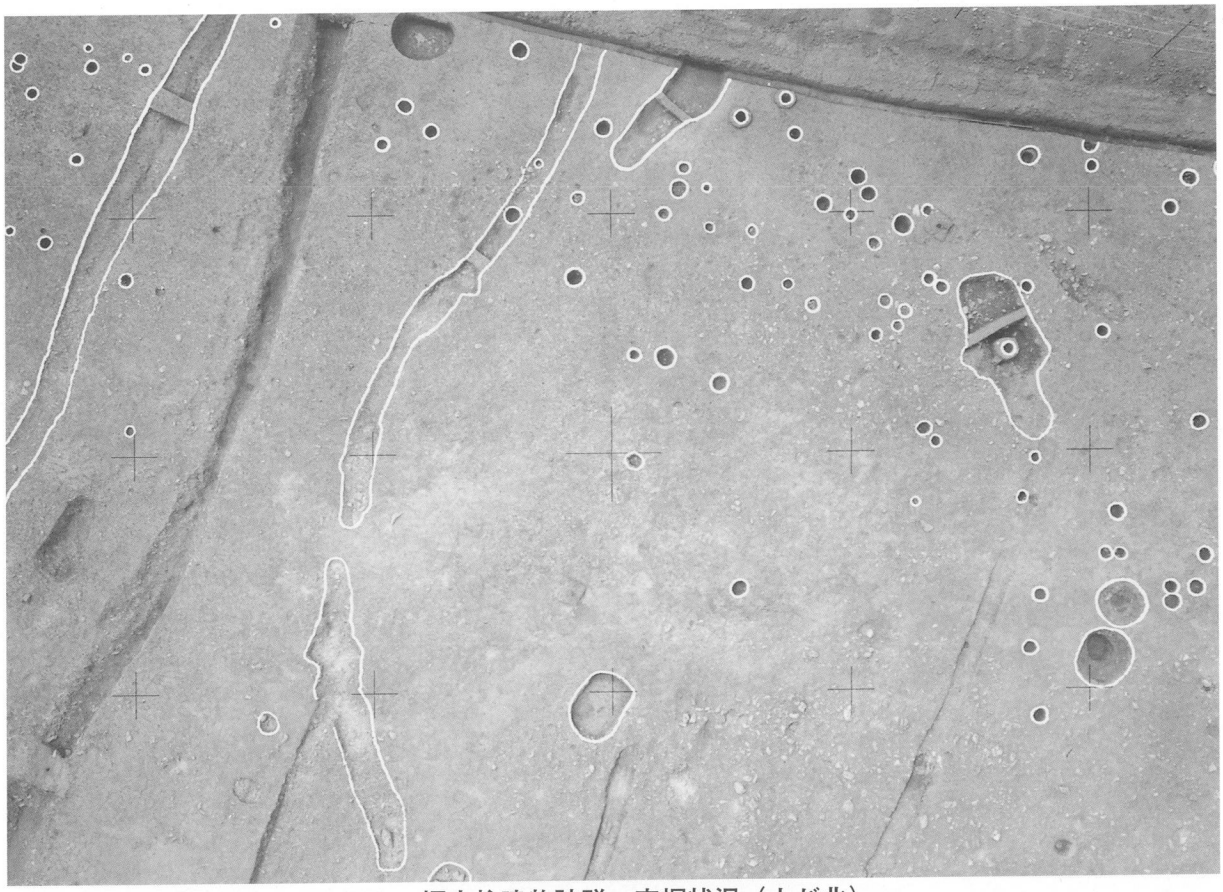
1　SF12　遺物出土状況（東より）

2　SF10　遺物出土状況（東より）

3　包含層　須恵器出土状況 1（南より）



4　包含層　須恵器出土状況 2（西より）

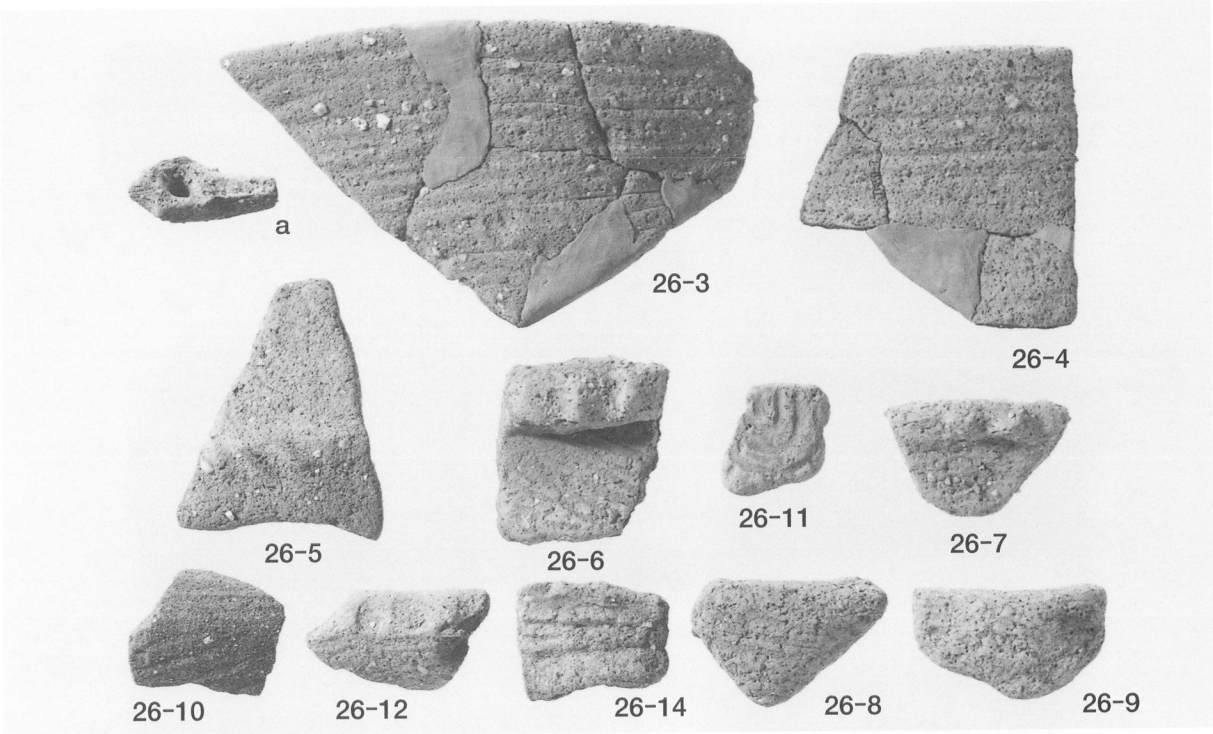


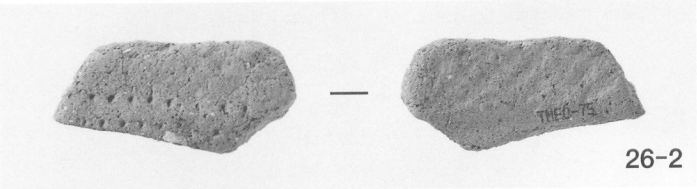
1　掘立柱建物跡群　完掘状況（上が北）

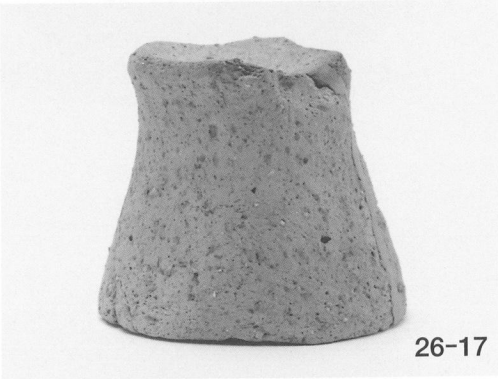
2　SH02　完掘状況（東より）

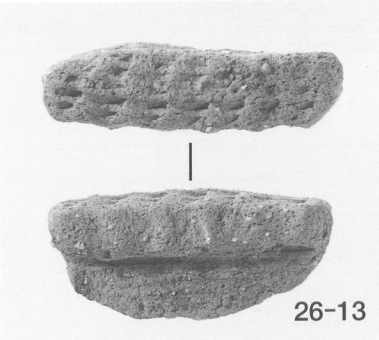
図版11

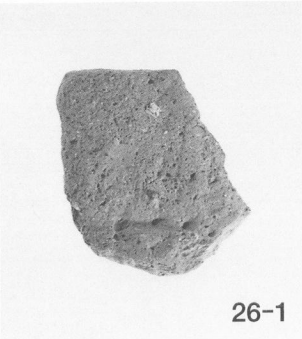
出土土器１（縄文時代～弥生時代）

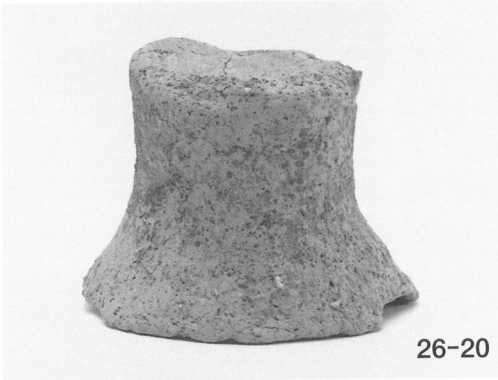








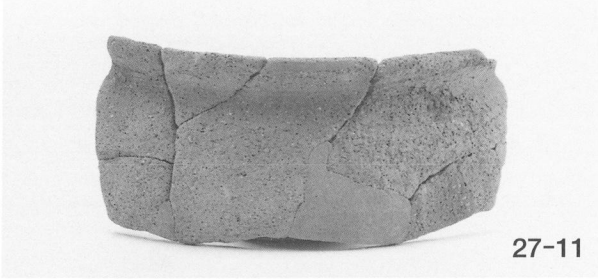




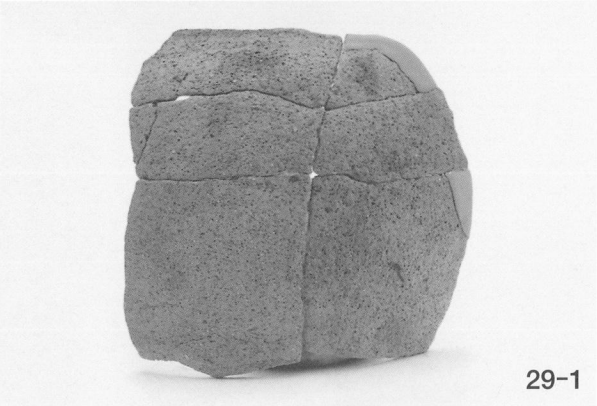
出土土器２（縄文時代～古墳時代）

図版13

27-1


27-11

27-2


29-1

27-3

29-4

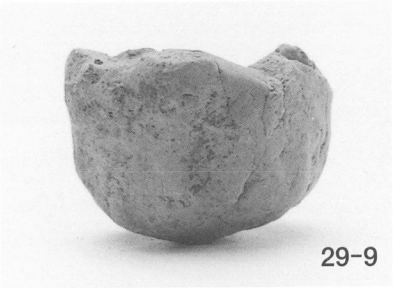
27-4

29-5

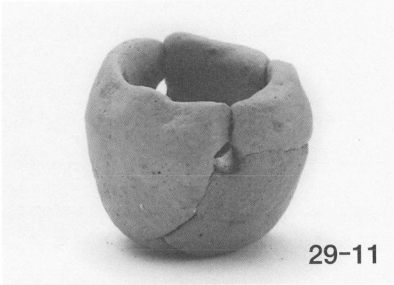
27-7

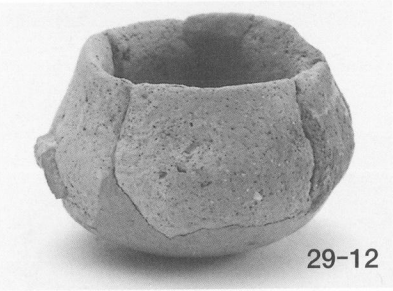
29-8

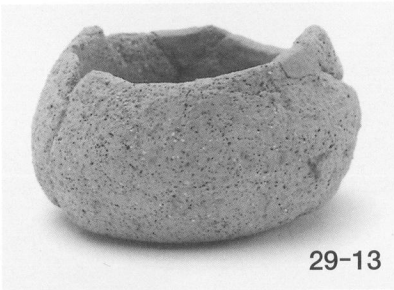
出土土器 3 （古墳時代～奈良時代）

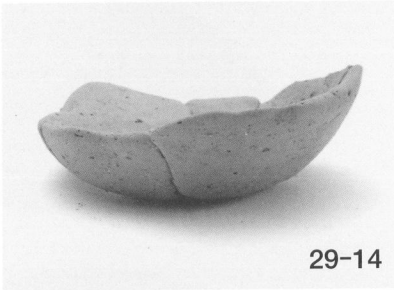

29-9

29-10

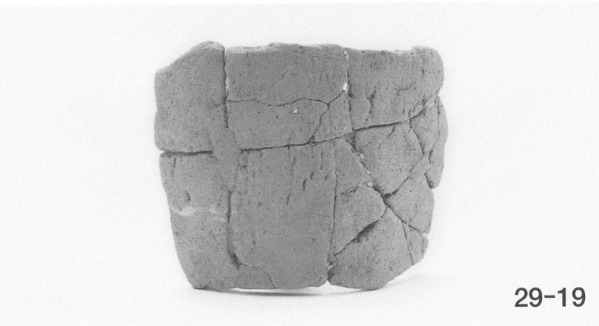

29-11

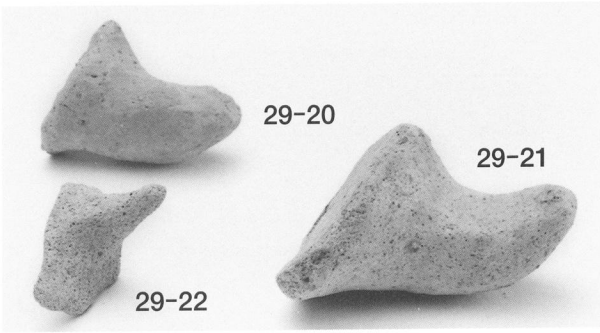

29-12


29-13


29-14

29-9～17


29-19


29-20
29-21
29-22

出土土器４（古墳時代～奈良時代）

図版15

30-1

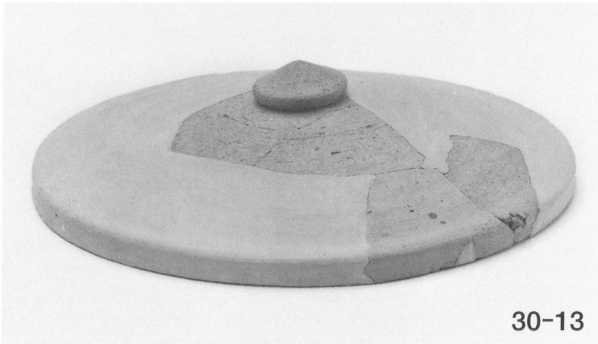
30-2

30-3

30-4

30-11

30-12


30-13

31-1

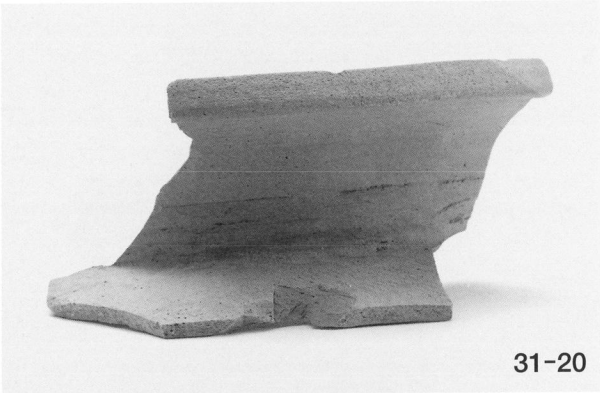
31-3

31-2

31-6

出土土器５（古墳時代～奈良時代）

31-17


31-20

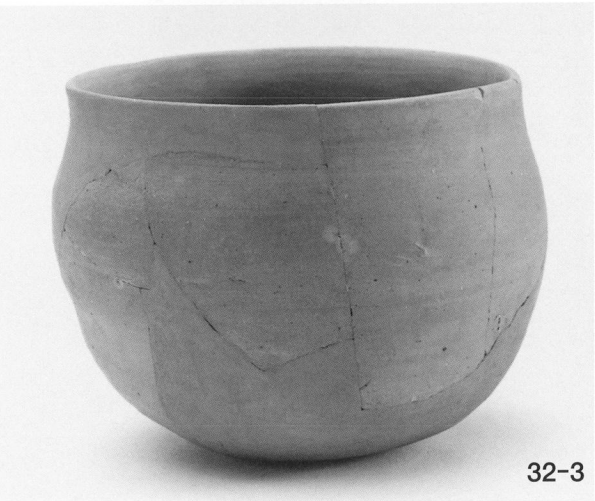
31-21

31-22

32-2

31-23

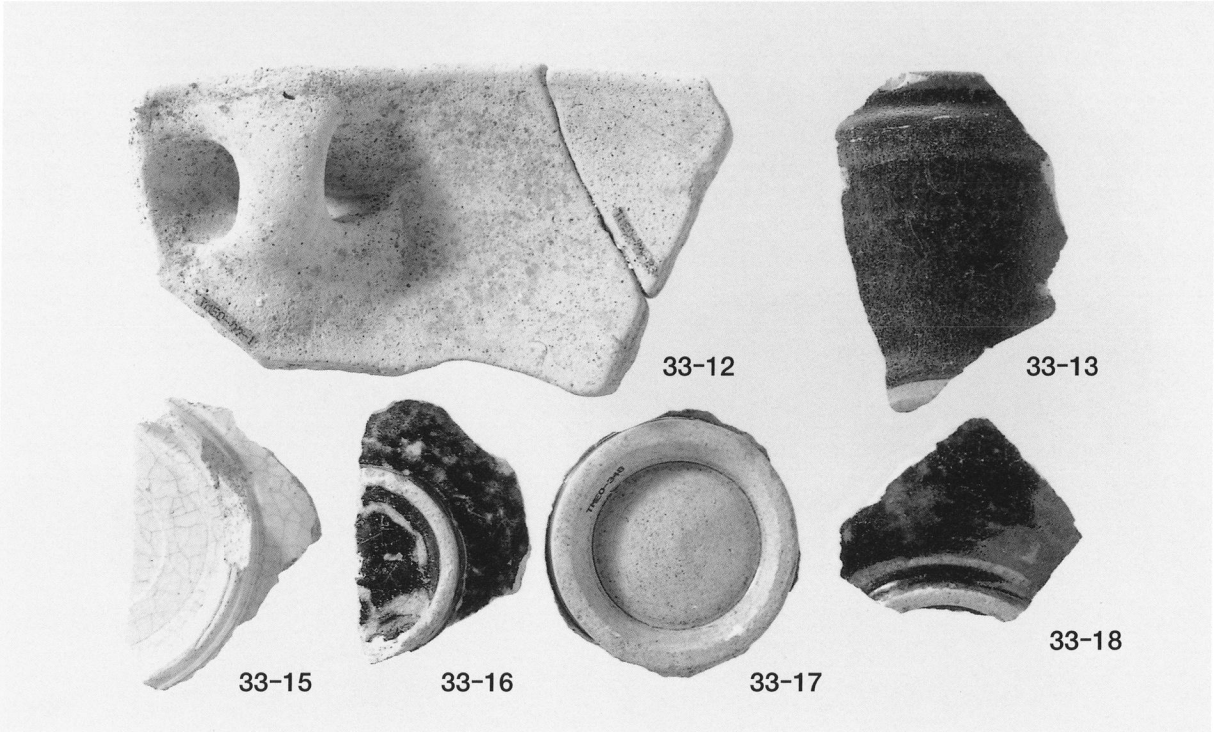
32-1


32-3

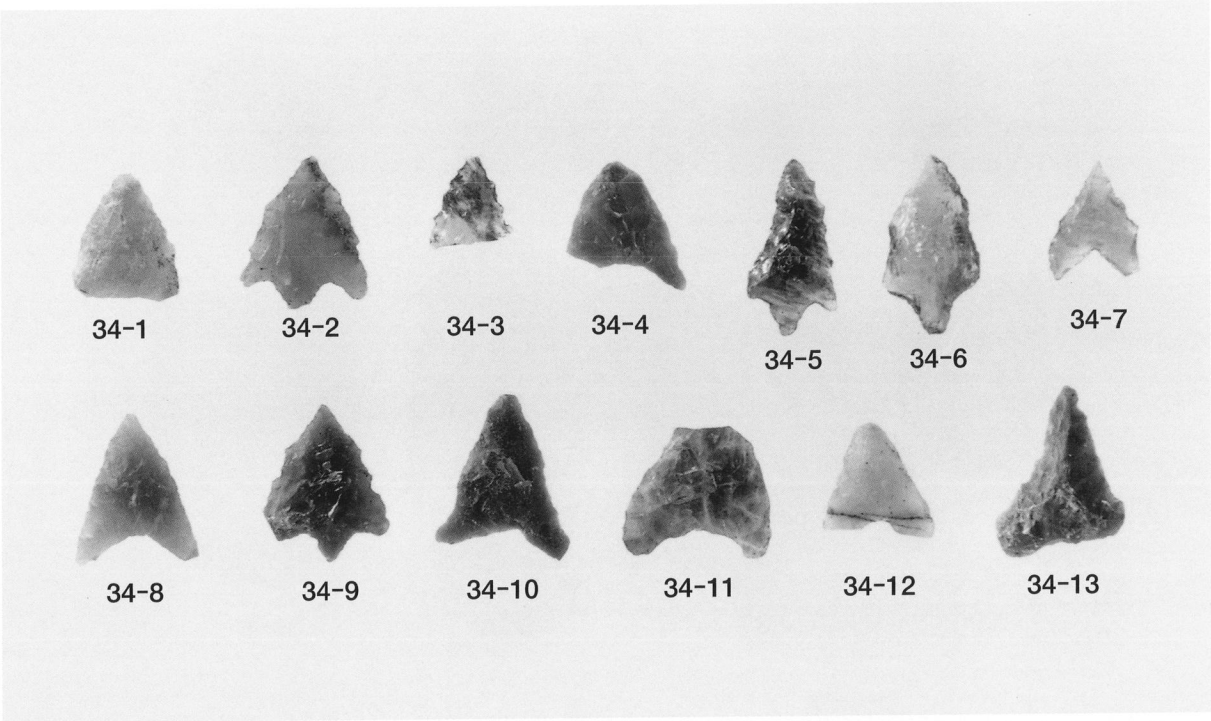
32-4

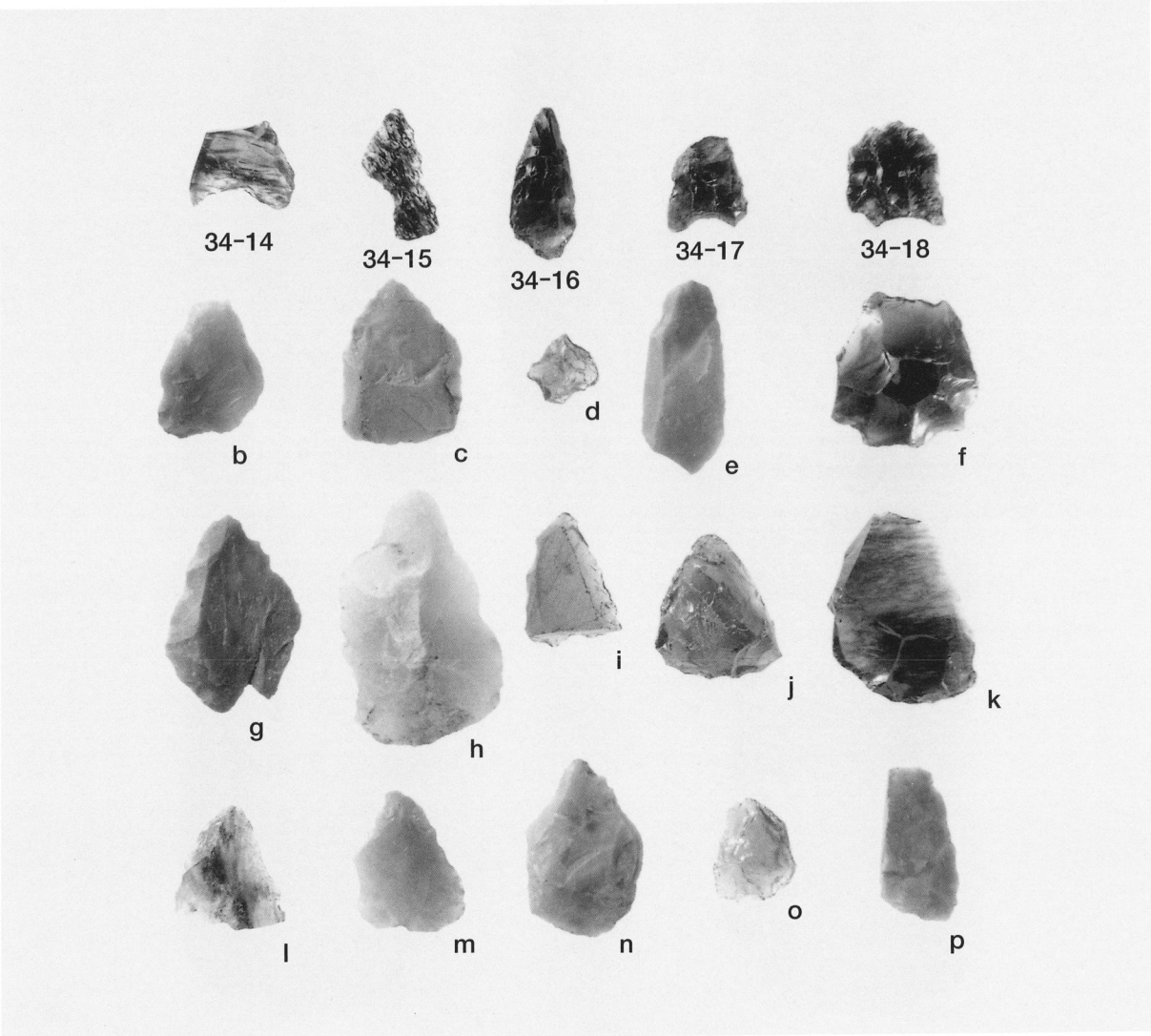
出土土器６（古墳時代～奈良時代）

図版17



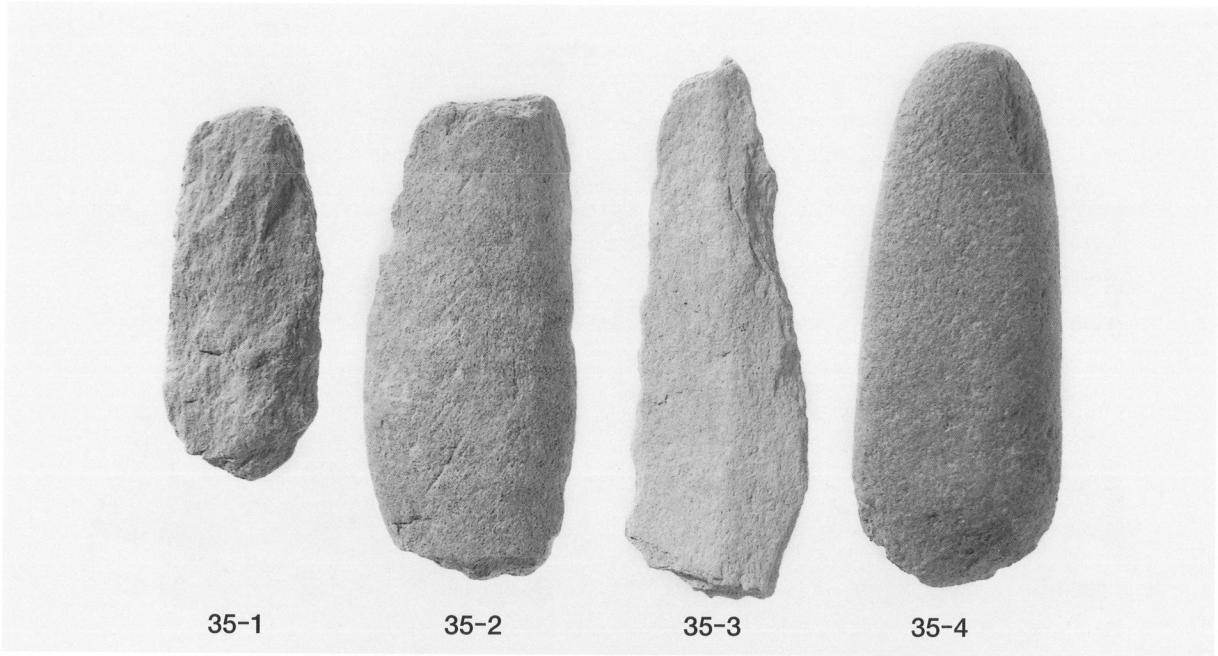
出土土器７（中・近世）

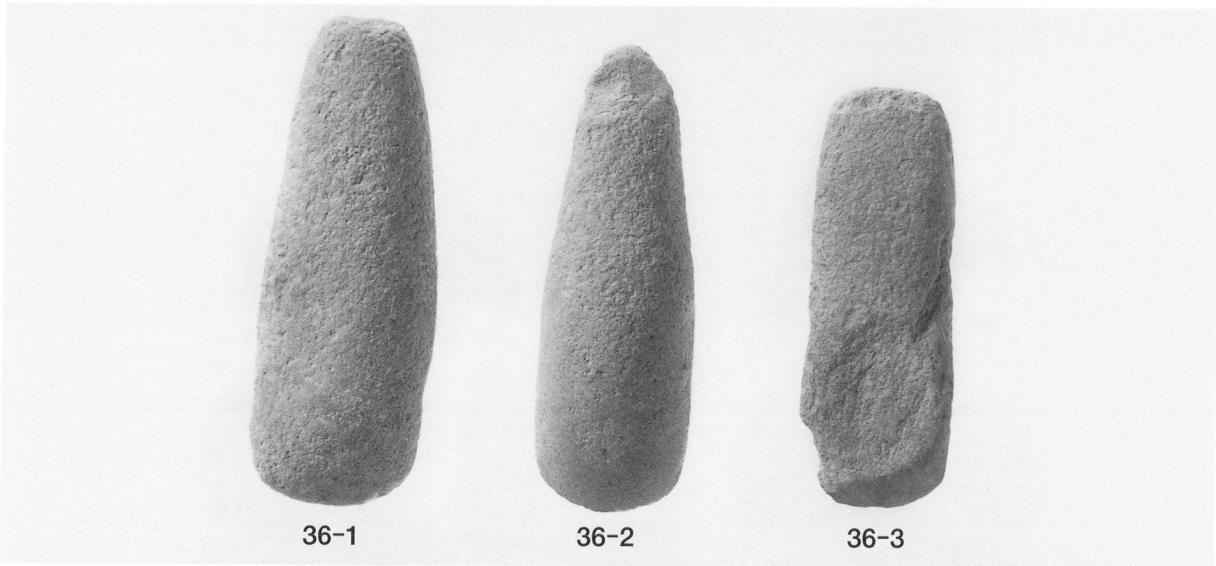

34-1
34-2
34-3
34-4
34-5
34-6
34-7
34-8
34-9
34-10
34-11
34-12
34-13

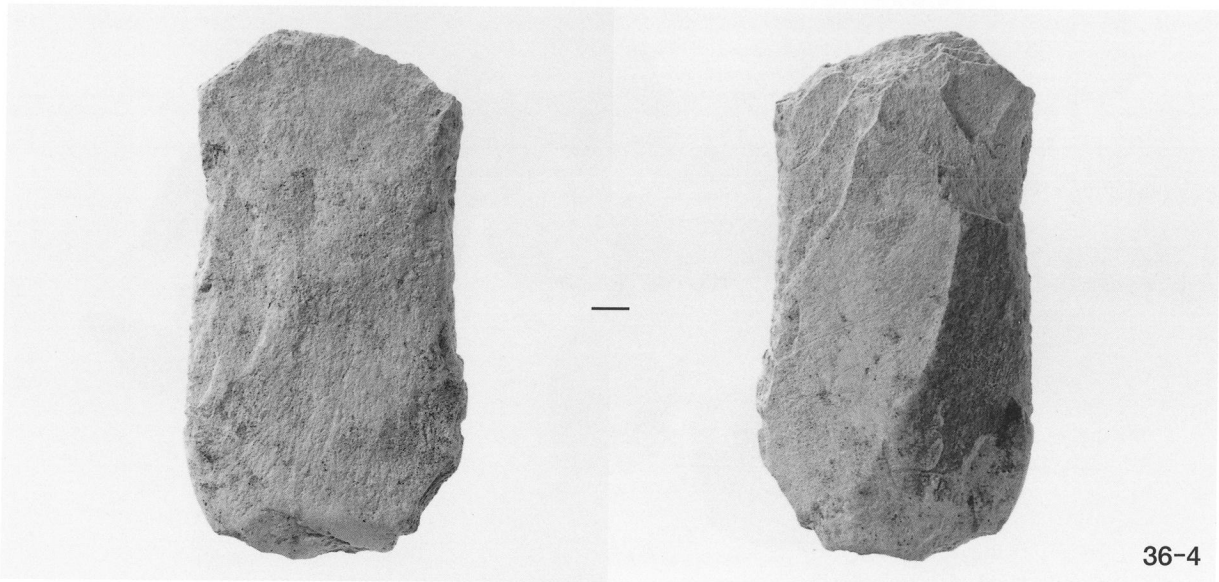

34-14
34-15
34-16
34-17
34-18
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p

出土石器１（石鏃・未成品）

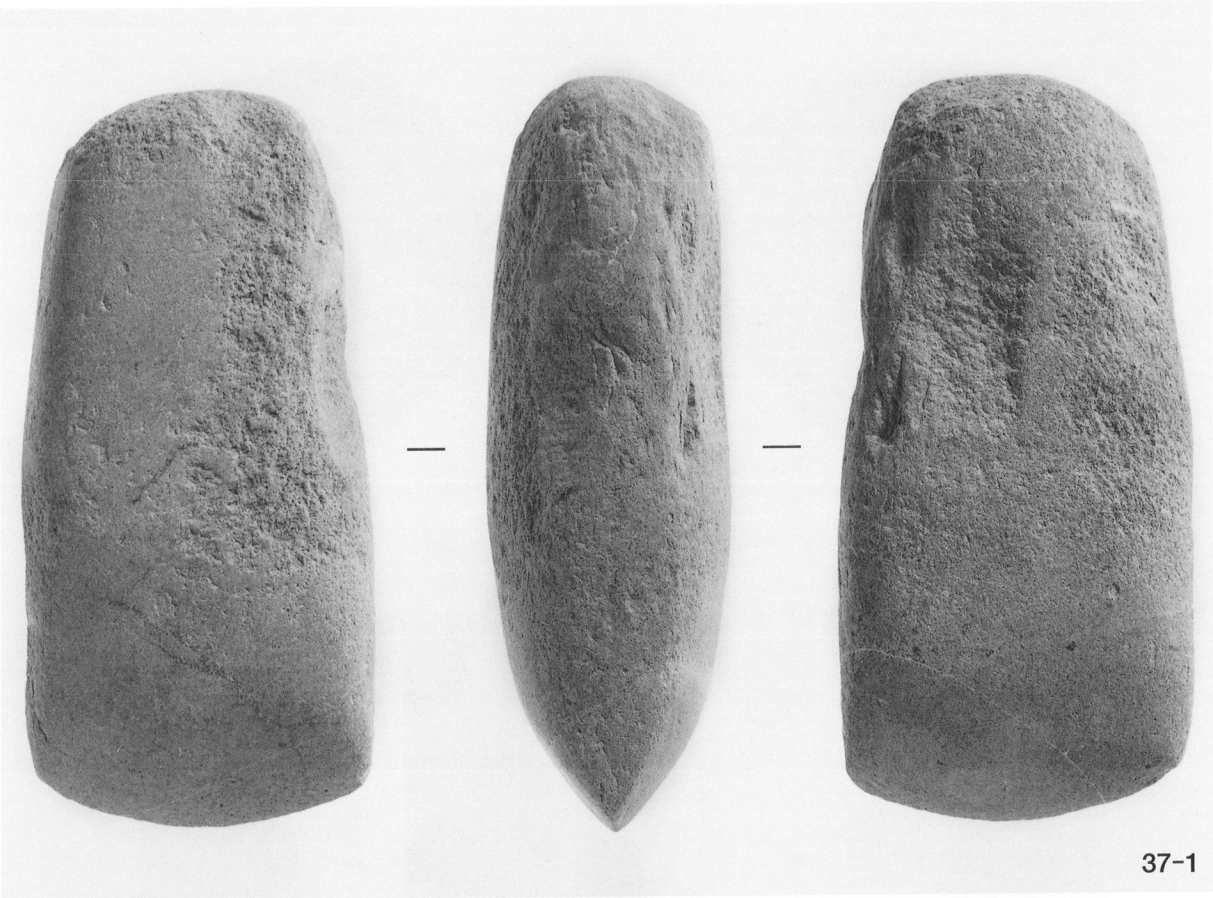
図版19





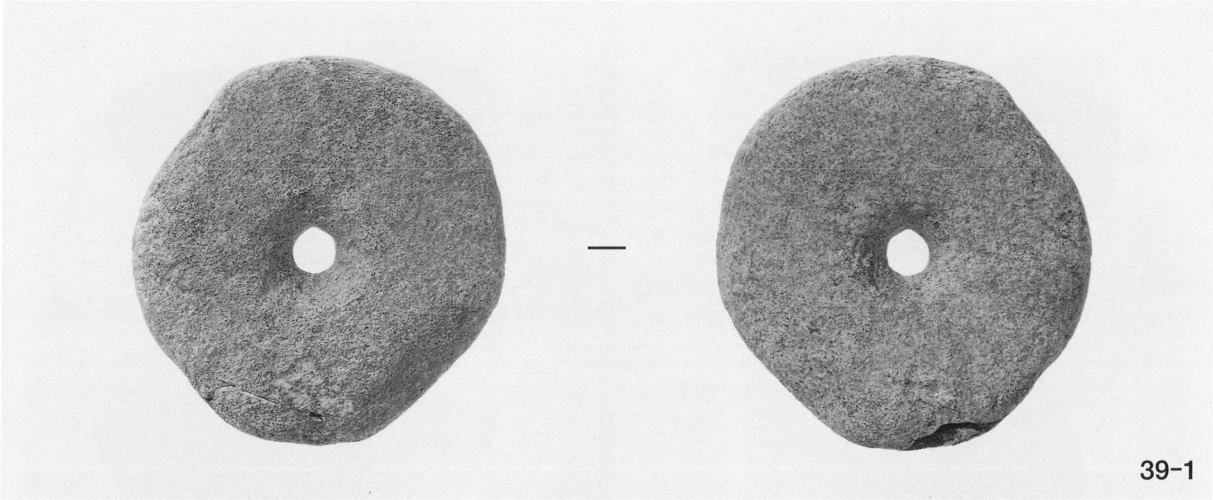


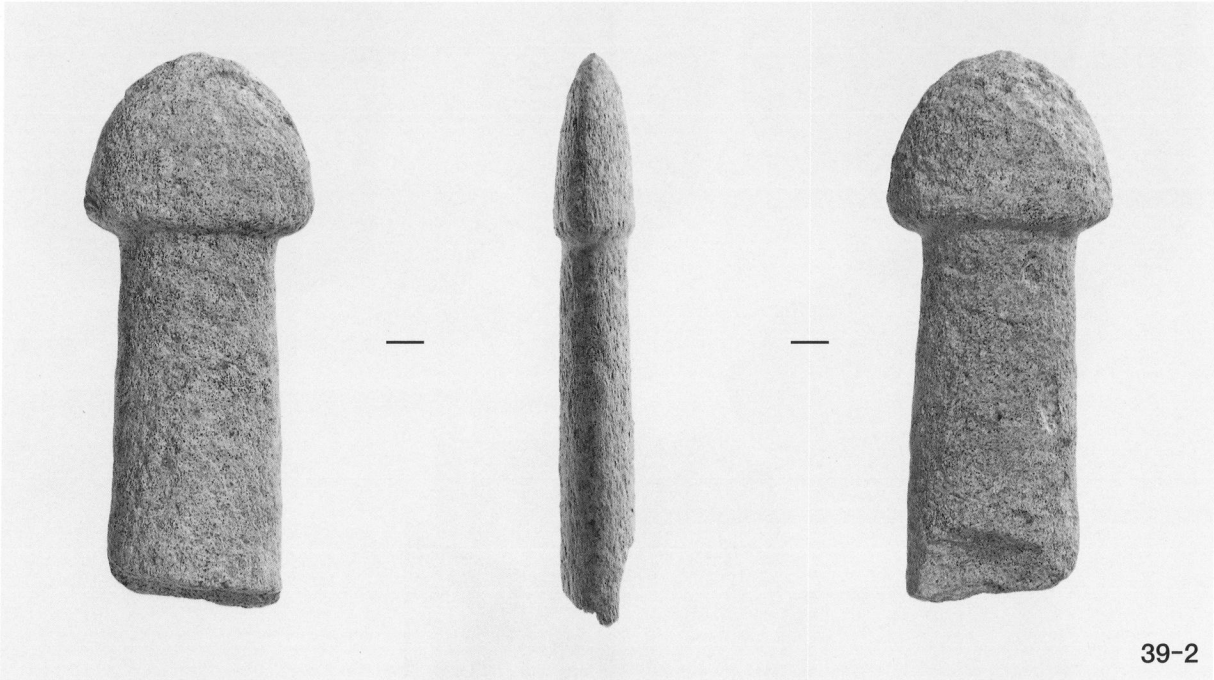
出土石器 2 （石斧）

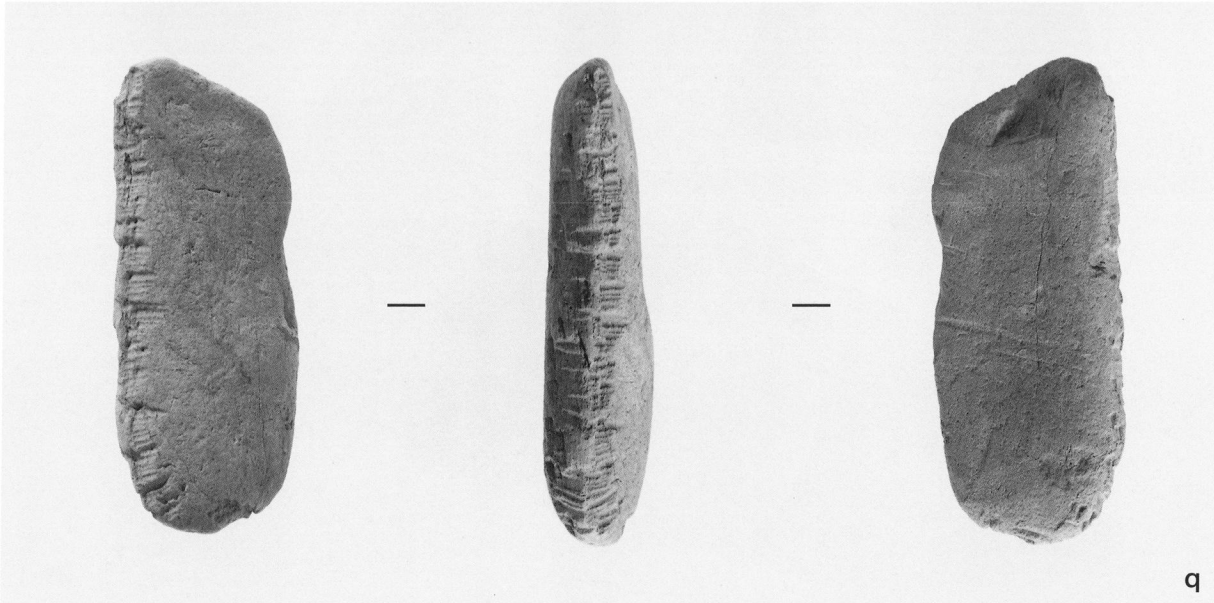


出土石器 3 （石斧・台石）

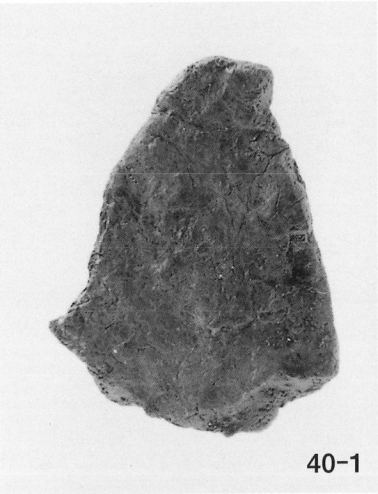
図版21

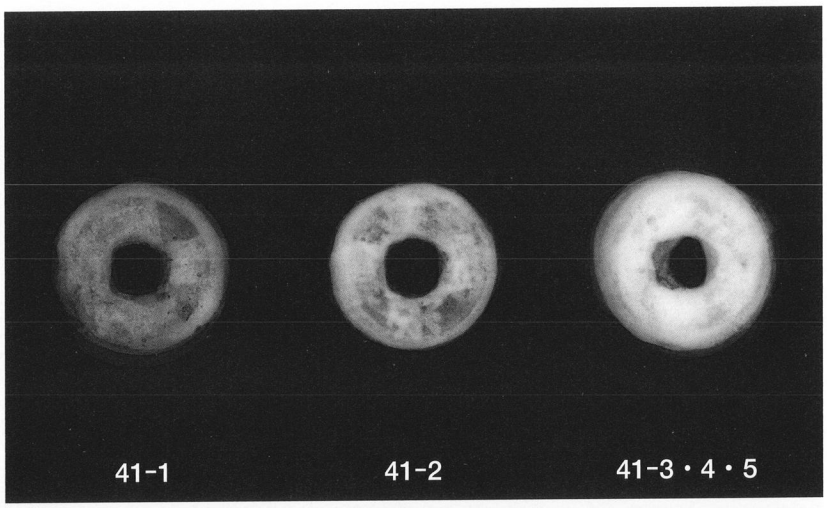


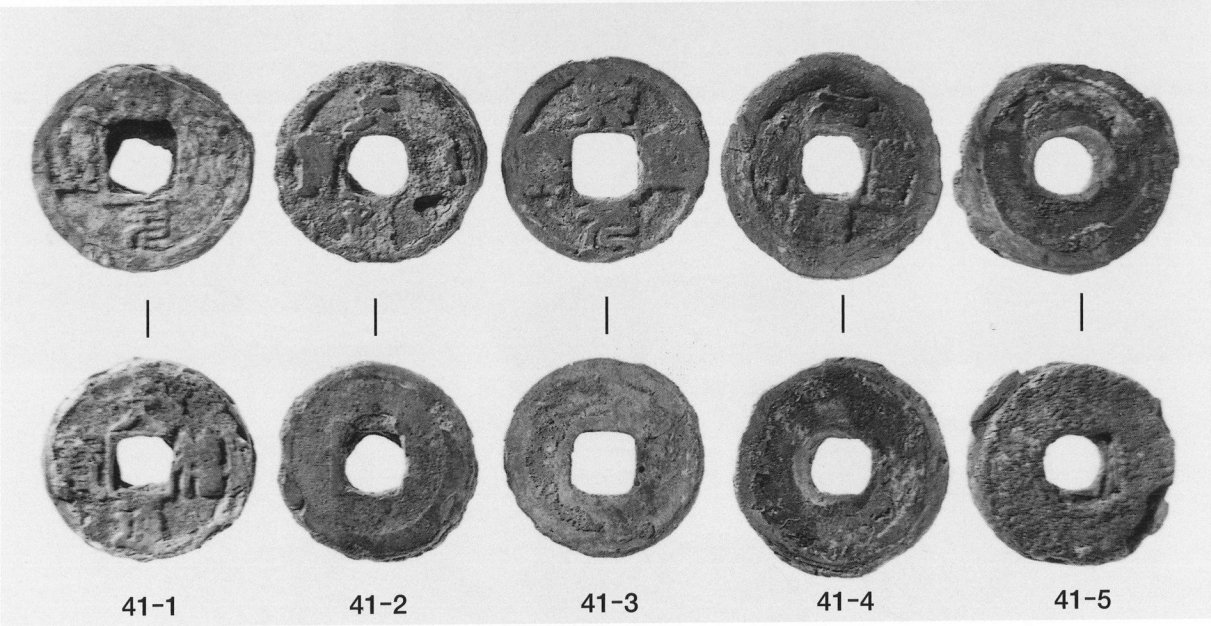




出土石器・石製品（環状石斧・石剣・不明石製品）



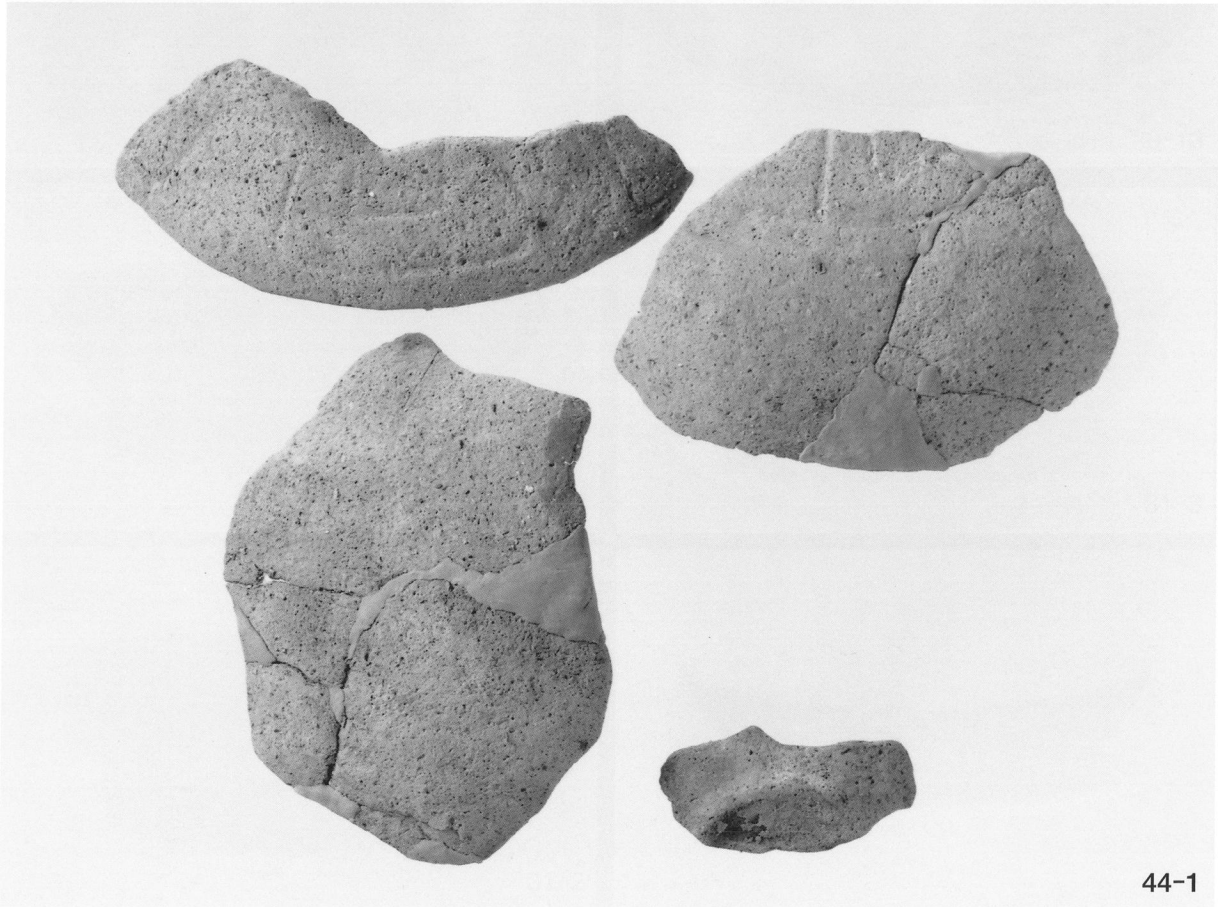




出土金属製品（鉄鏃・銭貨）

図版23　今城

1　今城　土坑　遺物出土状況（北より）



2　今城　出土土器

報告書抄録

ふりがな	まえおかいせき・いまじろ　いいのやがわりゅういきのいせき　いち
書名	前岡遺跡・今城　井伊谷川流域の遺跡　Ⅰ
副書名	平成16年度二級河川井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第158集
編著者名	小川和彦　蔵本俊明　大野勝美　松本寿子
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　TEL054-262-4261（代）
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地形				
まえおかいせき 前岡遺跡	しずおかけんいなさぐん 静岡県引佐郡 いなさちょういいのや 引佐町井伊谷 あざまえおか 字前岡	22522		34度 49分 14秒	137度 39分 54秒	20040601 ～ 20040831	2,860㎡	井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
いまじろ 今城	しずおかけんいなさぐん 静岡県引佐郡 ほそえちょういつかいち 細江町五日市 あざいまじろ 字今城	22521	20	34度 49分 10秒	137度 39分 50秒	20030312 ～ 20030331	75㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前岡遺跡	集落 墓	縄文時代中期 ～ 後期	なし	縄文土器片（五領ヶ台式 併行2点、後期1点）	
		縄文時代晩期 ～ 弥生時代中期	土坑4基 土器棺墓2基 溝1条 ピット2基	土器　石鏃13点　未成品20点 打製石斧4点　磨製石斧4点 環状石斧1点　石剣1点	縄文時代から弥生時代の移行期の土器棺
		弥生時代中期 ～ 古墳時代前期	土坑2基	土器　太型蛤刃石斧1点	
		古墳時代後期 ～ 奈良時代	竪穴住居跡4軒 掘立柱建物跡1棟 土坑5基 溝1条	須恵器（坏身、坏蓋、瑤等） 土師器（坏身、甕、甑等） 手捏土器9点 鉄鏃1点	竪穴住居内の配石遺構
		中世 ～ 近世	掘立柱建物跡5棟 柵列1列 土坑3基 土坑墓3基 溝2条 ピット多数	陶磁器（渥美・湖西、龍泉窯系、古瀬戸、瀬戸美濃、常滑） 土師器（内耳鍋） かわらけ 土錘1点　銭貨10点	15世紀の屋敷
		不明	土坑 溝　他	台石（縄文時代～古墳時代?） 不明石製品1点	
今城	城館 集落	弥生時代中期	土坑1基	弥生土器1点（嶺田式?）	
		中世	なし	陶器1点（志戸呂）	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第158集

前岡遺跡・今城

井伊谷川流域の遺跡　Ⅰ

平成16年度二級河川井伊谷川住宅市街地基盤整備（広域都市）
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年3月31日発行

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23－20
TEL　054-262-4261（代）

印　刷　所　東洋印刷株式会社
〒430-0856　静岡県浜松市中島三丁目17番25号
TEL　053-461-5581（代）